AVマルチチャンネルアンプ

VSX-AX3i

ホームシアター入門
各部の名称
接続
基本操作
応用操作
設定
いろいろな機能
リモコン
参考／技術資料
困ったとき

インターネットによる登録のお願い

http://www3.pioneer.co.jp/

お買い上げの製品について、上記URL「お客様のページ」でお客様登録をお願いします。

この「お客様のページ」は、お客様とのコミュニケーションを目的としたウェブサイトです。新規登録されたお客様にはID・パスワードを発行させていただき、新製品のカタログや取扱説明書のダウンロード、メールマガジンの購読など各種サービスをご利用いただけます。

取扱説明書

安全上のご注意

●安全にお使いいただくために、必ずお守りください。
●ご使用の前にこの「安全上のご注意」をよくお読みのうえ、正しくお使いください。

この取扱説明書および製品への表示は、製品を安全に正しくお使いいただき、あなたや他の人々への危害や財産への損害を未然に防止するために、いろいろな絵表示をしています。その表示と意味は次のようになっています。
内容をよく理解してから本文をお読みください。

警告

この表示を無視して、誤った取り扱いをすると、人が死亡または重傷を負う可能性が想定される内容を示しています。

注意

この表示を無視して、誤った取り扱いをすると、人が損害を負う可能性が想定される内容および物的損害のみの発生が想定される内容を示しています。

絵表示の例

△記号は注意(警告を含む)しなければならない内容であることを示しています。
図の中に具体的な注意内容(左図の場合は感電注意)が描かれています。

⃠記号は禁止(やってはいけないこと)を示しています。
図の中や近くに具体的な禁止内容(左図の場合は分解禁止)が描かれています。

●記号は行動を強制したり指示する内容を示しています。
図の中に具体的な指示内容(左図の場合は電源プラグをコンセントから抜け)が描かれています。

⚠警告

異常時の処置

- 万一煙が出ている、変なにおいや音がするなどの異常状態のまま使用すると火災・感電の原因となります。すぐに機器本体の電源スイッチを切り、必ず電源プラグをコンセントから抜いてください。煙が出なくなるのを確認して販売店に修理をご依頼ください。お客様による修理は危険ですから絶対おやめください。

- 万一内部に水や異物等が入った場合は、まず機器本体の電源スイッチを切り、電源プラグをコンセントから抜いて販売店にご連絡ください。そのまま使用すると火災・感電の原因となります。

- 万一本機を落としたり、カバーを破損した場合は、機器本体の電源スイッチを切り、電源プラグをコンセントから抜いて販売店にご連絡ください。そのまま使用すると火災・感電の原因となります。

設置

- 電源プラグの刃および刃の付近にほこりや金属物が付着している場合は、電源プラグを抜いてから乾いた布で取り除いてください。そのまま使用すると火災・感電の原因となります。

- 電源コードの上に重いものをのせたり、コードが本機の下敷きにならないようにしてください。また、電源コードが引っ張られないようにしてください。コードが傷ついて、火災・感電の原因となります。コードの上を敷物などで覆うことにより、それに気付かず、重い物をのせてしまうことがあります。

- 放熱をよくするため他の機器、壁等から間隔をとり、またラックに入れる時はすき間をあけてください。また、次のような使い方で通風孔をふさがないでください。内部に熱がこもり、火災の原因となることがあります。
  →あおむけや横倒し、逆さまにする。
  →押し入れなど、風通しの悪い狭いところに押し込む。
  →じゅうたんやふとんの上に置く。
  テーブルクロスなどをかける。

- **着脱式の電源コード(インレットタイプ)が付属している場合のご注意:**
  付属の電源コードはこの機器のみで使用することを目的とした専用部品です。他の電気製品ではご使用になれません。他の電気製品で使用した場合、発熱により火災・感電の原因となることがあります。また電源コードは本製品に付属のもの以外は使用しないでください。他の電源コードを使用した場合、この機器の本来の性能が出ないことや、電流容量不足による発熱から火災・感電の原因となることがあります。

使用環境

- この機器に水が入ったり、ぬらさないようにご注意ください。火災・感電の原因となります。雨天、降雪中、海岸、水辺での使用は特にご注意ください。

- 風呂場・シャワー室等では使用しないでください。火災・感電の原因となります。

- 表示された電源電圧（交流100ボルト50/60 Hz）以外の電圧で使用しないでください。火災・感電の原因となります。

- この機器を使用できるのは日本国内のみです。船舶などの直流（DC）電源には接続しないでください。火災の原因となります。

使用方法

- 本機の上に花びん、植木鉢、コップ、化粧品、薬品や水などの入った容器または小さな金属物をおかないでください。こぼれたり、中に入った場合、火災・感電の原因となります。

- ぬれた手で（電源）プラグを抜き差ししないでください。感電の原因となることがあります。

- 本機の通風孔などから、内部に金属類や燃えやすいものなどを差し込んだり、落とし込んだりしないでください。火災・感電の原因となります。特にお子様のいるご家庭ではご注意ください。

- 本機のカバーを外したり、改造したりしないでください。内部には電圧の高い部分があり、火災・感電の原因となります。内部の点検・整備・修理は販売店にご依頼ください。

- 電源コードを傷つけたり、加工したり、無理に曲げたり、ねじったり、ひっぱったり、加熱したりしないでください。コードが破損して火災・感電の原因となります。コードが傷んだら（芯線の露出、断線など）、販売店に交換をご依頼ください。

- 雷が鳴り出したらアンテナ線や電源プラグには触れないでください。感電の原因となります。

- 製品に付属の電源コンセントには、そのパネルおよび取扱説明書に表示された容量を超える消費電力を持つ電気機器を接続しないでください。火災の原因となります。電熱器具、ヘアードライヤー、電磁調理器などは接続しないでください。また表示してある電力以内であっても、電源を入れた時に大電流の流れる機器などは接続しないでください。

⚠注意

設置

- 電源プラグはコンセントに根元まで確実に差し込んでください。差し込みが不完全ですと発熱したり、ほこりが付着して火災の原因となることがあります。また、電源プラグの刃に触れると感電することがあります。

- 電源プラグは、根元まで差し込んでもゆるみがあるコンセントに接続しないでください。発熱して火災の原因となることがあります。販売店や電気工事店にコンセントの交換を依頼してください。

- ぐらついた台の上や傾いたところなど不安定な場所に置かないでください。落ちたり、倒れたりしてけがの原因となることがあります。

- 本機を調理台や加湿器のそばなど油煙、湿気あるいはほこりの多い場所に置かないでください。火災・感電の原因となることがあります。

- キャスター付きの場合にはキャスター止めをしてください。動いたり、倒れたりしてけがの原因となることがあります。

- テレビ、オーディオ機器、スピーカー等に機器を接続する場合は、各々の機器の取扱説明書をよく読み、電源を切り、説明に従って接続してください。また、接続は指定のコードを使用してください。

- 電源を入れる前には音量を最小にしてください。突然大きな音がでて聴力障害などの原因となることがあります。

- 本機の上に重いものや外枠からはみ出るような大きなものを置かないでください。バランスがくずれて倒れたり、落下してけがの原因となることがあります。

- 本機の上にテレビを置かないでください。放熱や通風が妨げられて、火災や故障の原因となることがあります。（取扱説明書でテレビの設置を認めている機器は除きます。）

異常時の処置

- 電源プラグを抜く時は、電源コードを引っ張らないでください。コードが傷つき火災・感電の原因となることがあります。必ずプラグを持って抜いてください。

- 電源コードを熱器具に近づけないでください。コードの被ふくが溶けて、火災・感電の原因となることがあります。

- 移動させる場合は、電源スイッチを切り必ず電源プラグをコンセントから抜き、外部の接続コードを外してから、行ってください。コードが傷つき火災・感電の原因となることがあります。

- 本機の上にテレビやオーディオ機器を載せたまま移動しないでください。倒れたり、落下してけがの原因となることがあります。重い場合は、持ち運びは2人以上で行ってください。

- アンテナ工事には技術と経験が必要ですので、販売店にご相談ください。

→送配電線から離れた場所に設置してください。アンテナが倒れた場合、感電の原因となることがあります。

→ＢＳ，ＣＳ放送受信用アンテナは強風の影響を受けやすいので、堅固に取りつけてください。

- 窓を閉め切った自動車の中や直射日光が当たる場所など異常に温度が高くなる場所に放置しないでください。火災の原因となることがあります。

使用方法

- ディスクを使用する機器の場合、ひび割れ、変形、または接着剤などで補修したディスクは使用しないでください。ディスクは機器内で高速回転しますので、飛び散ってけがの原因となることがあります。

- レーザーを使用している機器では、レーザー光源をのぞきこまないでください。レーザー光が目に当たると視力障害を起こすことがあります。

- 長時間音が歪んだ状態で使わないでください。スピーカーが発熱し、火災の原因となることがあります。

- 本機に乗ったり、ぶら下がったりしないでください。特にお子様はご注意ください。倒れたり、こわれたりしてけがの原因になることがあります。

- お子様がカセットテープ、ディスク挿入口に、手を入れないようにご注意ください。けがの原因になることがあります。

- ヘッドホンをご使用になる時は、音量を上げすぎないようにご注意ください。耳を刺激するような大きな音量で長時間続けて聞くと、聴力に悪い影響を与えることがあります。

- 旅行などで長期間、ご使用にならない時は安全のため必ず電源プラグをコンセントから抜いてください。

電池

- 指定以外の電池は使用しないでください。また、新しい電池と古い電池を混ぜて使用しないでください。電池の破裂、液もれにより、火災・けがや周囲を汚損する原因となることがあります。

- 電池を機器内に挿入する場合、極性表示（プラス（＋）マイナス（−）の向き）に注意し、表示通りに入れてください。間違えると電池の破裂、液もれにより、火災・けがや周囲を汚損する原因となることがあります。

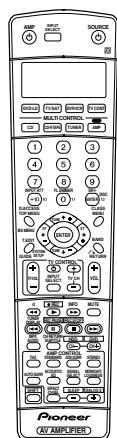
- 長時間使用しない時は、電池を取り出しておいてください。電池から液がもれて火災、けが、周囲を汚損する原因となることがあります。もし液がもれた場合は、電池ケースについた液をよくふきとってから新しい電池を入れてください。また万一、もれた液が身体についた時は、水でよく洗い流してください。

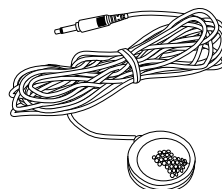
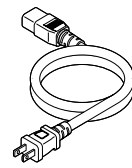
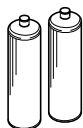
- 電池は加熱したり分解したり、火や水の中にいれないでください。電池の破裂、液もれにより、火災、けがの原因となることがあります。

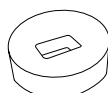
保守・点検

- 5年に一度くらいは内部の掃除を販売店などにご相談ください。内部にほこりがたまったまま、長い間掃除をしないと火災や故障の原因となることがあります。特に湿気の多くなる梅雨期の前に行うとより効果的です。なお掃除費用については販売店などにご相談ください。

- お手入れの際は安全のために電源プラグをコンセントから抜いて行ってください。

付属品を確認する

リモコン

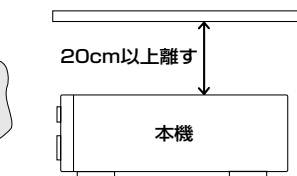
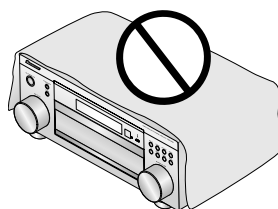
FMアンテナ

セットアップ用マイク

電源コード

単3形乾電池（2本）
（IEC R6P）

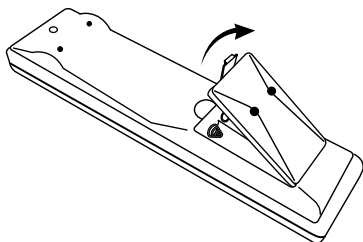
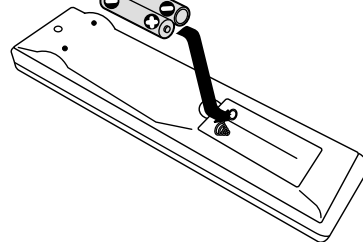
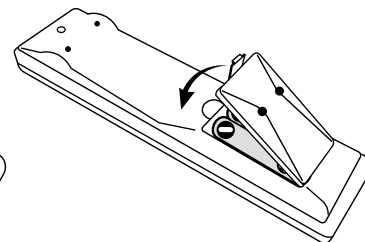
AMループアンテナ

マイクスタンド

- 保証書
- ご相談窓口・修理窓口のご案内
- 取扱説明書（本書）

設置について

警 告

- 放熱のため本機の上に物を置いたり、布やシートなどを被せた状態でのご使用は絶対におやめください。異常発熱により故障の原因となる場合があります。
- ラックなどに設置する場合は、上部に20cm以上空間をあけてください。

リモコンに電池を入れる

1

2

3

注 意 電池を誤って使用すると、液漏れしたり破裂する危険性があります。以下の点について特にご注意ください。

- 新しい乾電池と一度使用した乾電池を混ぜて使用しないでください。
- 乾電池のプラスとマイナスの向きを電池ケースの表示どおりに正しく入れてください。
- 乾電池には同じ形状でも電圧の異なるものがあります。種類の違う乾電池を混ぜて使用しないでください。
- 長い間（1 カ月以上）リモコンを使用しないときは、電池の液漏れを防ぐため、乾電池を取り出してください。液漏れを起こしたときは、ケース内についた液をよく拭き取ってから新しい乾電池を入れてください。
- 不要となった電池を廃棄する場合は、各地方自治体の指示（条例）に従って処理してください。

- リモコンの操作範囲が極端に狭くなってきたら、電池を交換してください。
- 電池を交換する際は、なるべく5 分以内に行ってください。それ以上では、リモコンの設定が解除される可能性があります。再度リモコンの設定を行う場合は、「他機器を操作するためのリモコン設定」をご覧ください（88ページ）。

目　次

準　備

ホームシアター入門

各部の名称とはたらき

各機器の接続

基本操作

応用操作

設定

目　次

いろいろな機能

リモコン

参考／技術資料

困ったとき

本機の特長　～こんなことができます～

高音質・多機能な本機VSX-AX3iの主な特長をまとめました。「本書の掲載ページ」に進むと、それぞれの機能や操作を楽しんでいただけます。

本書の掲載ページ

1 MCACC を搭載

聴感のみでは正確な調整が難しいマルチチャンネル（サラウンド）の設定を自動化しました。レコーディングスタジオの現場で行われる調整技術を家庭内で実現するため、音場を正確に測定し、チャンネル間の空間情報の歪みを補正します。

P.13
「AUTO MCACC
(サラウンドの自動設定)」
P.41
「 アコースティックキャリブレーション EQ
(視聴環境の周波数特性の補正)」

2 THX SELECT の認証を取得

本機は、取得のための厳しい規格基準をクリアして「THX SELECT」規格の認証を受けました。THX認定映画館と同等の再生環境を、ホームシアターで実現するための音場補正機能が搭載されています。

P.94
「サウンドフォーマットについて」

3 i.LINK（アイリンク）端子を搭載

DVD オーディオや SACD の高音質マルチチャンネル再生がケーブル 1 本で手軽に楽しめます。

P.30
「i.LINK 対応機器の接続」
P.72
「i.LINK 入力の設定」

4 その他の主な特長

- **新デバイス「Advanced Direct Energy MOS FET」を搭載**
  圧倒的な力感とハイスピードな音を両立させる新出力デバイスを、7ch すべてに搭載しました。
- **あらゆるデジタル音声フォーマットに対応**
  「DTS96/24」、「MPEG-2 AAC」、「Dolby Digital EX」、「Dolby Pro Logic IIx」、「DTS-ES」などの再生に対応したデコーダーを搭載しています。

P.94
「サウンドフォーマットについて」

- **パイオニアビデオコンバーターを搭載**
  映像コード接続の自由度が広がり、伝送ロスの少ない接続を可能にします。

P.28
「映像機器の接続について」

- **新デザイン LCD リモコンを付属**
- **省エネルギー設計**
  待機時消費電力 0.48 W の省電力設計です。

MCACC(Multi Channel ACoustic Calibration system)とは

パイオニアのアンプとしての設計思想であるマルチチャンネルステレオフォニック思想を深化させる上で、実際の制作現場の技術者へのヒアリングを国内外問わず、徹底的に行ってきました。その中から、特に映画制作のスタンダードを確立したルーカスフィルム社と、音楽レコーディング業界の最高峰エアースタジオ社(ロンドン)の技術陣営との対話から、特にこれまで現実が困難であったアコースティックな環境補正を行うために、「一般家庭でも簡単かつ高精度にスタジオと同等の調整を行えること」を目標として、 当社研究所で4年の歳月をかけて開発したのが、MCACC(Multi Channel ACoustic Calibration system)です。この機能により、本機ではスタジオ環境に近似した高精度な音場の自動解析処理と最適補正を可能としました。

ホームシアター入門

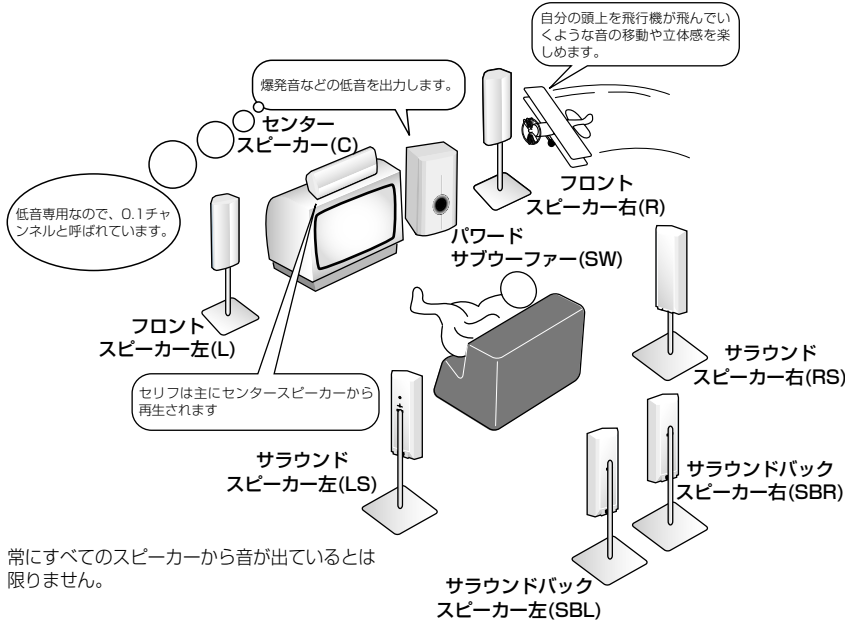
本章「ホームシアター入門」をご覧いただくだけで、簡単にマルチチャンネル再生を楽しむことができます。

ステップ1 接続する ………「テレビ/DVD プレーヤーとの接続」「スピーカーとの接続」
ステップ2 再生する ………「DVDのサラウンド再生」
ステップ3 設定する ………「AUTO MCACC(サラウンドの自動設定)」
困ったとき(Q&A)

マルチチャンネルサラウンド再生とは

3 本以上のスピーカーで多チャンネル再生することを指します。音場の立体感や移動感が増し、迫力ある臨場感が期待できます。

①ドルビーデジタルまたはDTSサラウンドなどのマルチchソフトを再生する場合
マルチchソフト(5.1ch収録が一般的)には各チャンネルに独立した音声が収録されているため、忠実な5.1ch再生でも十分な立体感が得られますが、色々なモードとの組み合わせにより、最大7.1chでの臨場感あふれる再生も可能です。この再生をするにはデジタル接続が必要です。

②CDまたはドルビーサラウンドなどの2ch(ステレオ)ソフトを再生する場合
ソフトが2ch収録の場合でも、ドルビープロロジックIIxやNeo:6技術などを施すことで、最大7.1chでの再生が可能です。ソフトの内容やお好みにマッチしたモードを見つけることも、ホームシアターの醍醐味です。

DVDソフトの音声記録方式(フォーマット)を知るには?

多くのDVDソフトでは、パッケージ(裏面)に以下のように表示されています。1枚のディスクに2〜3種類の音声が収録されていることが多く、聴く音声を選ぶことができます。

例) ③)))

1. 英　語 (5.1ch サラウンド) — DOLBY DIGITAL
2. 日本語 (ドルビーサラウンド) — DOLBY SURROUND
3. 英　語 (DTS 5.1ch サラウンド) — DIGITAL dts SURROUND

収録音声数　記録方式　音声記録方式(フォーマット)

ドルビーデジタルはDVDの標準音声フォーマットであるため、単に「5.1chサラウンド」と記載されている場合は、「ドルビーデジタル(5.1ch)」であることを示します。

ステップ1　接続する

機器の接続を行う場合には、必ず電源を切り、電源コードをコンセントから抜いてください。

テレビ／DVDプレーヤーとの接続

ドルビーデジタルやDTSといったマルチチャンネル音声の再生にはデジタル接続が必要です。

接続の前に、別売のビデオコード2本、同軸ケーブル（または光ファイバーケーブル）1本をご用意ください。

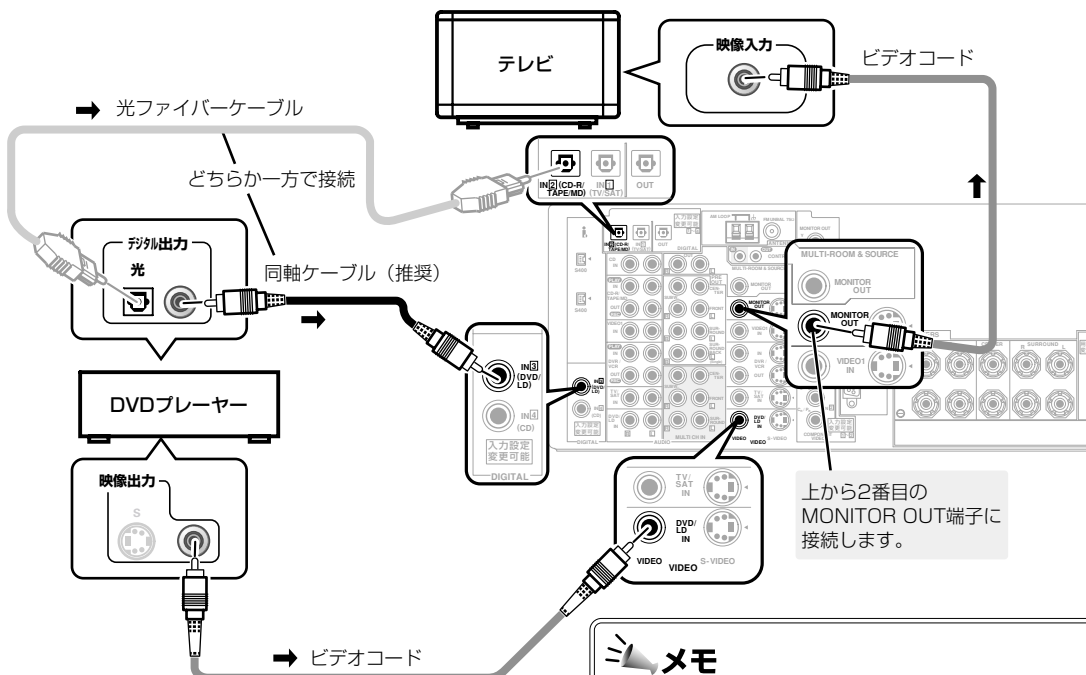
同軸ケーブルにはビデオコードが代用できます。

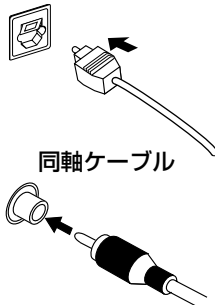
光ファイバーケーブルで接続した場合は設定の変更が必要となります。詳しくは「デジタル入力の設定」（ →70ページ）をご覧ください。

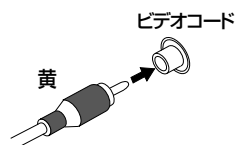
テレビ
映像入力
ビデオコード
➡ 光ファイバーケーブル
どちらか一方で接続
デジタル出力
光
同軸ケーブル（推奨）
DVDプレーヤー
映像出力
➡ ビデオコード

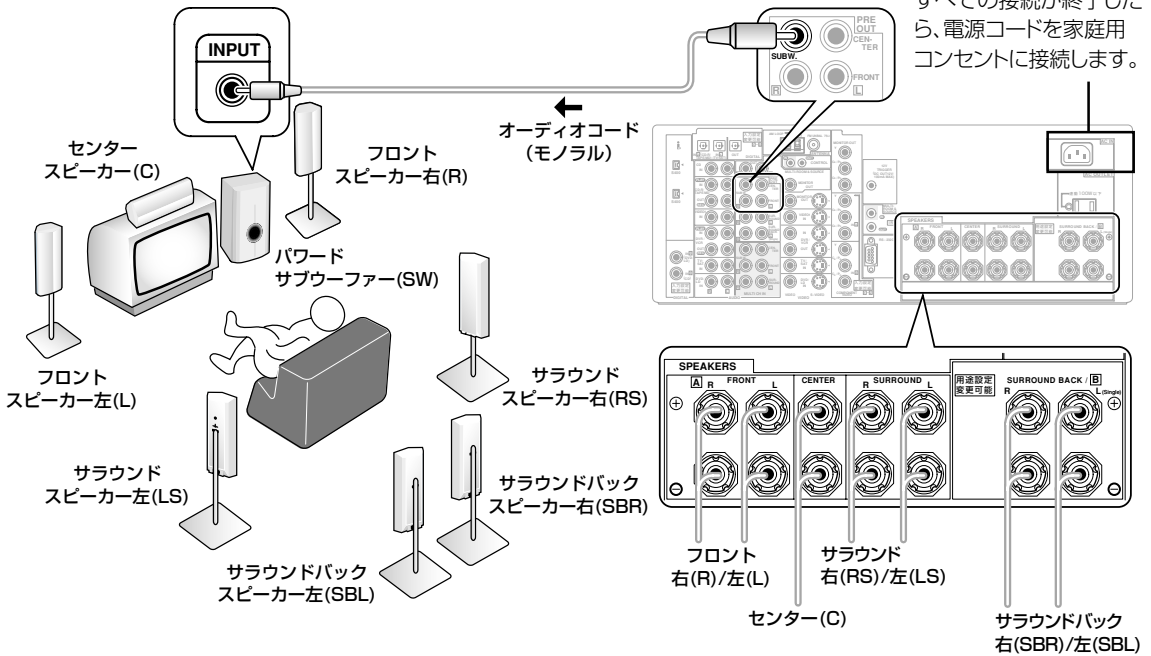
上から2番目のMONITOR OUT端子に接続します。

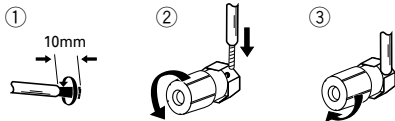
メモ

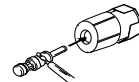
テレビと接続するとき、本機のMONITOR OUT端子の位置にご注意ください。マルチルーム用のMONITOR OUT端子に接続するとテレビに映像を出力できません。

■同軸ケーブル／光ファイバーケーブル

- 急な角度に折り曲げないでください。保管するときは、直径が15cm以上になるようにしてください。
- 接続の際は端子の向きを合わせてしっかり奥まで差し込んでください。誤った向きでむりやり挿入すると、端子が変形し、ケーブルを抜いてもシャッターが閉まらなくなることがあります。

■ビデオコード

一般的な映像用コードで、コンポジットフォーマットの映像信号を伝送します。

スピーカーとの接続

7 本のスピーカーとサブウーファーをつないだ例です。「ステップ3　設定する」まで行うことで、（サラウンドバックやセンタースピーカーがない場合でも）お持ちのスピーカーに応じたサラウンドサウンドが楽しめます。
接続には、市販のスピーカーコードとオーディオコードをご使用ください。

サラウンドバックスピーカーを1本のみ接続するときはL(Single)端子側に接続してください。

■SPEAKER（スピーカー）端子

① 線をねじる。
② スピーカー端子をゆるめ、スピーカーコードを差し込む。
③ スピーカー端子を締めつける。

バナナプラグを接続することもできます（詳しくはプラグの説明書をお読みください。）

- インピーダンスが6Ω～16Ωのスピーカーをご使用ください。
- 6Ω以上8Ω未満のスピーカーをご使用になるときは「スピーカーインピーダンスの切り換え」（→ 27 ページ）を行ってください。
- スピーカーと本機の＋／－を合わせて正しく接続してください。
- スピーカーコードを接続するときは、芯線をしっかりねじり、スピーカー端子からはみ出していないことを確認してください。芯線がリアパネルに接触したり、＋／－が接触すると保護回路が働いて電源がスタンバイ状態になることがあります。

ステップ2　再生する

つないだDVDプレーヤーにディスクをセットして、サラウンド再生をします。

DVDのサラウンド再生

1　**本体の電源コードをつないで、電源を入れる。**

⏻ STANDBY/ONボタンを押して電源をONにします。
(サブウーファーをつないでいる場合は、電源を入れて音量を適度に上げておきます。)

2　**テレビの電源を入れ、テレビの入力切換を本機の出力映像が表示されるように設定する。**

例えば、本機のMONITOR OUT端子と接続しているテレビの入力が「ビデオ1」の場合は、テレビの入力を「ビデオ1」に切り換えます。

3　**DVDプレーヤーの電源をONにする。**

4　**本機のDVD/LDボタンを押して、本機の表示を「DVD/LD」にする。**

SIGNAL SELECT表示がDIGITAL(AUTO)になっていることを確認してください。
表示がANALOGになっていたらSIGNAL SELECTボタンでDIGITAL(AUTO)に切り換えます。

5　**AUTO SURR.インジケーターが点灯していることを確認する。**

点灯していないときはLISTENING MODE SELECTボタンを押してAUTO SURROUNDを選び、インジケーターを点灯させます。

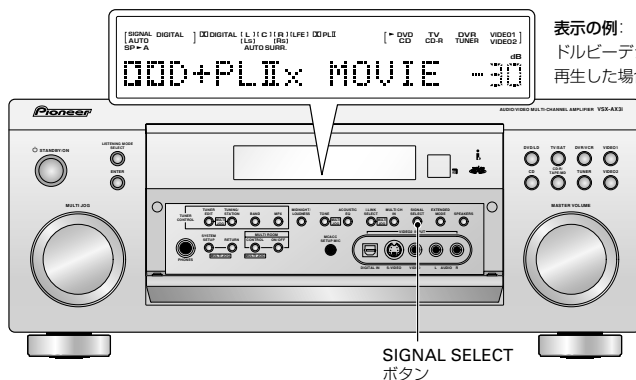
6　**DVDを再生する。**

再生する前にDVDプレーヤー、DVDソフトの確認をしてください。

① DVDプレーヤーのデジタル出力
ドルビーデジタル 、DTS、および96 kHz PCMの音声信号が出力されるように設定してください。
※本機はMPEG音声に対応していません。PCM音声が出力されるように設定してください。
② DVDソフトの音声の確認
DVDソフトのメニュー画面やDVDプレーヤーの音声切換操作で音声(5.1chサラウンドまたはドルビーサラウンドなど)を選んでください。

CDなどの場合はステレオ(2ch)再生になります。

7　**適当な音量になるまでMASTER VOLUMEを回して音量を調整する。**

表示の例：
ドルビーデジタルの5.1ch信号を再生した場合

8　**サラウンド再生はできましたか？それでは次ページの「ステップ3　設定する」に進みます。ワンランク上のサラウンド再生のための、設定をしてみましょう。**

ステップ3　設定する

AUTO MCACC(サラウンドの自動設定)

本機のオートセットアップでは従来のマニュアル調整では難しかったさまざまな設定を、自動で高精度に測定、設定することができます。スピーカーから出力されるテストトーンを付属のセットアップ用マイクで測定し、解析します。測定項目と全体の流れは右記のとおりです。

右記①～⑦の測定／解析にかかる時間
合計3～8分程度

注意

測定中は大きな音でテストトーンが出力されます。近隣住宅や小さなお子様などへのご配慮をお願いします。

サラウンドバックチャンネルの設定

初期測定(測定設備のチェック)
① 暗騒音（部屋の騒音）の測定
② マイク感度の診断
③ 各chのスピーカー有り無し判定

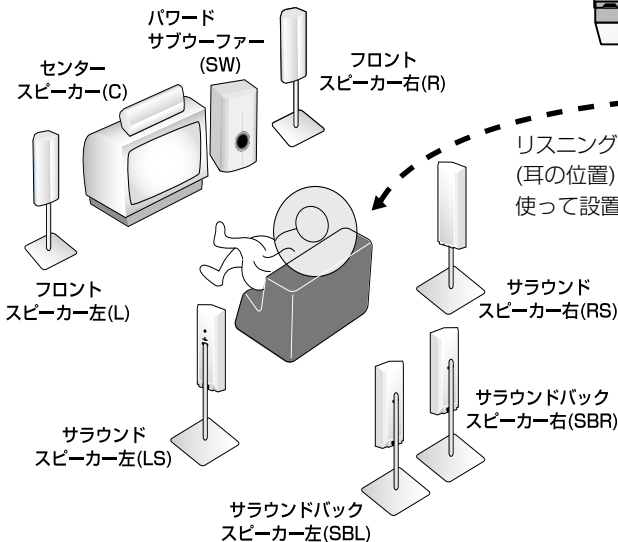
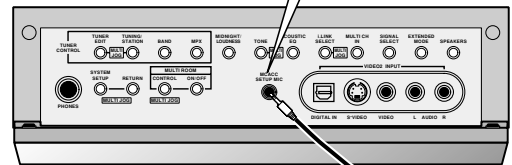
スピーカーの有り無し判定結果のユーザー確認(または修正)

システム全体の解析測定
④スピーカーシステム（各chの低域再生能力を判定）
⑤スピーカーからの距離（最適なディレイ値を解析）
⑥スピーカーの出力レベル（各chの出力バランスを補正）
⑦視聴環境の周波数特性（出力音声の音色を統一）

システム全体の解析結果のチェック

1）セットアップ用マイクを接続する

メモ

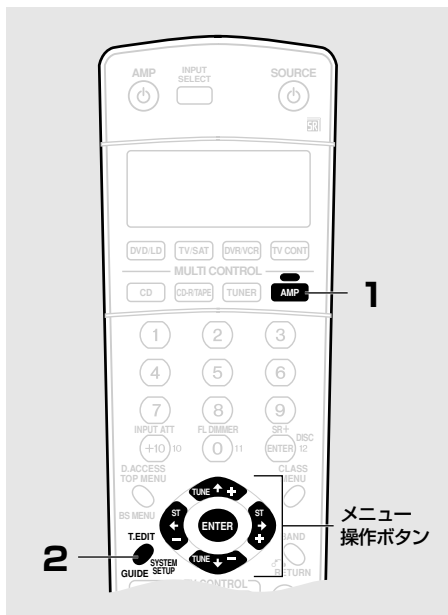
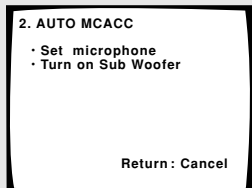
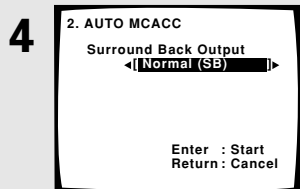
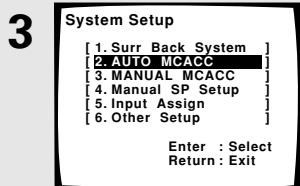
付属のセットアップ用マイクをTVモニターの近くに置いてオートセットアップを行わないでください。

マイクを設置するときは、必ず付属のマイクスタンドを使い、水平になるように設置してください。

2) オートセットアップ(自動測定)を開始する

以下はOSD画面(テレビ画面)です

3
System Setup
[1. Surr Back System]
[2. AUTO MCACC]
[3. MANUAL MCACC]
[4. Manual SP Setup]
[5. Input Assign]
[6. Other Setup]
Enter : Select
Return : Exit

4
2. AUTO MCACC
Surround Back Output
◄[Normal (SB)]►
Enter : Start
Return : Cancel

2. AUTO MCACC
・Set microphone
・Turn on Sub Woofer
Return : Cancel

メッセージの意味
- 付属のオートセットアップ用マイクを接続して、リスニングポジションに配置してください。
- サブウーファーを接続している場合は電源を入れてボリュームレベルを適度に上げておいてください。

メモ

- 測定を中断したり設定の途中で操作を3分間放置したときは、それまでの内容は確定されず、システムセットアップ画面に戻ります。
- 測定中は静かにしてください。
- スピーカーとリスニングポジション(マイク)の間に障害物があると、正確に測定できないことがあります。
- 測定中はリスニングポジションから離れて、各スピーカーの外側からリモコンで操作を行ってください。

1 AMPを押す。

2 SYSTEM SETUPを押す。

本機のメニュー画面が表示されます。

3 [2.AUTO MCACC]を選んで決定する。

4   サラウンドバックシステムの設定をする。

通常は[Normal(SB)]を選択し、ENTERを押して決定します。詳しくは「サラウンドバックシステムの設定」(→58ページ)をご覧ください。

オートセットアップの自動測定に進みます。

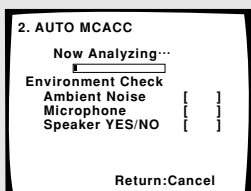
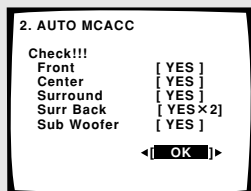
オートセットアップのテストトーンは大音量です。ボリュームを下げることもできますが、正しく設定されない場合があります。小さなお子様が近くにいる場合などはご注意ください。

以下はOSD画面（テレビ画面）です

5

```
2. AUTO MCACC
    Now Analyzing…
Environment Check
  Ambient Noise      [    ]
  Microphone         [    ]
  Speaker YES/NO     [    ]

              Return:Cancel
```

6

```
2. AUTO MCACC

Check!!!
  Front          [ YES ]
  Center         [ YES ]
  Surround       [ YES ]
  Surr Back      [ YES×2]
  Sub Woofer     [ YES ]
                ◀[  OK  ]▶
```

5 自動測定が開始されます。

まずは初期測定（測定設備チェック）です。
Ambient Noise：暗騒音（部屋の騒音）の測定
Microphone：マイクの感度を診断
Speaker YES/NO：各スピーカーの有り無し判定

6 スピーカー有り無しの確認画面になります。

スピーカー有り無し判定については以下の表をご覧ください。
(Check!!!)画面の見かた

有無 / スピーカー	接続している	接続していない
Front フロント左右	YES	NO
Center センター	YES	NO
Surround サラウンド左右	YES	NO
Surr Back サラウンドバック	YES×1（1つ接続） YES×2（2つ接続）	NO
Sub Woofer サブウーファー	YES	NO

スピーカー有り無し判定結果が正しいとき

[OK]を選んでENTERボタンを押します。

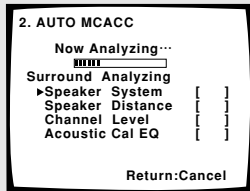
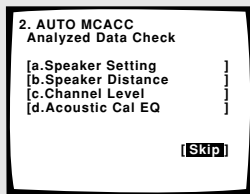
スピーカー有り無し判定結果が間違っているとき

⬇⬆⬅➡ ボタンで正しい設定に直したあとENTERボタンを押します。

もう一度自動測定をやり直すとき

[Retry]を選んでENTERボタンを押します。

エラーが表示されたら

判定結果で[ERR]が表示された場合は、スピーカーの接続を間違えている可能性があります。[Retry]しても結果が同じような場合は一度電源を切り、スピーカーの接続を確認してください。また、途中で測定エラーによる警告が表示されている場合がありますので、そのときは画面の指示にしたがってください。

設定の途中でエラーメッセージ等が表示された場合は「システムセットアップでのMCACC(音場補正)時に表示されるメッセージ 」(→108ページ)をご覧ください。

7 補正用測定が開始されます。

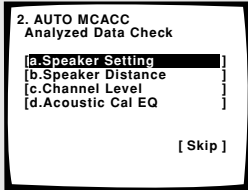
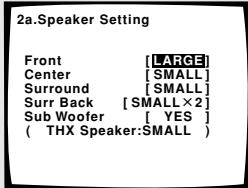
Speaker System：各スピーカーの低域再生能力判定
Speaker Distance：スピーカーまでの距離を解析
Channel Level：各chの出力バランスを補正
Acoustic Cal EQ：出力音声の音色を統一
これらの自動設定には接続しているスピーカーの数によって3〜8分程度かかりますので、手順8の画面になるまでしばらくお待ちください。

8 「Analyzed Data Check」の画面が表示されたら自動測定は終了です。

「測定結果を確認する」にお進みください。

3) 測定結果を確認する

以下はOSD画面(テレビ画面)です

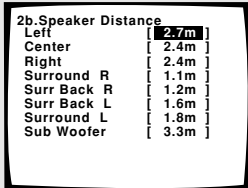
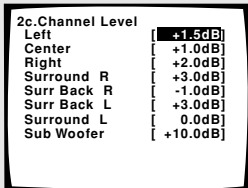
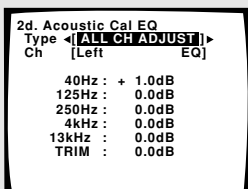
1,2

a.スピーカーシステム
(各スピーカーの低域再生能力判定)

b.スピーカーまでの距離
(スピーカーまでの距離を解析)

2b.Speaker Distance

Left	[2.7m]
Center	[2.4m]
Right	[2.4m]
Surround R	[1.1m]
Surr Back R	[1.2m]
Surr Back L	[1.6m]
Surround L	[1.8m]
Sub Woofer	[3.3m]

c.スピーカーの出力レベル
(各chの出力バランスを補正)

2c.Channel Level

Left	[+1.5dB]
Center	[+1.0dB]
Right	[+2.0dB]
Surround R	[+3.0dB]
Surr Back R	[-1.0dB]
Surr Back L	[+3.0dB]
Surround L	[0.0dB]
Sub Woofer	[+10.0dB]

d.視聴環境の周波数特性
(出力音声の音色を統一)

2種類の補正カーブ(ALL CH ADJUSTとFRONT ALIGN)についてて測定結果がチャンネルごとに確認できます。

1

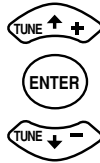
項目を選んで決定して、測定された内容を確認する。

RETURNを押して項目を戻ります。
各測定項目について、詳しくは「MCACCの詳細と効果」(→56ページ)をご覧ください。

メモ

- 同じスピーカーを接続していても、部屋の環境や設置の影響によりスピーカーの大小判定が一致しないことがあります。設定を変更したい場合はシステムセットアップの「スピーカーシステムの設定」(→65ページ)を行ってください。
- サブウーファーまでの距離は、サブウーファー本体が持つ回路の電気的遅延も含めて測定するため、距離がやや遠めに設定されることがありますが、遅延補正として最適な解析結果ですので、距離を修正する必要はありません。

2

ENTER

[Skip]を選んで決定する。

オートセットアップが終了し、システムセットアップ画面に戻ります。
アコースティックキャリブレーションEQが自動的にALL CH ADJUSTでONになり、MCACCインジケーターが点灯します。

3

SYSTEM SETUP

オートセットアップ(AUTO MCACC)を終了する。

通常動作に戻ります。

もう一度再生してみましょう！

- 何か問題はありましたか？
「困ったとき<Q&A>」をご覧ください。
(→18ページ)
- サラウンドをより楽しむために…
①いろいろな音場効果を加えることができます。
(→38ページ)
②より詳細な設定を行うこともできます。
(→55ページ)

困ったとき<Q&A>

Q1 視聴していたら突然電源が切れてしまった。

A 「音量が大きすぎる」または「スピーカーコードがショート(接触)していている」可能性があります。「音量が大きすぎる」ときは音量を小さくしてください。「スピーカーコードがショート(接触)している」ときは、スピーカーコードの芯線を再度しっかりねじり直して、スピーカー端子からはみ出ないように接続してください。

Q2 DVDプレーヤーをデジタル接続したが音が出ない。

A 光デジタルで接続の場合は、デジタル音声端子の入力を切り換えてください。（→70ページ）

A SIGNAL SELECTボタンを押して入力信号の種類をAUTO(DIGITAL)に切り換えてみてください。

Q3 フロントスピーカーからしか音が出ない。

A ドルビーデジタルやDTSなどのマルチチャンネル音声を再生していますか？
DVDソフトのメニュー画面やDVDプレーヤーの音声切換操作でマルチチャンネル音声を選んでください。

A CDを再生していませんか？
リスニングモードを初期設定のAUTO SURROUNDのままでCDなどの2ch音声で収録されているソフトを再生すると、2chのまま再生されます。サラウンド音声を楽しむには、リスニングモードでSTANDARDまたはADVANCED SURROUNDなどを選んでください。（→38ページ）

Q4 音が出ないスピーカーがある。

A スピーカーの接続を確認してください。

A SIGNAL SELECTボタンを押して入力信号をデジタルにする。（→37ページ）

A プログラムフォーマットインジケーター(→23ページ)で、収録されているチャンネルを確認してください。
思ったとおりに音が出ないときは、以下をご確認ください。
「DVDプレーヤー、DVDソフトの確認」(→12ページ)
「リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧」(→99ページ)

A EXTENDEDモードの設定がOFFになっている場合は、設定をONにする。（→40ページ）

誤使用防止のため、取扱説明書は必ず最後までお読みください。

リモートコントロール

アンプコントロール部、チューナーコントロール部、TV／他機器のコントロール部の3つに分類されます。

アンプコントロール部

本機を操作するときに使います。

INPUT SELECTボタン
本機の入力を切り換えます。

AMP ⏻ ボタン
本機の電源をONまたはOFF（スタンバイ状態）にします。

リモコン表示部
操作／設定時の表示画面です。

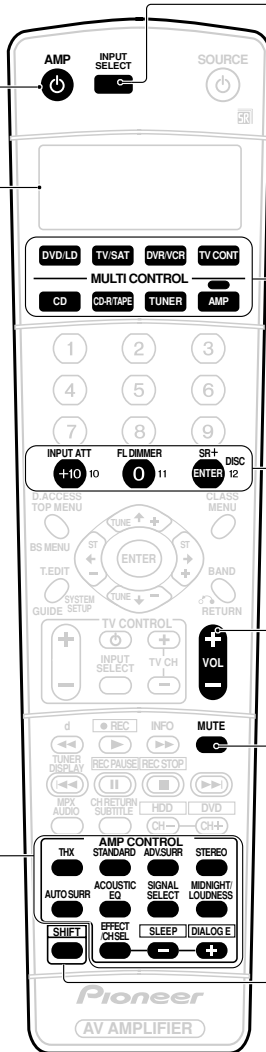
MULTI CONTROLボタン
本機の入力を切り換えます。また他機器を操作するときのリモコンの操作モードを切り換えます。
AMPボタン
リモコンをアンプ操作モードにします。

アンプ操作ボタン（AMPボタンを押してから操作します。）
INPUT ATT：アナログ信号が入力されているとき、入力信号のレベルが高すぎて音が歪んでいるときに押すと聴きやすくなります。
FL DIMMER：フロントパネル表示部の明るさを切り換えます。
SR+：プラズマディスプレイとの連動モードを切り換えます。

AMP CONTROLボタン
リスニングモードボタン
（THX、STANDARD、ADV. SURR、STEREO、AUTO SURR.）：いろいろな音場効果を加えることができます。（→38ページ）
ACOUSTIC EQ：アコースティックキャリブレーション EQ設定を選択します。
SIGNAL SELECT：入力信号の種類（アナログ／デジタル／i.LINK）を切り換えます。
MIDNIGHT/LOUDNESS：ミッドナイトリスニングモードやラウドネスモードをONにすると、音量を下げて映画などを楽しむ場合などでも、サラウンド効果が最適なレベルに自動調整されます。
EFFECT/CH SEL＋/－：ADVANCED SURROUNDモードのエフェクトレベルを調整します。また、テストトーンを使わずに、手動でチャンネルを切り換えて各チャンネルのスピーカーレベルを調整するときに使います。

VOL＋/－ボタン
本機の音量を調節します。

MUTEボタン
消音します。

SHIFTボタン
押しながら以下の操作を行います。
SLEEP：スリープタイマーを設定します。
DIALOG E：ダイアログエンハンスメントを設定します。

チューナーコントロール部

本機のチューナーを操作するボタンです。（→51ページ）

数字ボタン
周波数やステーション番号を入力します。

TUNER DISPLAYボタン
周波数表示とステーション名表示を切り換えます。

MPXボタン
FMの受信感度が悪いときにモノラル受信に切り換えます。

TUNERボタン
リモコンをチューナー操作モードにします。

TUNE＋/－ボタン：
周波数を変更します。
ST＋/－ボタン：ステーション番号を変更します。
CLASSボタン：
放送局を記憶したり呼び出したりするときにA～Cのクラスを変更、選択します。
BANDボタン：
AM放送とFM放送を切り換えます。
T.EDITボタン：
放送局を記憶したり、放送局に名前をつけます。
D.ACCESSボタン：
数字ボタンで放送局の周波数を直接入力します。

テレビ/他機器コントロール部

テレビや他機器を操作するときに使います。
他機器の操作について詳しくは「他機器のリモコン操作一覧表」（→92ページ）をご覧ください。

MULTI CONTROLボタン
リモコンの操作モードを切り換えます。

お手持ちのテレビをTV CONTROLボタンで操作するには、MULTI CONTROL部の「TV CONT」ボタンにお手持ちのテレビのプリセットコードを割り当ててください。（→88ページ）

TV CONTROLボタン
⏻：テレビの電源を入／切します。
INPUT SELECT：テレビの入力を切り換えます。
TV CH ＋/－：テレビのチャンネルを切り換えます。
TV VOL ＋/－：テレビの音量を調節します。

SOURCE⏻ボタン
他機器の電源を入／切します。

数字ボタン
トラック、チャプター、チャンネル選択に使用します。

メニューボタン
各機器のメニュー画面の操作等をします。

操作ボタン
各機器の再生／停止などの操作や機能の切り換えなどをします。

フロントパネル

① ⏻STANDBY/ON
本機の電源を入／切(スタンバイ)にします。

② MULTI JOGダイヤル
リスニングモードの選択とドア内部の MULTI JOG マークのあるボタンの操作に使用します。

③ LISTENING MODE SELECTボタン
MULTI JOGダイヤルとともに、リスニングモードを選択します。(→38ページ)

④ ENTERボタン
システムセットアップで項目メニューを選択します。

⑤ フロントパネルドア
(→22ページ)

⑥ 表示部
(→23ページ)

⑦ リモコン受光部
下記「リモコンの操作範囲」参照。

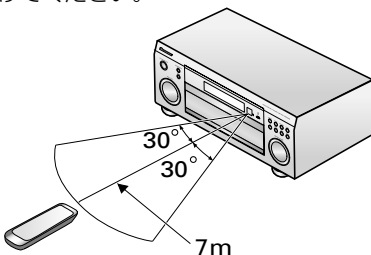
⑧ i. LINKインジケーター
i.LINKで接続されている機器が選択されているときに点灯します。

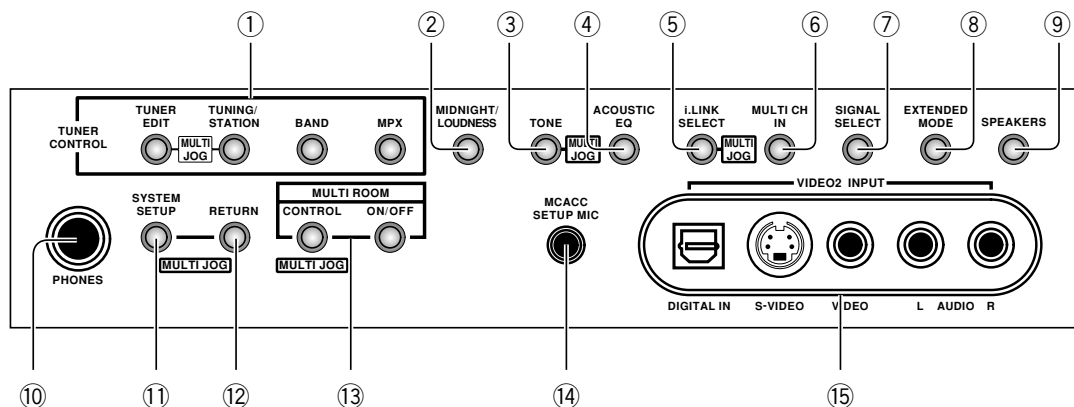
⑨ MCACCインジケーター
アコースティックキャリブレーション EQ設定を有効にしているときに点灯します。(→41ページ)

⑩ 入力ファンクション切換ボタン
リアパネルに接続した各機器から再生機器を選びます。

⑪ MASTER VOLUMEダイヤル
音量を調節します。

リモコンの操作範囲

本機をリモコンで操作するときは、リモコンをフロントパネルのリモコン信号受光部に向けてください。

- リモコンと本機との間に障害物があったり、リモコン受光部との角度が悪いと操作ができない場合があります。
- リモコン受光部に直射日光や蛍光灯などの強い光が当たると誤動作することがあります。
- 赤外線を出す機器の近くで本機を使用したり、赤外線を利用したほかのリモコン装置を使用したりすると、本機が誤動作することがあります。逆にこのリモコンを操作すると、他の機器を誤動作させることもあります。

フロントパネルドア内部

① TUNER CONTROL ボタン
チューナー操作に使用します。(→51ページ)

TUNER EDIT
放送局を記憶するとき、名前を付けるときに使用します。

TUNING/STATION
周波数やステーション番号を合わせます。

BAND
FM/AM放送を切り換えます。

MPX
FMの受信電波が弱いときに、ノイズを低減します。(ステレオ音声はモノラル音声になります。)

② MIDNIGHT/LOUDNESSボタン
小音量時に音を聴きやすくします。(→46ページ)

③ TONEボタン
低音／高音を調整します。(→46ページ)

④ ACOUSTIC EQボタン
アコースティックキャリブレーション EQ 設定を切り換えます。(→41ページ)

⑤ i. LINK SELECTボタン
i.LINKセットアップ(→72ページ)で割り当てていないi.LINK機器の入力を選択します。

⑥ MULTI CH INボタン
5.1チャンネルアナログ入力を選択します。(→42ページ)

⑦ SIGNAL SELECTボタン
入力信号の種類(DIGITAL/ANALOGなど)を切り換えます。(→37ページ)

⑧ EXTENDED MODEボタン
EXTENDEDモードとバーチャルサラウンドバックの設定を切り換えます。(→40、45ページ)

⑨ SPEAKERSボタン
スピーカーシステムを切り換えます。(→49ページ)

⑩ PHONES端子
ヘッドホン端子です。(→50ページ)

⑪ SYSTEM SET UPボタン
本機のシステムセットアップを表示します。(→57ページ)

⑫ RETURNボタン
システムセットアップで1つ前の画面に戻ります。

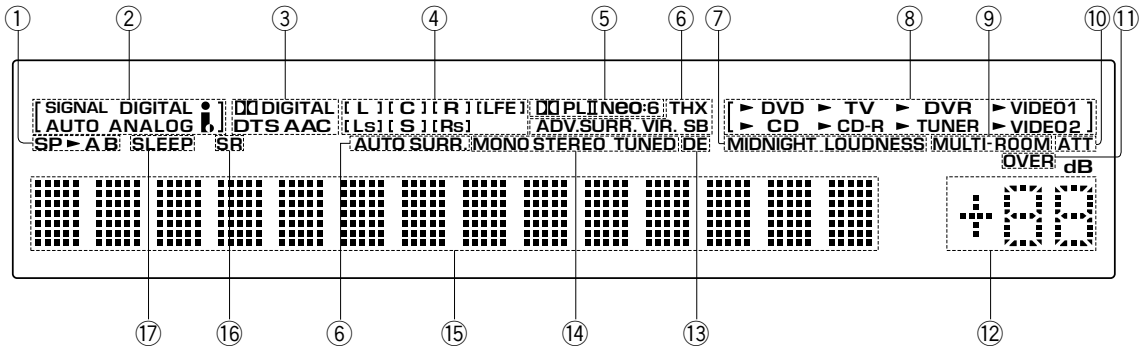
⑬ MULTI ROOMボタン
別の部屋で本機につないだ機器を再生する機能(マルチルーム機能)に使用します。(→79ページ)

CONTROL
別の部屋(サブルーム)で再生する入力ファンクションを選んだり、MASTER VOLUMEダイヤルで別の部屋の音量を調節します。

ON/OFF
マルチルーム機能を入／切します。

⑭ MCACC SETUP MIC端子
音場設定の自動測定のときに、付属のセットアップマイクを差し込みます。(→13ページ)

⑮ VIDEO2 INPUT端子
ビデオカメラやゲーム機などのため、前面に備えた入力端子です。(→31ページ)

フロントパネル表示部

① **スピーカーインジケーター**
現在選択されているスピーカーシステムが点灯します。(→49ページ)

② **SIGNALインジケーター**
現在選択されている機器の入力信号の種類が点灯します。

DIGITAL：デジタル

ANALOG：アナログ

i：i.LINK

③ **デジタルフォーマットインジケーター**
それぞれのデジタル信号入力時に点灯します。

DIGITAL：ドルビーデジタル信号入力時。

DTS：DTS信号入力時。

AAC：MPEG-2 AAC信号入力時。

④ **プログラムフォーマットインジケーター**
ドルビーデジタルやDTSなどの信号入力時に、その信号が持っているチャンネルを表示します。

L：フロント左

R：フロント右

C：センター

LS：サラウンド左

RS：サラウンド右

S：サラウンド(モノラル)またはサラウンドバック

LFE：超低音の効果音(Low Frequency Effect)

⑤ **デコード処理インジケーター**
マトリックスデコード処理時に点灯します。

PL II：ドルビープロロジックII処理またはドルビープロロジックIIxデコード時。

Neo：6：Neo:6デコード時。

⑥ **リスニングモードインジケーター**
選択されているリスニングモードに応じて点灯します。

ADV. SURR.：ADVANCED SURROUND選択時。

THX：ホームTHXモード選択時。

VIR. SB：バーチャルサラウンドバック処理時。

AUTO SURR.：AUTO SURROUND選択時。

⑦ **MIDNIGHT/LOUDNESSインジケーター**
ミッドナイト／ラウドネスモード時に各々が点灯。

⑧ **入力ファンクションインジケーター**
現在選択されている入力機器が点灯。

⑨ **MULTI-ROOMインジケーター**
マルチルーム機能が選ばれているときに点灯。(→79ページ)

⑩ **ATTインジケーター**
インプットアッテネーター機能が選ばれているときに点灯。(→47ページ)

⑪ **OVERインジケーター**
アナログ音声信号が過大入力したときに点灯。(→47ページ)

⑫ **音量表示(dB)**
現在の主音量レベルを表示。
音量レベルは、電源を入／切しても保持されています。(音声ミュート時は点滅します。)

⑬ **DEインジケーター**

ダイアログエンハンスメント機能が選ばれているときに点灯。(→47ページ)

⑭ **チューナー表示**

TUNED：ラジオ放送の受信時に点灯。

STEREO：ステレオ受信時に点灯。

MONO：MPXモード時(FMのモノラル受信時)に点灯。

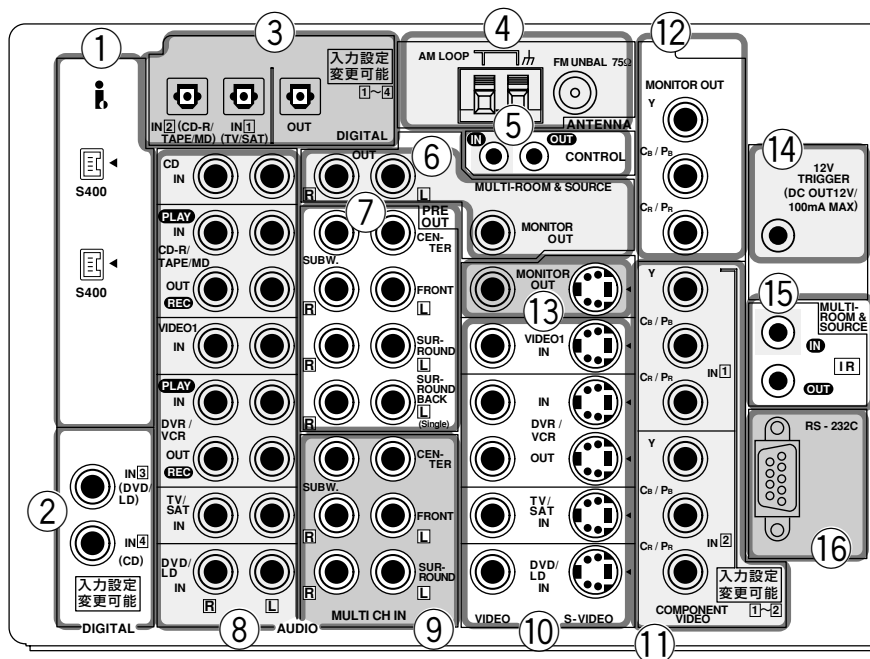
⑮ **キャラクター表示部**
操作中の情報やリスニングモードを表示。

⑯ **SR(SR+)インジケーター**
プラズマディスプレイとの連動モード時に点灯。(→87ページ)

⑰ **SLEEP インジケーター**
スリープタイマーモード時に点灯。(→48ページ)

メモ

何らかの操作のあと、キャラクター表示部が数秒間点滅する場合は、操作禁止を意味します。

リアパネル

① i.LINK端子(→30ページ)

② 同軸デジタル入力端子(→33ページ)

③ 光デジタル入力端子(→33ページ)
端子に表示された機器と違う機器を接続するときはデジタル入力の設定が必要です。(→70ページ)
光デジタル出力端子(→33ページ)

④ アンテナ端子(→34ページ)

⑤ コントロール入出力端子(→83ページ)

⑥ マルチルーム端子(→79ページ)

⑦ プリアウト端子(→83ページ)

⑧ アナログ音声入出力端子(→33ページ)

⑨ マルチチャンネル入力端子(→30ページ)

⑩ ビデオ入出力端子(→29、31ページ)

⑪ コンポーネントビデオ入力端子
工場出荷時はOFFに設定されています。機器を接続するときはコンポーネント入力の設定が必要です。(→ 71ページ)

⑫ コンポーネントモニター出力端子(→29ページ)

⑬ モニター出力端子(→29ページ)

⑭ 12V TRIGGER端子

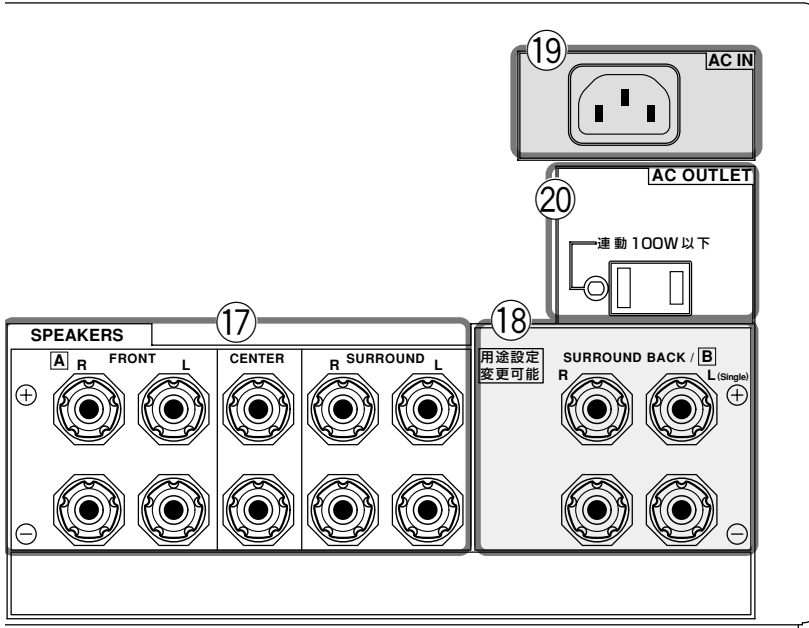
⑮ マルチルーム用IR入出力端子(→79ページ)

⑯ RS-232C端子
将来のための端子です。

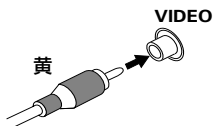
⑰ スピーカーA端子
スピーカーインピーダンス6Ω～16Ωのスピーカーを使用できます。(6Ω～8Ω未満のスピーカーを使う場合は設定変更してください。)(→27ページ)

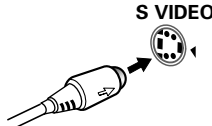
⑱ スピーカーB端子
サラウンドバックシステムの設定(→58ページ)で下記の用途に使用します。
・サラウンドバックスピーカーの接続(→26ページ)
・フロントスピーカーBi-AMP接続(→78ページ)
・別エリアでのステレオ再生用接続(→78ページ)

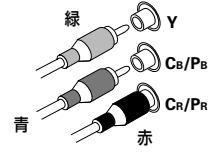
⑲ AC IN端子(→35ページ)
必ず一番最後に接続してください。

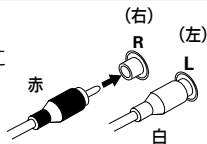
⑳ ACアウトレット予備コンセント(→35ページ)

接続コードについて

■ビデオコード

一般的な映像用コードで、コンポジットフォーマットの映像信号を伝送します。

■Sビデオケーブル

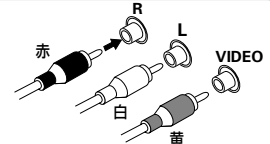
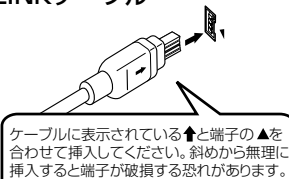
映像信号(Y)と色信号(C)を分離して接続することができ、コンポジットよりも高品位な映像品質を楽しめます。

■コンポーネント映像ケーブル

映像信号のY、CB/PB、CR/PRの3つの信号(色差信号)からなり、Sビデオケーブルよりも高品位な映像品質を楽しめます。(ビデオコード3本での接続も可能です。)D端子変換ケーブルも市販されています。

■オーディオコード

オーディオ機器の接続に使用します。

■AVコード

オーディオコードとビデオコードの一体化したもの。

■i.LINKケーブル

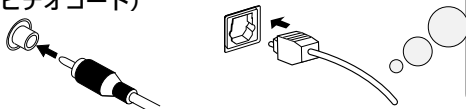
ケーブルに表示されている⬆と端子の▲を合わせて挿入してください。斜めから無理に挿入すると端子が破損する恐れがあります。

本機は最大転送速度が400Mbpsのため、S400対応で長さ3.5m以下の4ピンi.LINKケーブルを使用してください。

※推奨ケーブル：オーディオテクニカ製
AT-DVC44/1.0(長さ1.0m)
AT-DVC44/1.5(長さ1.5m)
AT-DVC44/2.0(長さ2.0m)
AT-DVC44/3.0(長さ3.0m)

■同軸ケーブル/光ファイバーケーブル

デジタル機器の接続に使用します。

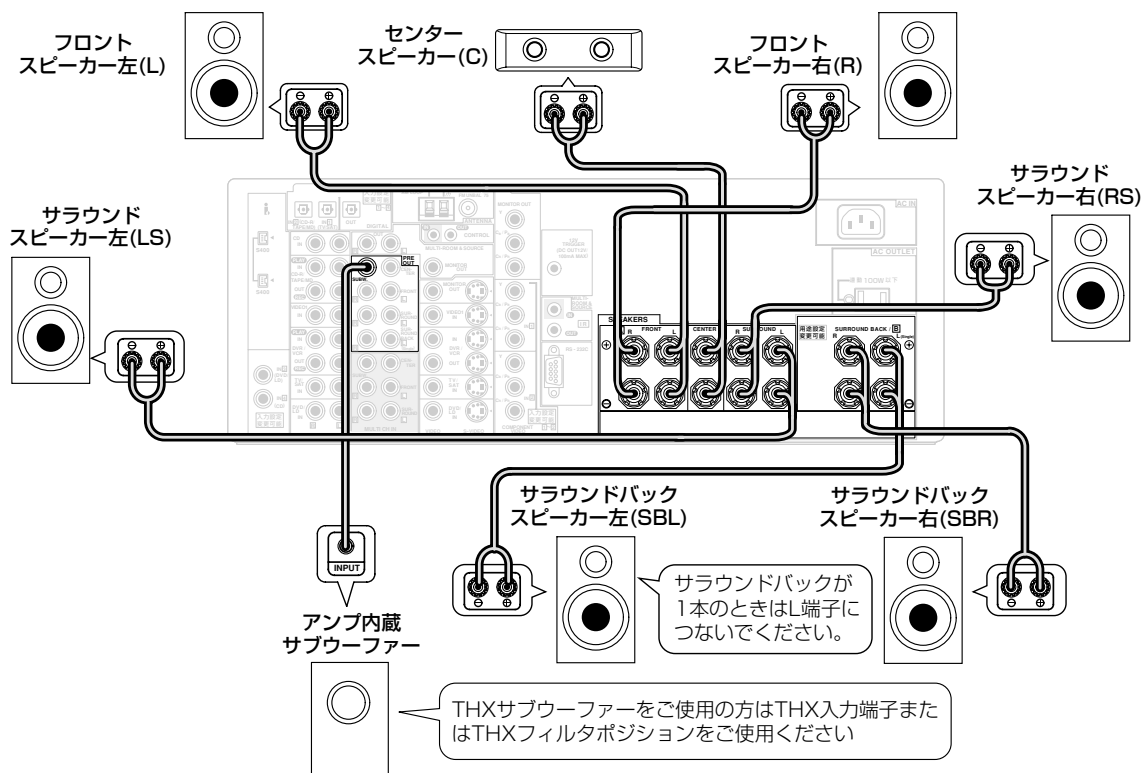
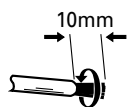
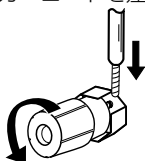
同軸ケーブル
(またはオーディオ/ビデオコード)

光ファイバーケーブル

- 接続の際は端子の向きを合わせてください。誤った向きでむりやり挿入すると、端子が変形し、ケーブルを抜いてもシャッターが閉まらなくなることがあります。
- 長さは3m以下のものを使用してください。
- プラグにホコリが付着したときは、柔らかい布で拭いてから接続してください。

各機器の接続

機器の接続を行う場合には、必ず電源を切り、電源コードをコンセントから抜いてください。

スピーカーの接続

以下のように各スピーカーを接続します。本機でサラウンドを楽しむためには、7本のスピーカーとサブウーファーを接続することをお勧めします。

フロント
スピーカー左(L)

センター
スピーカー(C)

フロント
スピーカー右(R)

サラウンド
スピーカー右(RS)

サラウンド
スピーカー左(LS)

サラウンドバック
スピーカー左(SBL)

サラウンドバック
スピーカー右(SBR)

INPUT

アンプ内蔵
サブウーファー

サラウンドバックが
1本のときはL端子に
つないでください。

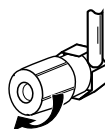
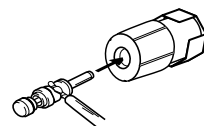
THXサブウーファーをご使用の方はTHX入力端子または
はTHXフィルタポジションをご使用ください

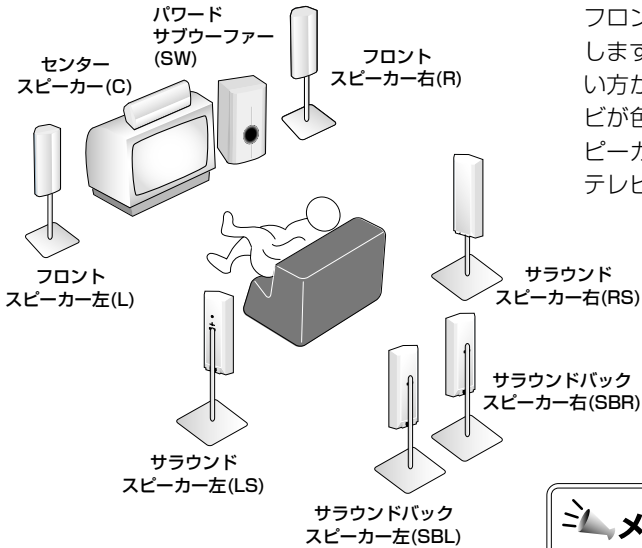
■SPEAKER(スピーカー)端子

① 線をねじる。

10mm

② スピーカー端子をゆるめ、スピーカーコードを差し込む。

③ スピーカー端子を締めつける。

バナナプラグを接続することもできます(詳しくはプラグの説明書をお読みください。)

- **公称インピーダンスが6Ω～16Ωのスピーカーをご使用ください。**
  本機ではスピーカーインピーダンスの設定を変更することができます。工場出荷時は8Ω～16Ωですが、お手持ちのスピーカーが6Ω以上8Ω未満の場合は、設定を変更してください。詳しくは、「スピーカーインピーダンスの切り換え」(次ページ)をご覧ください。
- スピーカーと本機の⊕および⊖端子どうしを正しく接続してください。
- スピーカーコードを接続するときは、芯線をしっかりねじり、スピーカー端子からはみ出していないことを確認してください。芯線がリアパネルに接触したり、⊕および⊖が接触すると保護回路が働いて電源がスタンバイ状態になることがあります。

モニターTVとスピーカーの位置関係

フロントスピーカーはテレビから等距離になるようにします。センタースピーカーはモニターT V 画面に近い方がセリフなどが自然に聞こえます。ただし、テレビが色ずれ等を起こすのを防止するため、防磁型のスピーカーを使用してください。防磁型でない場合は、テレビから離して設置してください。

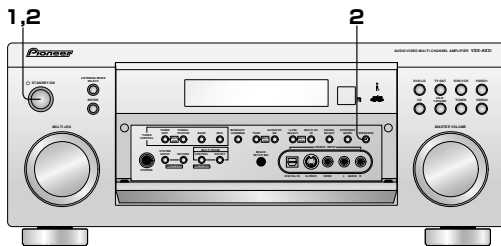
センタースピーカーをテレビの上に設置するときは、適切な方法で固定してください。固定しないと地震などの外部の振動により、スピーカーが落下してケガをしたり、スピーカーを破損する原因となります。

メモ

スピーカーの配置についてより詳しくは､「スピーカーの配置について」(→93ページ)をご覧ください。

スピーカーインピーダンスの切り換え

すべての接続が終了してから行ってください。

スピーカーインピーダンスの設定は、6Ω以上8Ω未満と8Ω～16Ωの2通りあります。お手持ちのスピーカーが6Ω以上8Ω未満の場合は以下の手順で設定を変更してください。（工場出荷時は8Ω～16Ωに設定されています。）

1 本機をスタンバイ状態にする。

2 SPEAKERSボタンを押しながら ⏻STANDBY/ONボタンを押す。

+

スピーカーインピーダンスの設定が変更されます。

再度、設定を変更したいときは手順1からやり直してください。

表示	説明
Speaker 8Ω	スピーカーインピーダンスが8Ω～16Ωの場合
Speaker 6Ω	スピーカーインピーダンスが6Ω以上8Ω未満の場合

映像機器の接続について（パイオニアビデオコンバーター）

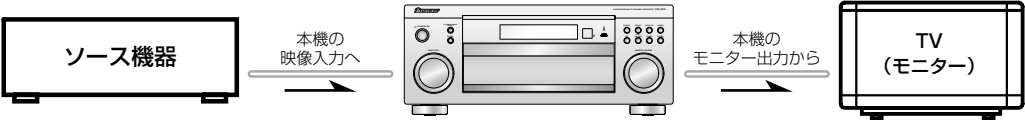
本機は入力された映像信号を異なる種類の信号に変換することのできるビデオコンバーターを搭載していますので以下のようにビデオ機器との接続方法が選べます。各接続コード/ケーブルについては「接続コードについて」（→25ページ）をご覧ください。

映像をテレビに表示する

ソース機器からの映像信号をテレビで表示するには下記の「○」の組み合わせで接続できます。

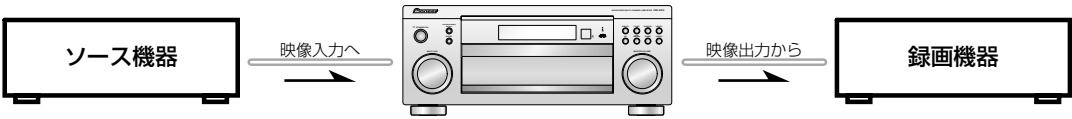
映像コードの組み合わせ

TV（モニター）側の映像コード / ソース側の映像コード	ビデオ（コンポジット）	Sビデオ	コンポーネント
ビデオ（コンポジット）	○	○	○
Sビデオ	○	○	○
コンポーネント	×	×	○*注

*注 この組み合わせの場合、システムセットアップのComponent Input設定（→71ページ）で、つないだ入力機器を割り当てる必要があります。

映像を録画する

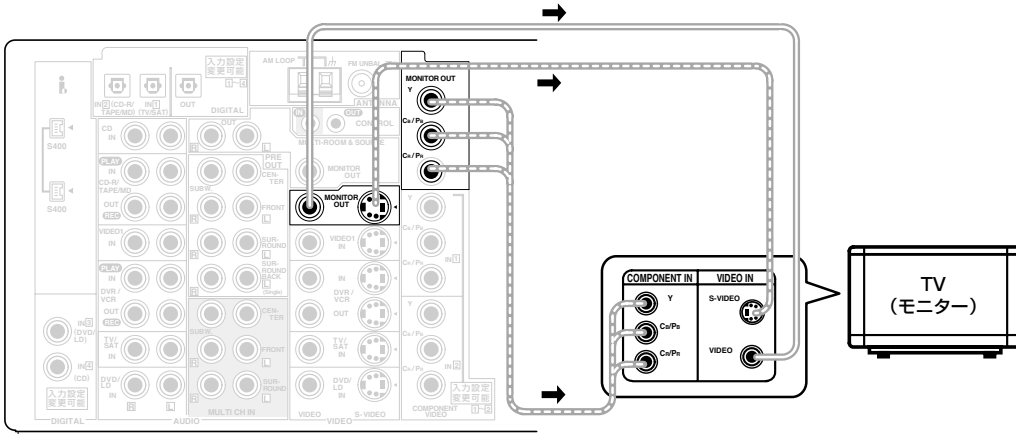
ソース機器からの映像信号を録画するには必ず同じコードで接続します。

映像コードの組み合わせ

録画機器 / ソース機器	ビデオ（コンポジット）	Sビデオ
ビデオ（コンポジット）	○	×
Sビデオ	×	○
コンポーネント	×	×

メモ

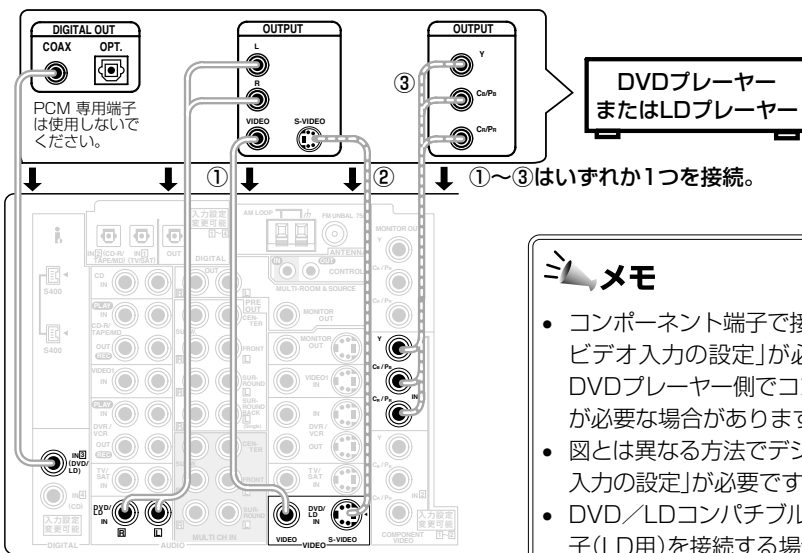
- 入力機器とテレビの両方にSビデオ端子/コンポーネント端子が付いているときは、Sビデオ端子/コンポーネント端子で接続すると、より鮮明な映像を再生することができます（コンポーネント端子どうしの接続が最も良い画質となります）。
- テレビによっては、Sビデオ入力とコンポジット入力の両方を接続していると、信号の有無にかかわらず常にSビデオ入力が優先され、コンポジット端子でのみ接続している機器の映像を見ることができない場合があります。詳しくはテレビの取扱説明書をご覧ください。
- D端子を使用する場合は、市販のコンポーネント/D端子変換ケーブルをお買い求めください。

TV(モニター)の接続

「映像機器の接続について」(→28ページ)をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。
各接続コード/ケーブルについては「接続コードについて」(→25ページ)をご覧ください。

メモ

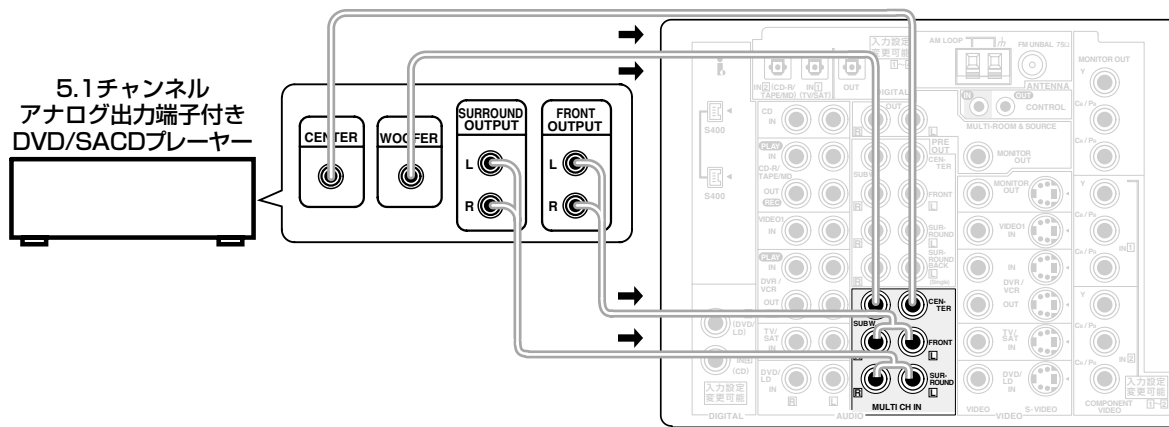
TV(モニター)の1つの入力に、Sビデオやコンポーネントビデオなど数種類のコードを複数同時に接続すると、映像が乱れたり汚く映ることがあります。詳しくはTV(モニター)の取扱説明書をご覧ください。

DVDプレーヤーの接続

「映像機器の接続について」(→28ページ)をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コードについて」(→25ページ)をご覧ください。

メモ

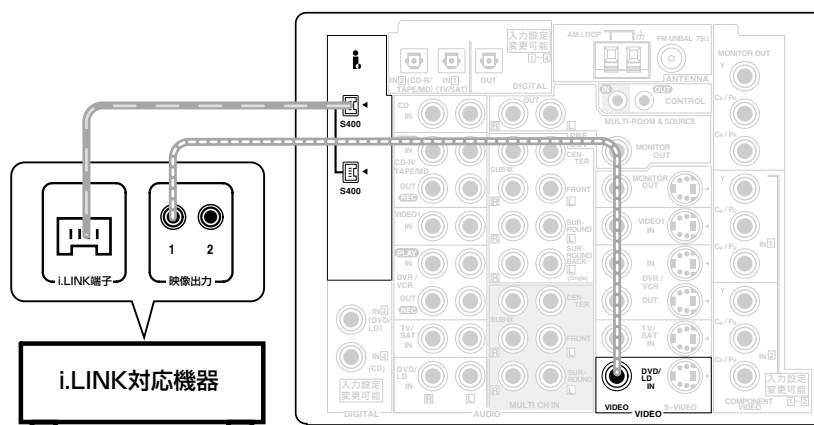
- コンポーネント端子で接続するときは「コンポーネントビデオ入力の設定」が必要です(→71ページ)。また、DVDプレーヤー側でコンポーネントビデオの出力設定が必要な場合があります。
- 図とは異なる方法でデジタル接続するときは「デジタル入力の設定」が必要です(→70ページ)。
- DVD/LDコンパチブルプレーヤーなどのDDRF出力端子(LD用)を接続する場合は、別途RFデモジュレーター(市販のもの)が必要となります。

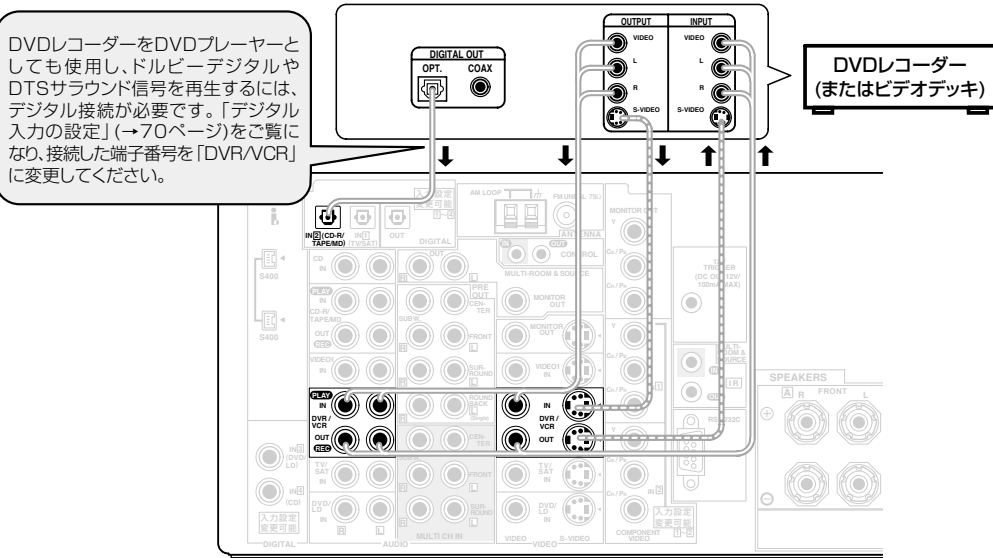
5.1chアナログ接続

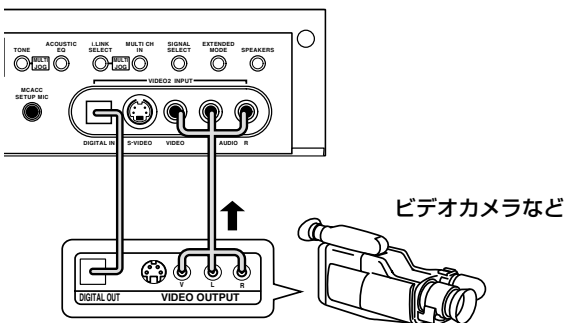
DVD／SACDプレーヤーに5.1chアナログ出力端子がある場合は、本機のMULTI CH IN端子と接続してDVDオーディオ／SACD再生を行うことができます。DVDオーディオまたはSACDを再生するには入力モードの切り換えが必要です。詳しくは「マルチチャンネル入力の再生」(→42ページ)をご覧ください。

メモ

DVD／SACDプレーヤー側の設定で、5.1chアナログ出力をONに設定しないと音が出ません。詳しくはDVD／SACDプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

i.LINK対応機器の接続

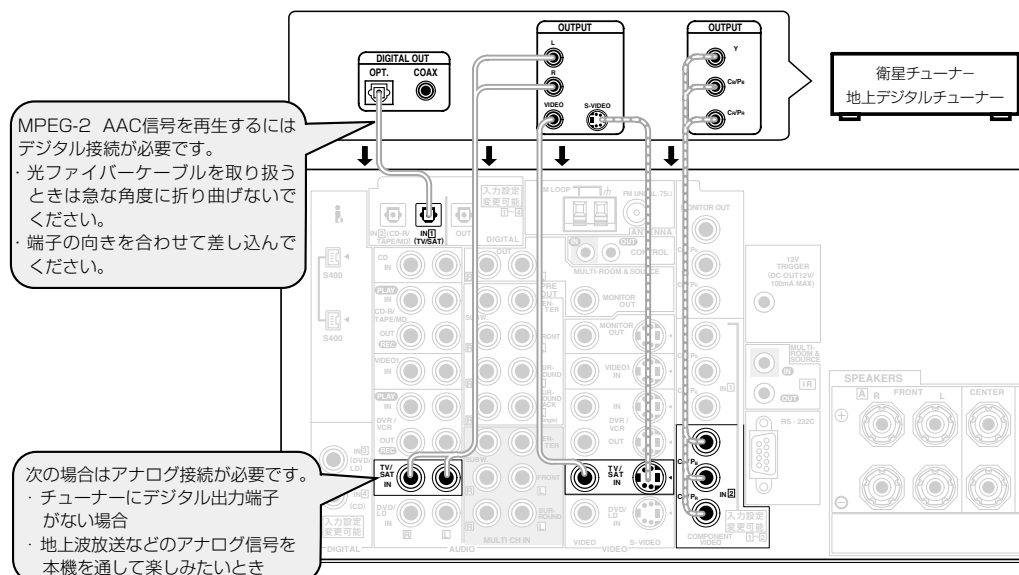
接続には、S400対応の4ピンi.LINKケーブルを使用してください(→25ページ)。
i.LINK AUDIOインターフェースでは映像信号は伝送されないため、ビデオ機器は映像系の接続も必要になります。「映像機器の接続について」(→28ページ)をご覧ください。
接続した映像端子の入力ファンクションとi.LINK入力を合わせるために、割り当て設定を「i.LINK入力の設定」(→72ページ)で行ってください。
必要に応じてプレーヤーの出力設定を行ってください。詳しくは、プレーヤーの取扱説明書を参照してください。

DVDレコーダーやビデオデッキの接続

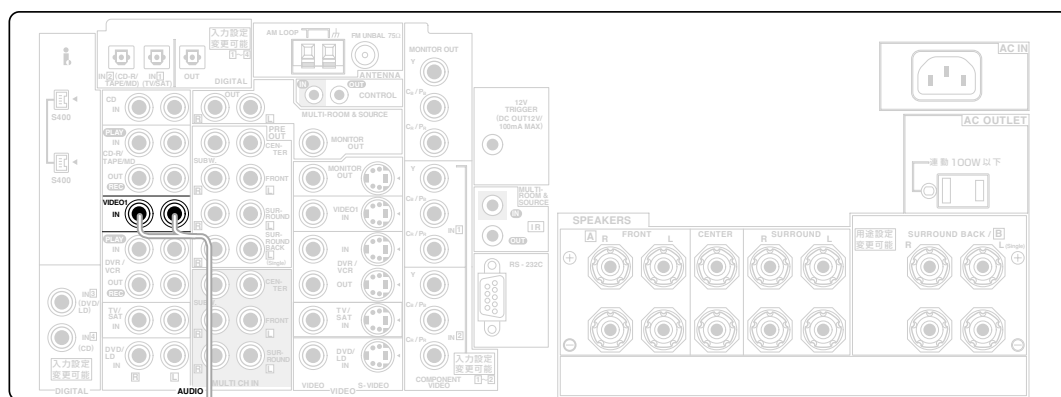
「映像機器の接続について」(→28ページ)をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コードについて」(→25ページ)をご覧ください。
コンポーネント端子で接続するときは、「コンポーネントビデオ入力の設定」が必要です(→71ページ)。
録画をすることを前提とする場合は、ソース機器と録画機器の映像信号をコンポジットかSビデオのどちらかに統一して接続する必要があります。また音声信号についてもアナログ接続する必要があります。

前面端子を使った接続

フロントパネルドア内のVIDEO2 INPUTを使って各機器を接続できます。この機器を再生するときは、入力ファンクション選択でVIDEO2を選んでください。

メモ

ポータブルＤＶＤプレーヤーなどは、専用の接続コードが付属している場合があります。詳しくは接続する機器の取扱説明書をご覧ください。

BS ／CS／地上デジタルチューナーの接続

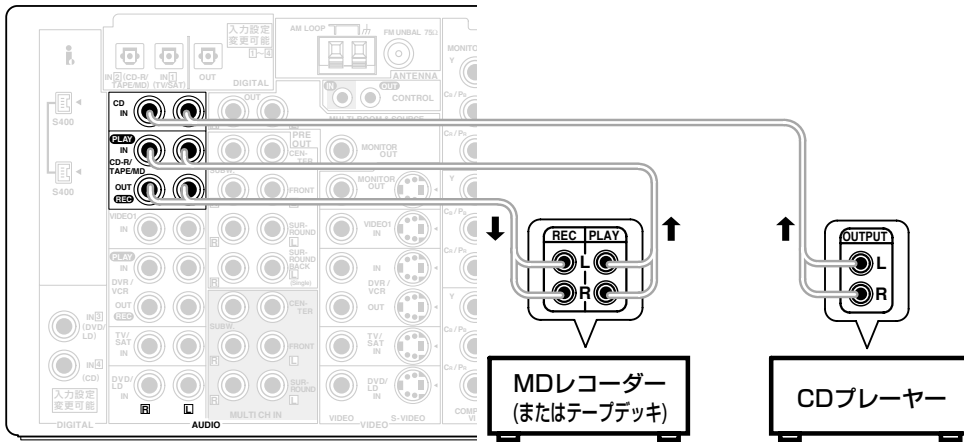
「映像機器の接続について」(→28ページ)をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コードについて」(→25ページ)をご覧ください。
コンポーネント端子で接続するときは、「コンポーネントビデオ入力の設定」が必要です(→71ページ)。
同軸ケーブルや光ファイバーケーブルでデジタル接続するときに、下図と異なる場合は「デジタル入力の設定」が必要です(→70ページ)。

その他のソース機器との接続

お持ちの機器の接続については、リアパネルに表記された機器とは別のソース機器を接続することもできます。
その機器を再生するときは、端子に表記されている名称の入力ファンクションを選んでください。
例：VIDEO1端子にアナログプレーヤーをつなぐ。

(フォノ・イコライザー内蔵のもの)

メモ

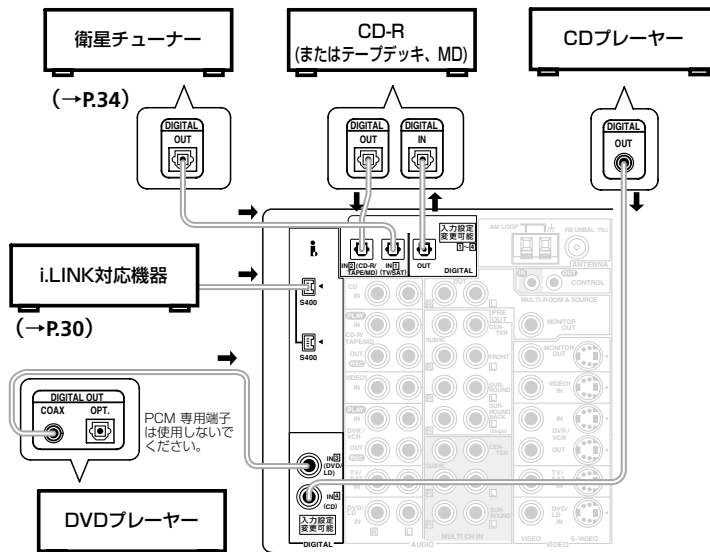
- 本機に接続できるアナログプレーヤーは、PHONO EQ(フォノ・イコライザー)内蔵のもののみです。詳しくは接続する機器の取扱説明書をご覧ください。
- 映像機器は、音声コードと映像コードを同じ名称の端子に接続してください。(例えば、ビデオデッキをVIDEO1端子につなぐときは、音声も映像もVIDEO1端子を選びます。)

アナログ音声機器の接続

デジタル出力のあるCDプレーヤーやMDレコーダーでは、さらに「デジタル音声機器の接続」もできます。

メモ

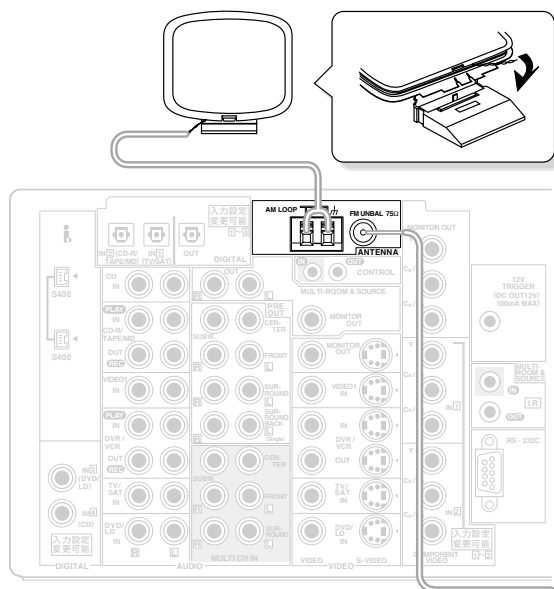
カセットデッキを設置する場所によっては、再生したときに雑音などが発生する場合があります。これはアンプのトランスによるリーケージフラックス(漏れ磁束)の影響によるものです。このようなときには、設置する場所を変えるか、アンプから離して設置してください。

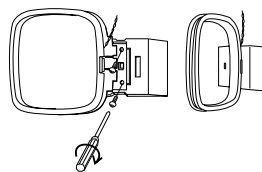
デジタル音声機器の接続

ドルビーデジタルやDTSソフトを再生するには、デジタル接続が必要です。接続は同軸ケーブルまたは光ファイバーケーブルで行います(1つの機器に対してどちらか一方のみで接続します)。

メモ

- どのデジタル入力端子をどの機器に使用するかは自由に変更することができます。ただし、工場出荷時の設定(リアパネル表記)と異なる接続を行う場合は「Digital Input(デジタル入力の設定)」(→70ページ)で設定の変更を行ってください。
- デジタル入力の設定変更を行うとき、Digital-1〜4には[TUNER]、[VIDEO2]を選ぶことができません。

アンテナの接続

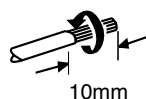
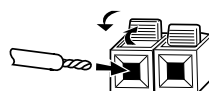
アンテナは下図のように接続します。付属のAM/FMアンテナは簡易アンテナです。感度が悪く聞こえにくい場合は下記の「外部アンテナの接続」をご覧になり、外部アンテナを接続することをお勧めします。

● AMループアンテナ(付属)

AMループアンテナのコード2本をAMアンテナ接続端子に接続します。どちらをアース側端子(⏚)につないでもかまいません。
壁などに取り付けるにはネジやピンなどを使って取り付けます。

● FMアンテナ(付属)

中央のピンにアンテナコードを差し込みます。

● アンテナコードと本機の接続端子

①コードの被覆を回しながら引き抜きます。

②端子のつめを押しながらコードを差し込み、奥までコードが入ったら端子のつめを戻します。

アンテナ接続に関するご注意

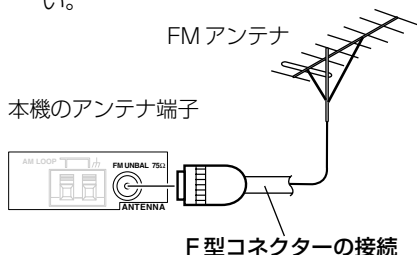
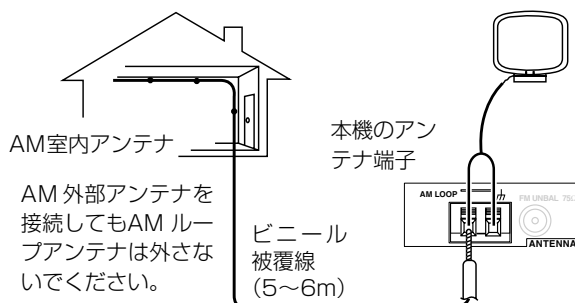
アンテナ接続について
アンテナ端子のアースマーク(⏚)はアンテナを接続した場合の雑音低減をはかるためのものです。安全アースではありません。

AMループアンテナ
- 平らな面に置き、受信状態の最も良い方向に向けてください。
- アンテナは、本機から離して金属物と接触しない場所に置いてください。また、パソコン、テレビなどからもできるだけ離してください。ノイズの原因となります。
- 壁などに取り付ける場合は、AM放送の受信状態が最も良い方向を見つけ、取り付け位置を決めてください。

FMアンテナ
- FMアンテナは最も良い受信状態が得られるように、たらしておいたり丸めたままにしないで、コードを伸ばして使用してください。
- 付属のFMアンテナは、FM放送を手軽に受信するためのものです。よりよい受信のためには外部アンテナを使用してください。

外部アンテナの接続

付属のアンテナでよく聞こえないときは、AM外部アンテナ(ビニール被覆線)、市販のFM屋外アンテナを接続することをお勧めします。

● FM屋外アンテナ(75Ω同軸ケーブル)の接続は下図のように接続してください。

● AM外部アンテナ(ビニール被覆線)の接続は下図のように接続してください。

電源コードの接続

すべての接続が終了したら、電源コードを家庭用電源コンセント（AC 100V）に接続します。

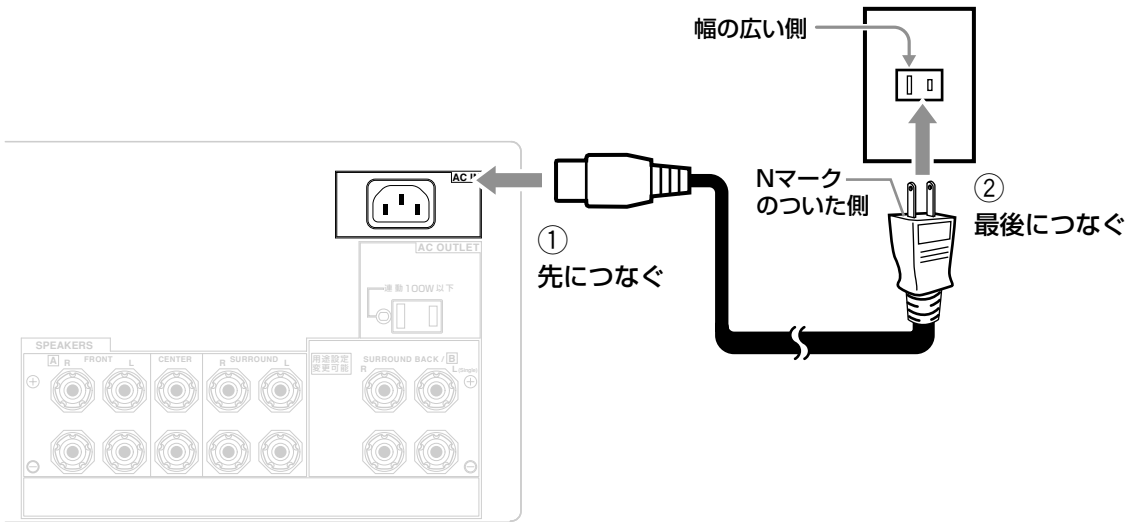
電源コードのつなぎかた

本機の電源コードは極性管理されています。音質向上のため、極性を合わせせることをお勧めします。下図のように電源プラグのNマークのある側をコンセントの幅の広い方（アース側）に合わせて差し込んでください。

警告

- **本機の電源コードは着脱式になっていますが、付属しているコード（電流容量15A、機器側3Pプラグインソケット方式）以外の電源コードはご使用にならないでください。**
- 本機のAC INLETのアース端子は本機のシャーシに接続されていません。

メモ

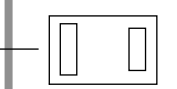
- 旅行などで長期間本機を使用しない場合は、必ず電源コンセントから電源コードを抜いておいてください。ただし、1カ月程度電源コンセントから電源コードを抜いた状態にしておくと本機で設定した各種設定がリセットされますのでご注意ください。

予備コンセント（AC OUTLET）の接続

[連動100W以下]

本機の電源スイッチのON/STANDBY（OFF）の切換に連動して、接続した機器の電源をON/OFFできます。
接続した機器の消費電力が100Wを超えないようにしてください。

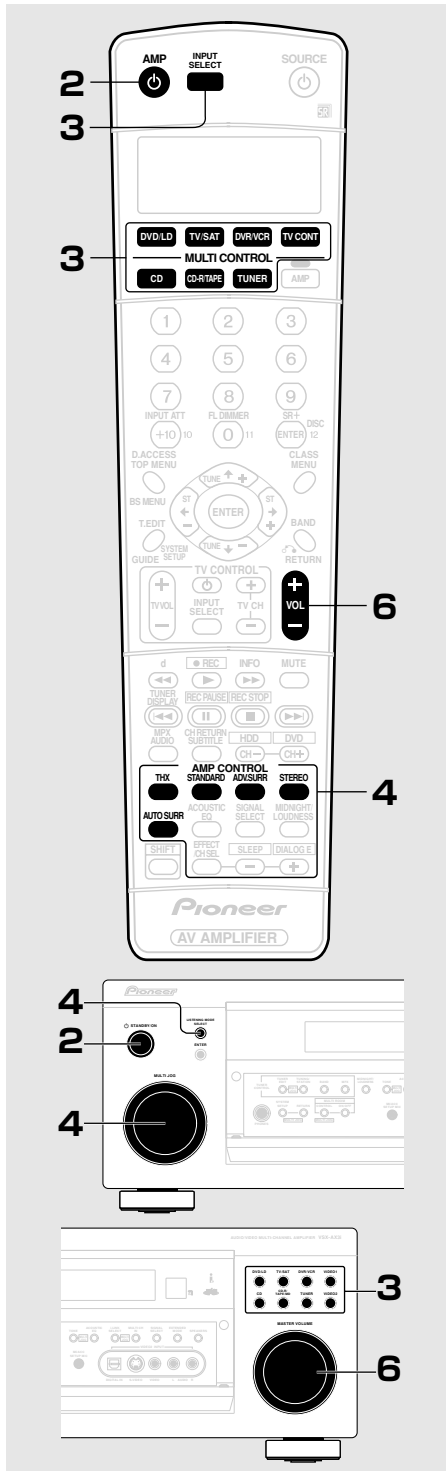
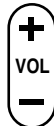
注意

- 消費電力がパネルに表示されているワット数を超えるような電気器具（暖房、アイロン、テレビ、トースター、ドライヤーなど）は絶対に接続しないでください。機器の故障や火災の恐れがあります。
- 表示されている消費電力が本機のパネル表示値より少なくてもテレビ、サブウーファー、パワーアンプ、は接続しないでください。電源を入れたときや大きな音で再生する場合に大きな電流が流れる場合があります。

ホームシアター入門
各部の名称
接続
基本操作
応用操作
設定
いろいろな機能
リモコン
参考／技術資料
困ったとき

基本再生

接続した機器を再生するときの手順です。本機では、「ANALOG/DIGITAL信号の切り換え」(→37ページ)で入力信号を選んで、「リスニングモードの選択」(→38ページ)でリスニングモードを選ぶことが主な操作です。

1 再生する機器の電源を入れる。

2 AMP

本機の電源を入れる。

(本体の場合は、⏻STANDBY/ONを押します。)

3 INPUT SELECT

再生する機器を選ぶ。

ボタンを押すたびに入力機器が切り換わります。MULTI CONTROLボタンで直接選択することもできます。(本体の場合は、入力ファンクション切換ボタンで直接選択します。)

また、必要に応じて入力信号の種類を選びます。「ANALOG/DIGITAL信号の切り換え」(→37ページ)

4

お好みのリスニングモードを選ぶ。

「リスニングモードの選択」(→38ページ)

(本体の場合は、LISTENING MODE SELECTボタンとMULTI JOGで選びます。)

5 再生機器の再生を開始する。

6

音量を調節する。

−80dB(最小値)から+12dB(最大値)の範囲で調節できます。

(本体の場合は、MASTER VOLUMEで調節します。)

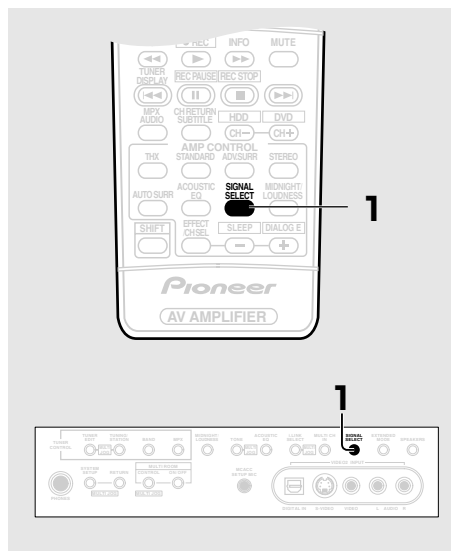
音量について

- MCACCなどにより正確にチャンネルレベルを補正した場合、0dBが映画館での再生音量とほぼ同等になります。

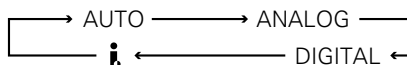
本機の対応フォーマット

- デジタル(光/同軸)入出力端子経由の対応信号
  ドルビーデジタル、DTS、MPEG-2 AAC、PCM(サンプリング周波数:33kHz、44.1kHz、48kHz、88.2kHz、96kHz)
- i.LINK端子経由の対応信号
  上記のすべて、および(192kHzを含む)DVDオーディオ、SACD

ANALOG/DIGITAL信号の切り換え

本機では各入力についてアナログとデジタルの入力信号を切り換えることができます。

1 SIGNAL SELECT

再生したい入力信号を選択する。

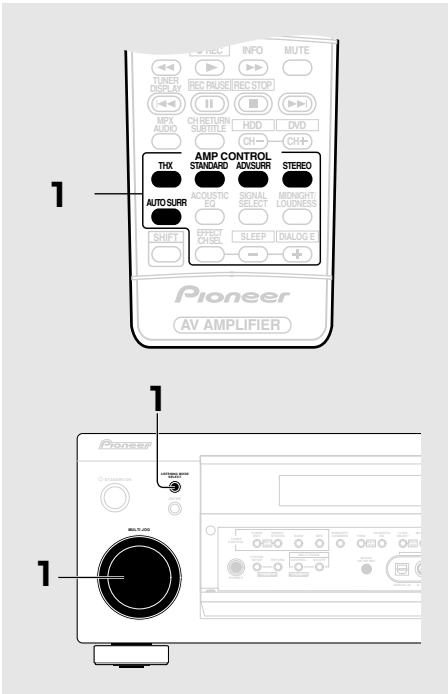
SIGNAL SELECTボタンを押すたびに、以下のように切り換わります。

(i.LINKは i で表示されます。)
AUTOにしたときは、i →DIGITAL→ANALOGの優先順位で自動的に入力信号を選択します。

- SIGNAL SELECTボタンでANALOGを選択した状態でDTS対応のLDを再生すると、DTSの原信号がそのまま再生されるため、ノイズが発生します。入力信号は必ずDIGITALを選択してください。
- DVDプレーヤーの機種によっては、再生できるデジタル信号に制限があります(DTS信号を出力しないなど)。詳しくは、お使いのDVDプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

メモ

- デジタル入力端子およびi.LINKが割り当てられていない機器のSIGNAL SELECTは、ANALOGに固定されています。
- i.LINK入力設定(→72ページ)をしていないi.LINK機器を再生する場合は、SIGNAL SELECTはi.LINKに固定されます。
- 非対応のデジタル信号は再生できません。その場合は(アナログ接続して)SIGNAL SELECTは、ANALOGを選択してください。
- カラオケ機器のマイク音声、およびアナログオーディオのみ収録されているLDの音声はデジタル出力されません。これらを再生するには必ずANALOGを選択してください。

リスニングモードの選択

再生機器からの信号にいろいろな音場効果を加えることができます。

1

THX　STANDARD　ADV.SURR　STEREO
AUTO SURR

リスニングモードを選ぶ。

タイプによっては、ボタンを押すたびにモードの種類を切り換えて選択できます。

（本体の場合は、LISTENING MODE SELECTでタイプを選んで、MULTI JOGでモードの種類を選択します。）それぞれのリスニングモードについて下記の設定が選べます。

メモ

本体でリスニングモードを選ぶときは、LISTENING MODE SELECTボタンを押してから10秒以内に、MULTI JOGを回してモードを選んでください。

モードのタイプ	ボタン	概要	選択肢	用途
HOME THX	THX	映画の再生に適します。デコード処理後THX独自技術を付加することで、映画館や収録スタジオの音場が再現されます。 ＊ THX時は、「便利な音声再生のための機能」などの使用が制限されます。 *入力信号や設定により、リスニングモードの選択肢が変わります。*	■2ch信号入力時 PRO LOGIC IIx MOVIE PRO LOGIC Neo:6 CINEMA ■5.1ch信号入力時 THX CINEMA THX SURROUND EX PRO LOGIC IIx MOVIE	 映画向け 古い映画向け 映画向け 映画向け 映画向け 映画向け
STANDARD	STANDARD	サラウンド再生のためのデコードを行います。 2chソースはマトリックス･サラウンド･デコードをします。 *入力信号や設定により、リスニングモードの選択肢が変わります。*	■2ch信号入力時 PRO LOGIC IIx MOVIE PRO LOGIC IIx MUSIC PRO LOGIC Neo:6 CINEMA Neo:6 MUSIC ■5.1ch信号入力時 DIGITAL EX PRO LOGIC IIx MOVIE PRO LOGIC IIx MUSIC	 映画向け 音楽向け 古い映画向け 映画向け 音楽向け 映画/音楽向け 映画向け 音楽向け
ADVANCED SURROUND	ADV.SURR	デコード処理とパイオニア独自の技術を組み合わせたサラウンド再生モードです。 *数種類からの選択が可能です。* *（デコード処理を変更することはできません。）*	ADVANCED MOVIE ADVANCED MUSIC TV SURROUUND SPORTS GAME EXPANDED 7chSTEREO PHONES SURROUND	映画向け 音楽向け TV放送向け スポーツ番組向け ゲーム向け 古い映画向け 音楽向け ヘッドホン使用時専用
STEREO /DIRECT	STEREO	すべての信号を2ch（最大2.1ch）で再生します。 ＊ DIRECT時は、「便利な音声再生のための機能」などの使用が制限されます。	STEREO(通常ステレオ再生) DIRECT(高品位ステレオ再生)	音楽向け 音楽向け
AUTO SURROUND	AUTO SURR	各フォーマットに最適な再生方式を自動的に選択します。（工場出荷時はこのモードが選ばれています。）	自動選択	すべてのソース向け

HOME THX および STANDARD モードについて

以下3つの要素が複雑に関係するため、選択肢は場合により様々に変化します。
「リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧」(→99ページ)にその組み合わせ表があります。

- **入力信号の種類**
- **接続(設定)したサラウンドバックスピーカーの本数(→26ページ)**
- **EXTENDED モード の設定(→40ページ)**

より詳しくは、「サウンドフォーマットについて」(→94ページ)をご覧ください。

- DTS5.1ch信号入力時、デコード方式は自動で決定されます。
- DTS96/24、PCM(96kHz、88.2kHz)、DVDオーディオなどのハイサンプリング信号入力時、HOME THX モードは選択できません。また、(特に5.1ch信号時)様々な制限が多くなります。
- MPEG-2 AACのステレオ信号入力時、Neo:6 CINEMAとNeo:6 MUSICは選択できません。
- DDPRO LOGICは、常に最大5.1chまでの出力となります。
- サラウンドバックスピーカーが1本の接続(設定)の場合、5.1ch信号入力時でもDDPRO LOGIC IIx MOVIEは選択できません。
- DTS信号入力時、DDPRO LOGIC IIx MOVIE、DDPRO LOGICIIx MUSICは選択できません。

ADVANCED SURROUNDモードについて

- DTS96/24、PCM(96kHz、88.2kHz)、DVDオーディオなどのハイサンプリング信号入力時、ADVANCED SURROUNDモードは選択できません。
- より詳しくは、「パイオニア独自のサラウンドモード(ADVANCED SURROUND)」(→98ページ)をご覧ください。

STEREO/DIRECTモードについて

- 設定や入力ソースにより、サブウーファーからも音が出力される場合があります。
- DIRECTモードは、入力信号を加工せずに忠実にステレオ再生します。
- DIRECTを選択しているときに以下のボタンを押すと、自動的にSTEREOモードに切り換わります。
  「MIDNIGHT/LOUDNESS」、「TONE」、「(SHIFT+)DIALOG E」、「ACOUSTIC EQ」

AUTO SURROUNDモードについて

入力信号に収録されたチャンネル数に応じて、最適なリスニングモードを自動的に選択します。

- CDなどの2ch信号入力時 → ステレオ再生
- DDサラウンド信号入力時 → DDPRO LOGIC IIx MOVIEなど
- デジタル5.1ch信号入力時 → DDデジタル、DTSなど
- 6.1ch再生検出信号付きデジタルマルチch信号入力時 → DDPRO LOGIC IIx MOVIE、DDEX、DTS-ESなど

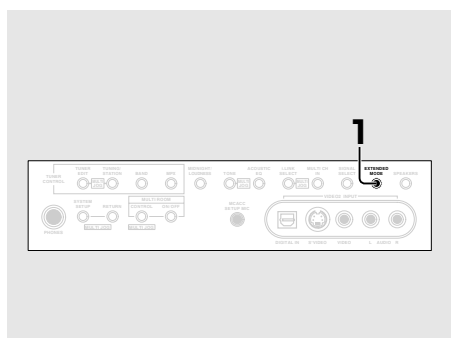
デコードとは

デジタル信号処理回路などにより、圧縮記録されたデジタル信号を、もとの信号に変換させる技術です。また、2chの音源をマルチch化させる演算技術をマトリックス・デコードと言い、5.1ch信号を6.1chに伸長させる技術もデコードと呼ぶことがあります。

EXTENDEDモードの選択

EXTENDEDモードとは、サラウンドバックスピーカーを接続しているときに、サラウンドバックch音声の処理を切り換え、最大で7.1ch再生か5.1ch再生かを変更できる機能です。設定項目は以下のとおりです。

OFF：サラウンドバックchへのデコード処理は行わず、最大5.1chでの再生となります。
AUTO：入力信号の種類と「6.1ch再生検出信号」を検出し、サラウンドバックchへのデコード処理技術を自動選択することで、再生チャンネル数を切り換えます。最もソフトに忠実な再生となります。
ON：常にサラウンドバックchへのデコード処理技術を付加するため、最大の出力チャンネル数でお楽しみいただけるモードです。

入力信号、リスニングモードの種類や組み合わせによって、EXTENDEDモードの処理が異なります。詳しくは「リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧」(→99ページ)の表をご覧ください。

1 EXTENDEDモードを選択する。

EXTENDED MODE

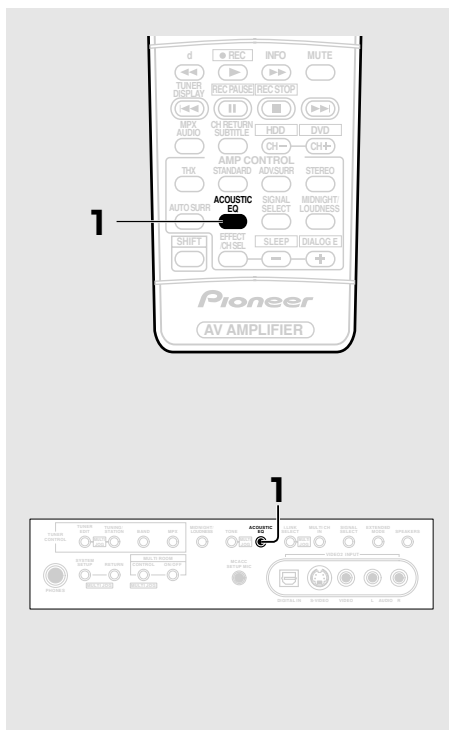
ボタンを押すたびに、ONとAUTOとOFFが切り換わります。

メモ

- MULTI CH INモードを選んでいるときは切り換えができません。(→51ページ)
- 「スピーカーシステムの設定」(→65ページ)で、サラウンドバックスピーカーがNO(無し)に設定されている、または「サラウンドバックシステムの設定」(→58ページ)でSecond Zone、Front Bi-Ampが選ばれているときは切り換えができません。
- サラウンドバックスピーカーを接続していない場合は、このEXTENDE MODEボタンを押すと、仮想のサラウンドバック音声を作ることができます。(→45ページ)

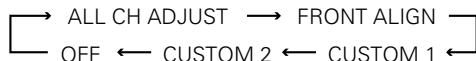
アコースティックキャリブレーションEQ（周波数特性の補正）の選択

「AUTO MCACC（サラウンドの自動設定）」（→13ページ）などで設定された、アコースティックキャリブレーションEQ（視聴環境の周波数特性の補正）の種類を選択します。チャンネル間の音色の違いを統一させるため、再生音のつながりが良くなり、音場バランスが改善されます。設定項目は以下のとおりです。

ALL CH ADJUST：部屋の特性を含めて、スピーカーシステム全体をフラットに補正した周波数特性です。映画館やダビングステージと同じ補正タイプになります。
FRONT ALIGN：スピーカーシステム全体をフロントchの周波数特性に合わせます。フロントスピーカーには補正をかけずに音場バランスの改善が行えます。
CUSTOM1/2：「自動測定された補正カーブを手動で調整する」（→62ページ）で、上記2つの補正タイプをお好みに調整した設定値です。
OFF:補正を行いません。

1 アコースティックキャリブレーションEQの補正タイプを選ぶ。

ACOUSTIC EQ

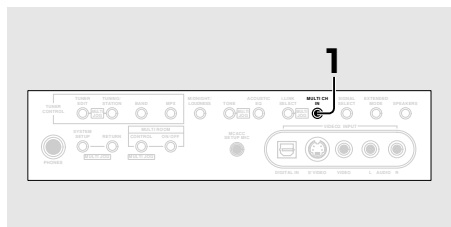
押すたびにアコースティックキャリブレーションEQが以下のように切り換わります。

→ ALL CH ADJUST → FRONT ALIGN → CUSTOM 1 → CUSTOM 2 → OFF →

ALL CH ADJUSTまたはFRONT ALIGN、CUSTOM1、CUSTOM2のときはONとなり、MCACCインジケーターが点灯します。

メモ

- アコースティックキャリブレーションEQのON/OFFはすべてのファンクションに共通で切り換わります。
- MULTI CH INモードでは、使用できません。
- リスニングモードでDIRECTを選択しているときにアコースティックキャリブレーションEQをONにすると、リスニングモードが自動的にDIRECTからSTEREOに切り換わります。
- 工場出荷時はOFFに設定されていますが、「AUTO MCACC」（→13ページ）または「EQ AUTO Setting」（→61ページ）を行ったときは自動的にON（ALL CH ADJUST）になります。
- ヘッドホン使用時には効果がありません。

マルチチャンネル入力の再生

MULTI CH IN端子に接続した機器(DVDオーディオやSACDなど)の各チャンネルの音声を、すべてアナログ処理のまま忠実に高SN比で再生します。映像は入力ファンクション選択で選ばれている機器の映像が映ります。接続については「5.1chアナログ接続」(→30ページ)をご覧ください。

1 MULTI CH IN

MULTI CH INモードにする。

ボタンを押すたびに、ONとOFFが切り換わります。

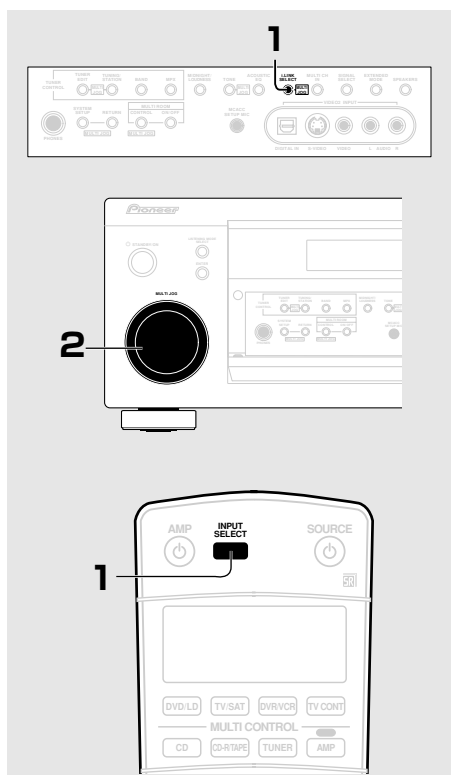
メモ

- マルチチャンネル入力信号にはリスニングモードの効果を加えることはできません。
- 「アコースティックキャリブレーションEQ」(→41ページ)や「便利な音声再生のための機能」(→46ページ)をONにすることはできません。
- TUNER以外の入力ファンクションにMULTI CH INを設定することができます。

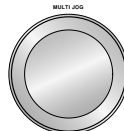
i.LINKで接続した機器を再生する

i.LINK機器は、通常接続した入力ファンクションに割り当てますが、「i.LINK Input」(→72ページ)で割り当てをしていない場合に、下記の方法で入力を換えて機器を選ぶことができます。

本機での操作

1 i.LINK SELECT / MULTI JOG

i.LINK機器の入力ファンクションの選択モードにする。

i.LINKインジケーターが点灯します。

2 MULTI JOG

(i.LINK機器を複数台つないでいる場合は、)再生する機器をマルチジョグダイヤルで選択する。

機器名称が表示されます。

リモコンでの操作

1 INPUT SELECT

i.LINK機器の入力ファンクションを選択する。

INPUT SELECTボタンを押して再生する機器を選びます。

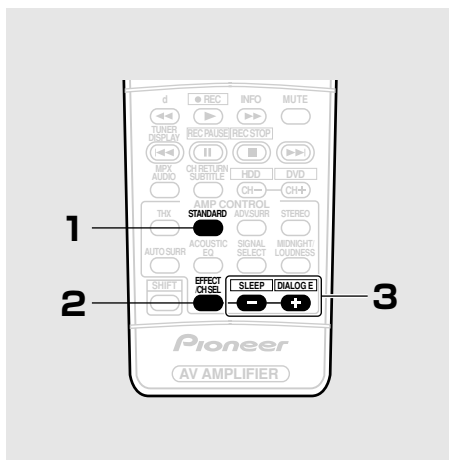
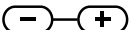
メモ

- 映像のあるソースを再生するには、必ず「i.LINK Input」(→72ページ)でそのソース機器を入力ファンクションに割り当てることが必要です。

リスニングモードのオプション機能

◻◻PRO LOGIC IIx MUSICモードに音響効果を加えて調整する

2chソースを入力しているとき、STANDARDモードの◻◻PRO LOGIC IIx MUSIC（または◻◻PRO LOGIC II MUSIC）には3つの音響効果を加えることができます。それぞれの説明は以下のとおりです。

CENTER WIDTH：センターチャンネルの音声を左右のフロントスピーカーに振り分けて出力することで、音色の不一致を緩和させることが可能になり、音楽再生により適した音場を創り出すことができます。効果は0〜7の範囲で調整することができます。0がセンタースピーカーからのみの出力で、7はセンターチャンネルの音声すべてを左右のフロントスピーカーに振り分けます。工場出荷時は3に設定されています。
DIMENSION：リスニングポジションから前方の音場を強くするか、後方の音場を強くするかを調整することで、広がりのある音場を創り出すことができます。+3から−3の範囲で調整することができます。+3はリスニングポジションから前方の音場が強くなり、−3はリスニングポジションから後方の音場が強くなります。工場出荷時は0に設定されています。
PANORAMA：前方の音場を左右に大きく回り込ませ、サラウンドチャンネルに繋げるようなサラウンド効果を加えます。正確な定位よりも雰囲気を楽しむための機能です。オンまたはオフの設定で、工場出荷時はオフに設定されています。

1 ◻◻PRO LOGIC IIx MUSICモードを選択する。
STANDARD ボタンを押します。（→38ページ）

2 「CENTER WIDTH」、「DIMENSION」、「PANORAMA」の中から加えたい音響効果を選ぶ。
EFFECT /CH SEL
ディスプレイに設定したい音響効果が表示されるまで押してください。

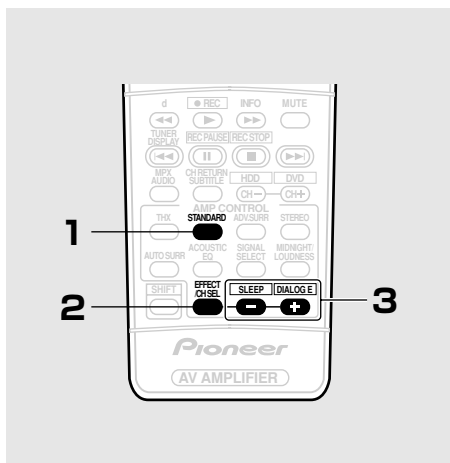
3 音響効果を調整する。
SLEEP DIALOG E
+/−ボタンで調整します。

メモ

- 「スピーカーシステムの設定」（→65ページ）で、センタースピーカーがNO（無し）に設定されていると、「CENTER WIDTH」は調整できません。

Neo:6 MUSICモードに音響効果を加えて調整する

2chソースを入力しているとき、STANDARDモードのNeo:6 MUSICに音響効果を加えられます。センターチャンネルの音声を左右のフロントスピーカーに振り分けて出力することで音色の不一致を緩和し、音楽再生に適した音場を作り出すことができます。

C.IMAGE（センターイメージ）：効果は0～5の範囲で調整することができます。0はセンターチャンネルの音声が左右のフロントスピーカーからも出力されて、音場が広がったように聞こえます。5はセンターチャンネルの音声が主にセンタースピーカーから出力し、センターの音像が明確化されます。工場出荷時は2に設定されています。

1 **Neo:6 MUSICモードを選択する。**

STANDARDボタンを押します。（→38ページ）

2 EFFECT /CH SEL **「C.IMAGE」を選ぶ。**

ディスプレイに「C.IMAGE」が表示されるまで押してください。

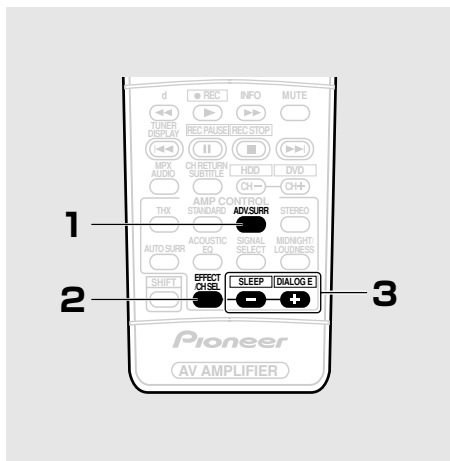
3 SLEEP DIALOG E − + **Neo:6 MUSICモードのセンターイメージを調整する。**

＋/－ボタンで調整します。

メモ

- 「スピーカーシステムの設定」（→65ページ）で、センタースピーカーがNO（無し）に設定されていると、「C.IMAGE」は調整できません。

ADVANCED SURROUNDモードの効果を調整する

ADVANCED SURROUNDの各モードに付加される残響音などの効果を調整することができます。

1 ADV.SURR **ADVANCEDモードを選択する。**

2 EFFECT /CH SEL **エフェクトレベルを選択する。**

ディスプレイに「EFFECT」が表示されるまで押してください。

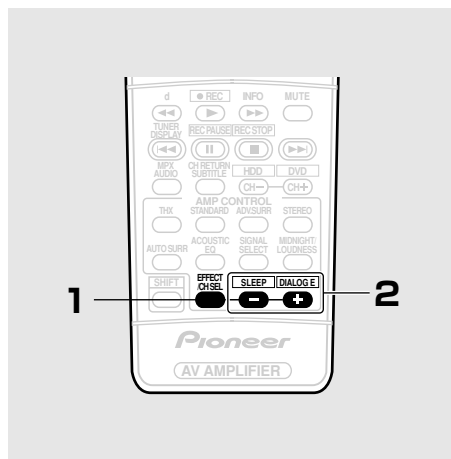
3 SLEEP DIALOG E − + **エフェクトレベルを調整する。**

エフェクトレベルは10～90の範囲で調整することができます。

メモ

- 工場出荷時は、7CH STEREOが90、それ以外のモードが70に設定されています。
- エフェクトレベルは各モードごとに設定できます。

スピーカーの出力レベルを調整する

再生している音を聴きながら、チャンネルごとに出力レベルを調整できます。

1 EFFECT/CH SEL **スピーカーのチャンネルを選択する。**

ディスプレイに「L 0.0dB」などと表示されます。

2 SLEEP DIALOG E **出力レベルを調整する。**

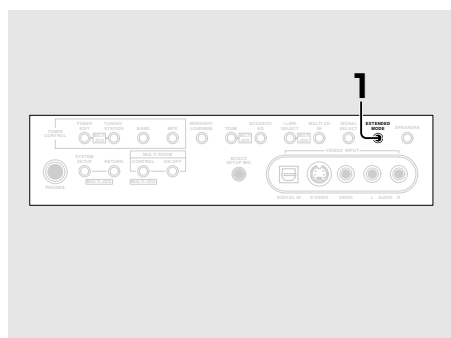
−10.0dBから+10.0dBの範囲内で、0.5dB間隔で調整できます。

メモ

- MULTI CH INモードでは、(その他のモードとは別個に)出力レベルを設定できます。−10.0dBから+10.0dBの範囲内で、1.0dB間隔で調整できます。

バーチャルサラウンドバックモードの選択

サラウンドバックスピーカーを接続していないときに、仮想のサラウンドバックチャンネル音声を創り出すモードです。ON、AUTO、OFFのいずれかに設定します。入力信号の種類やリスニングモードの選択によっては効果が出ない場合があります。

ON ： リスニングモードによって、仮想のサラウンドバックチャンネル音声を作り出します。
AUTO ： 6.1ch再生検出信号を含んだソースやリスニングモードによって、仮想のサラウンドバックチャンネル音声を作り出します。
OFF ： 仮想のサラウンドバックチャンネル音声を作りません。

1 EXTENDED MODE **バーチャルサラウンドバックチャンネルモードを選択する。**

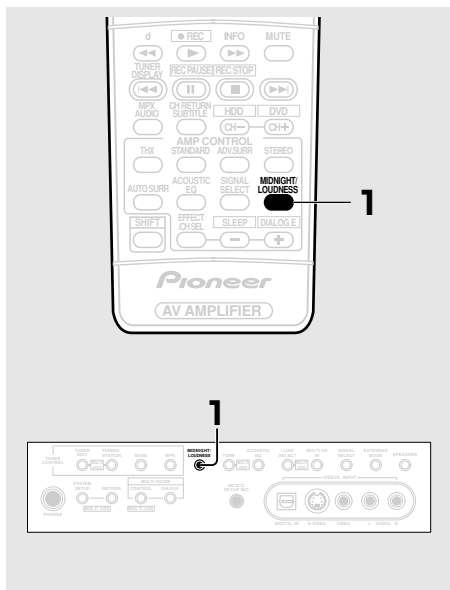
ボタンを押すたびに、ONとAUTOとOFFが切り換わります。

メモ

- MULTI CH INモードを選んでいるときは切り換えができません。(→42ページ)
- 「スピーカーシステムの設定」(→65ページ)で、サラウンドスピーカーがNO(無し)に設定されているときは切り換えができません。
- サラウンドchが収録されていないソース(シーン)では、バーチャルサラウンドバックモードの効果を得ることはできません。

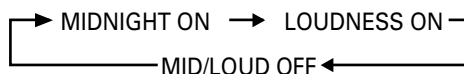
便利な音声再生のための機能

小さな音でも聴き取りやすくする(ミッドナイト／ラウドネス)

MIDNIGHT：夜間などの小音量再生では、音の響きが不足したり、微小な音やセリフが聞こえにくくなります。小さな音でも映画や音楽の微小な音やセリフを聴き取りやすくする効果があります。
LOUDNESS：低域・高域のレベルを自然に調整するため、小さな音でも音楽を聴き取りやすくする効果があります。(フロントchのみ有効)

1 MIDNIGHT/LOUDNESS

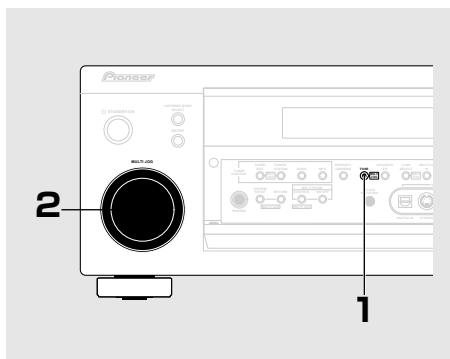
ミッドナイトリスニング／ラウドネスモードをONにする。

ボタンを押すたびに、以下のように切り換わり、それぞれのインジケーターが点灯します。

MIDNIGHT ON → LOUDNESS ON → MID/LOUD OFF →

メモ

- 音量に合わせて効果も自動調整されます。
- MULTI CH INでは、これらの機能は選択できません。
- ダイレクト再生時にこれらの機能をONにすると、自動的にSTEREOモードに切り換わります。
- DTS 96/24信号などの高音質ソースでは、これらの機能は使用できません。

ステレオ再生時の低音／高音を調整する(トーンコントロール)

本体のTONEボタンとMULTI JOGを使って低音、高音の調整(トーンコントロール)ができます。

1 TONE

低音(BASS)か高音(TREBLE)のどちらのトーンを調整するか選択する。

ボタンを押すたびに、低音(BASS)と高音(TREBLE)が切り換わります。

2

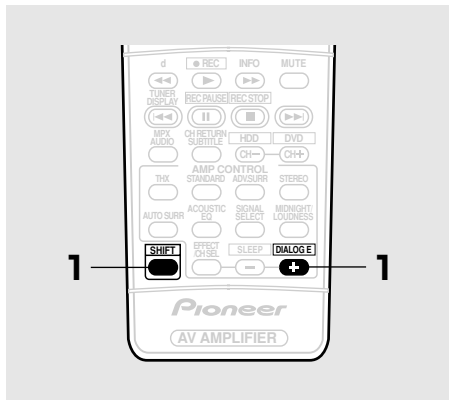
トーンを調整する。

−6dBから＋6dBの範囲内で、2dB間隔で調整できます。

メモ

- STEREO以外のリスニングモードや、MULTI CH INモード、スピーカーシステムBを選んでいるとき、トーンコントロールは使用できません。

セリフやボーカルの音をきわ立たせる（ダイアログエンハンスメント）

音に定位感を持たせることで映画／ドラマのセリフや音楽のボーカルをきわ立たせ、より聴き取りやすい音にします。

1

SHIFTを押したまま、DIALOG Eボタンを押す。

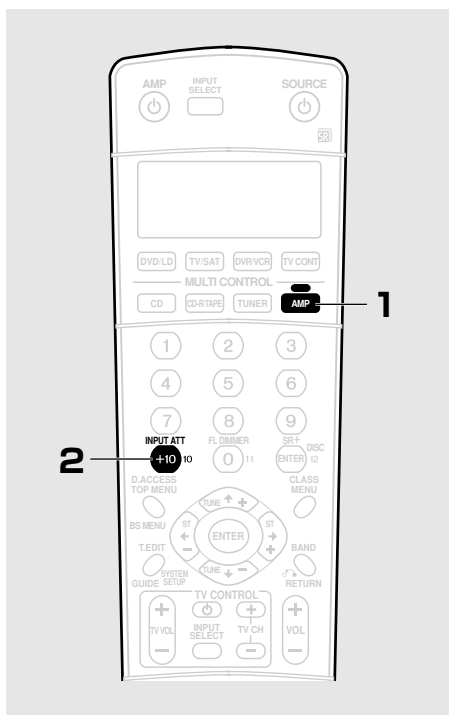
押すたびに、ダイアログエンハンスメント機能のONとOFFが切り換わります。

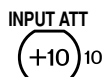
メモ

- MULTI CH INでは、この機能は選択できません。
- ダイレクト再生時にこの機能をＯＮにすると、自動的にSTEREOモードに切り換わります。
- DTS 96/24信号などの高音質ソースでは、この機能は使用できません。

アナログ入力信号の歪みを低減する

アナログ音声信号が過度に入力され（フロント表示部のOVERインジケーターが点灯して）音が歪んでしまうとき、入力信号レベルを下げて歪みを低減することができます。

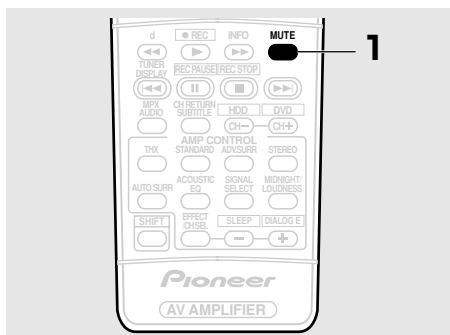
1 AMP

アンプ操作モードにする

2 INPUT ATT +10 10

INPUT ATTボタンを押す。

押すたびに、インプットアッテネーター機能のＯＮとＯＦＦが切り換わりＯＮのときに、ATTインジケーターが点灯します。

その他の機能

消音（MUTE）

1 MUTE

MUTEボタンを押す。

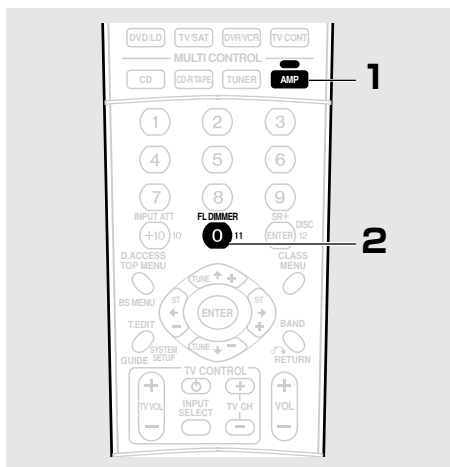
一時的に音が消えます。もう一度押すと、元の音量に戻ります。音量＋／－ボタンでもミュートを解除します。

表示部の明るさ調整（FL DIMMER）

フロントパネル表示部の明るさを4段階に調整することができます。

1 AMP

アンプ操作モードにする。

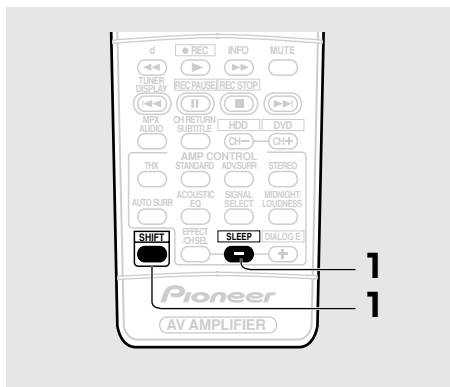
2 FL DIMMER 0 11

好みの明るさに調整する。

押すたびに表示部の明るさが4段階で切り換わります。

メモ

- 明るさを一番暗い設定にしたときは、i.LINKインジケーターとMCACCインジケーターを消灯します。
- 設定した明るさにかかわらず、何かの操作をしたときは明るく点灯し、数秒後に元の明るさに戻ります。
- エラー表示や禁止メッセージは、この設定にかかわらず明るく表示されます。

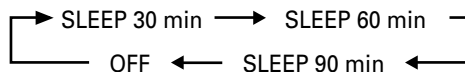
スリープタイマーの設定（SLEEP）

1

SLEEP –

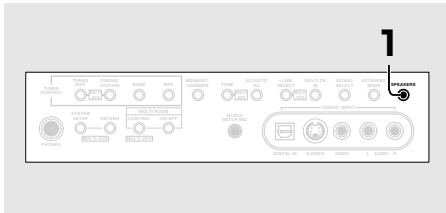
SHIFTボタンを押しながらSLEEPボタンを押してタイマーを設定する。

押すたびにスリープタイマーの時間が以下のように切り換わります。
スリープタイマーが設定されるとSLEEPインジケーターが点灯します。

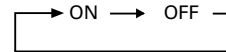
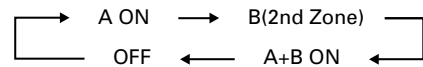
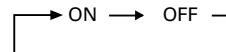
SLEEP 30 min → SLEEP 60 min → SLEEP 90 min → OFF → SLEEP 30 min

メモ

- スリープタイマーを設定したあとにスリープボタンを1 回押すと、残り時間が表示できます。
- マルチルーム機能（→79ページ）がONのときは、スリープタイマーを設定するとサブルームの電源も同時に切れます。

スピーカーシステムA/Bの切り換え

スピーカーシステムA/Bを切り換えると、再生されるスピーカーが切り換わります。必要に応じて使用するスピーカーシステムを選択してください。

1 SPEAKERS **スピーカーシステムを切り換える。**

サラウンドバックシステムの設定(→58ページ)によって選択できるモードが換わります。ボタンを押すたびに、以下のように切り換わります。

「Normal (SB)」に設定している場合

「Second Zone」に設定している場合

「Front Bi-Amp」に設定している場合

メモ

ヘッドホンをPHONES端子に差し込んでいる間は自動的にOFFに切り換わります。(ただし、Second Zoneに設定されているときは、スピーカー端子Ⓑからは音が出ます。)

各スピーカーシステム選択時の出力音声について

「Normal (SB)」に設定している場合

A (SP►A) ： すべてのスピーカーから出力されます。

「Second Zone」に設定している場合

A (SP►A) ： スピーカー端子Ⓐに接続されたスピーカーから出力されます。(サラウンド再生が可能です。)

B (SP►B) ： スピーカー端子Ⓑに接続されたスピーカーからのみ出力されます。(2chステレオ再生のみ可能です。)MULTI CH INでは音が出力されません。

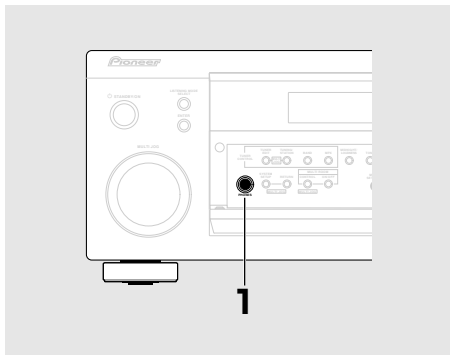
A+B (SP►AB) ： 上記A (SP►A)とB (SP►B)の音声が同時に出力されます。

「Front Bi-Amp」に設定している場合

A+B (SP►AB) ： すべてのスピーカーから出力されます。スピーカー端子Ⓑから出力される音声はスピーカー端子Ⓐのフロント出力と同じ音声です。

上記の全設定共通

OFF (SP►) ： スピーカーから出力されません。(ただし、プリアウト端子からは常に音声が出力されているため、サブウーファーからは音が出る場合があります。)

ヘッドホンを使う

1 ヘッドホンをPHONES端子に差し込む。

差し込むとスピーカーから音は出なくなります。

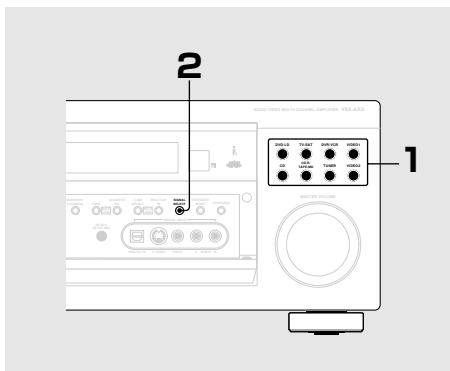
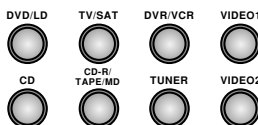
メモ

- リスニングモードは「STEREO」、「DIRECT」と「Phones Surround」のみ選択できます。
- 各リスニングモードの効果は2chにダウンミックスされます。
- ヘッドホンを差し込むとスピーカーから音は出なくなります。ただし、MULTI CH INモードのときはサブウーファーからのみ音が出ます。
- MULTI CH INモードのときは、FRONT L、R端子からの音声のみをヘッドホンから出力します。
- ヘッドホンを差し込んでいるときはシステムセットアップを行うことはできません。

録音／録画をする

本機を通して録画／録音を行う場合、双方の機器は同じタイプのコードで接続されている必要があります。
録音／録画端子には、音声のアナログ/デジタル、映像のコンポジット/Sビデオ信号間の相互変換を行っていないため、接続コードを一致させてください。

1 録音/録画するソースを選ぶ。

DVD/LD　TV/SAT　DVR/VCR　VIDEO1
CD　CD-R/TAPE/MD　TUNER　VIDEO2

リモコンのMULTI CONTROLボタンまたはINPUT SELECTボタンでも選択することができます。

2 入力信号を選択する。

SIGNAL SELECT

デジタル録音するときは、DIGITALを選択します。詳しくは「ANALOG/DIGITAL信号の切り換え」(→37ページ)をご覧ください。

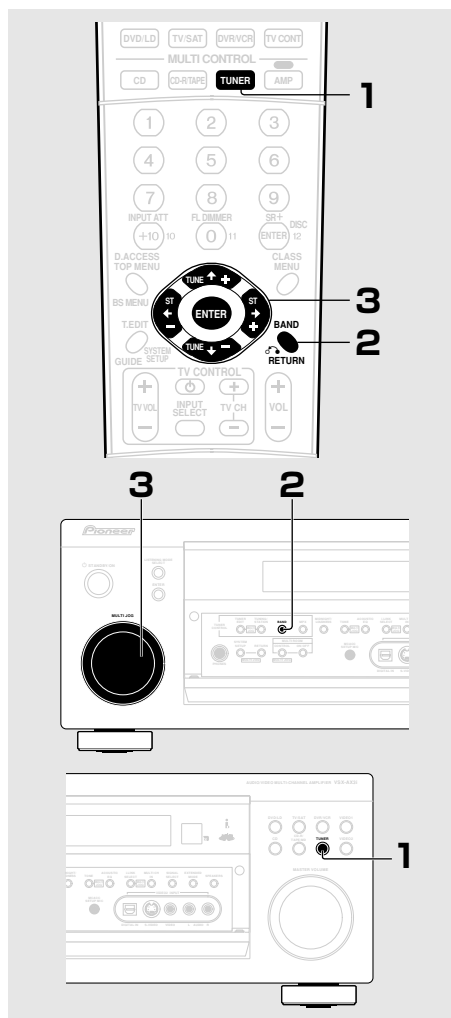
3 録音/録画機器の録音/録画を開始する。

4 録音/録画するソースを再生する。

メモ

- 本機の音量、チャンネルレベル、トーンコントロール(TREBLE、BASS)、サラウンドの設定などは、録音信号には効果がありません。
- 市販ソフトの録音／録画は、個人で楽しむ場合を除いて、著作権法上認められていません。また、コピーガード信号により録音／録画のできないものもあります。
- デジタル録音について、ソフトによってはコピー回数制限のあるものがあります。詳しくは録音機器の取扱説明書をご覧ください。
- サラウンドの自動設定(AUTO MCACC)中は、録音／録画を行わないでください。
- MULTI CH INに入力された音声は、録音することができません。

ラジオ放送を聞く

放送の受信のしかた

1 TUNER **チューナーモードにする。**

2 BAND **AMとFMを切り換える。**

押すたびに、AMとFMが切り換わります。

3 **放送を受信する。**

TUNE+/−ボタンを押して選局します。(本体の場合はMULTI JOGダイヤルで選局します。)

選局方法には、以下の3種類があります。

オートチューニング：

ボタンを押して、周波数が動きはじめたら指を離す。

周波数が自動的に変化して、放送局を受信すると止まります。

途中で止めるときはTUNE＋ボタンまたはTUNE−ボタンを押します。

マニュアルチューニング：

ボタンを1回ずつ押す。

周波数が1ステップずつ変化します。

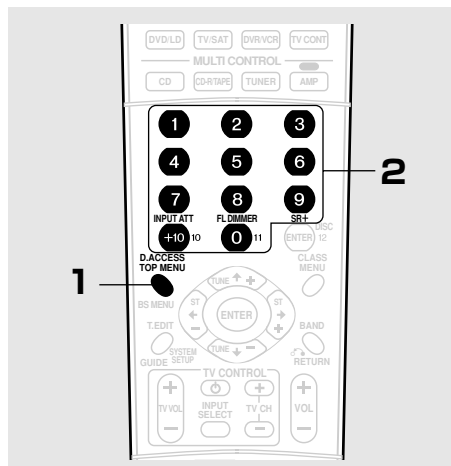
1ステップはFM放送が0.1MHzで、AM放送が9kHzです。

ハイスピードマニュアルチューニング：

ボタンを押し続けます。

周波数が連続して変化します。指を離すと止まります。

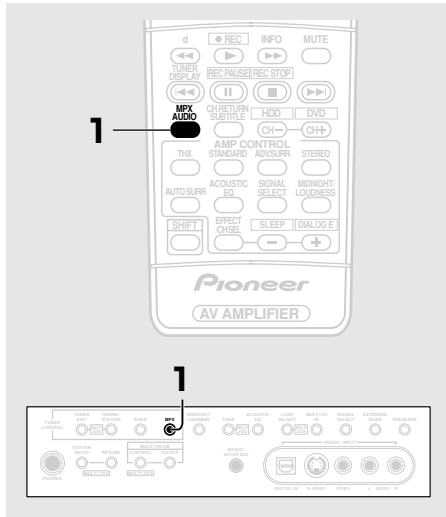
周波数を直接入力して選局する(ダイレクトアクセスチューニング)

リモコンでTUNERモードのとき、下記の方法で選局することもできます。

1 D.ACCESS TOP MENU **ダイレクトアクセスチューニングモードにする。**

2 **数字ボタンで、放送局の周波数を入力する。**

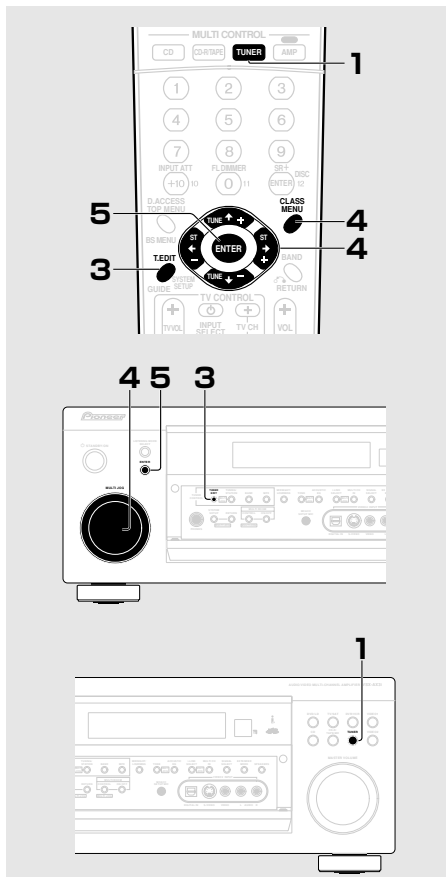
例えば、「FM76.00MHz」を選ぶには、7、6、0、0を押します。

FMの受信状態が悪いとき（MPXモード）

FM放送を聞いているとき、受信状態が悪いためTUNEDもしくはSTEREOインジケーターが点灯しないときがあります。そのようなときはMPXモードでモノラル受信にすることでノイズを低減させることができます。

1 MPX AUDIO **モノラル受信にする。**

MONOインジケーターが点灯します。
押すたびに、モノラル受信とステレオ受信が切り換わります。

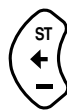
放送局を記憶する（ステーションメモリー）

本機では、よく聞く放送局をA.B.Cのクラスに各10局、合計30局まで記憶することができます。

1 TUNER **チューナーモードにする。**

2 **記憶したい放送を受信する。****（→51ページ）**

3 T.EDIT **放送局の記憶モードにする。**

「STATION MEMORY」と表示され、放送局を記憶するモードになります。

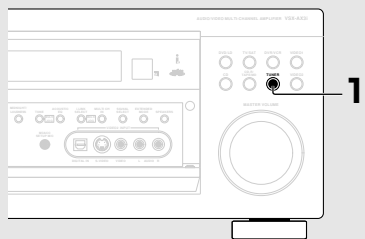
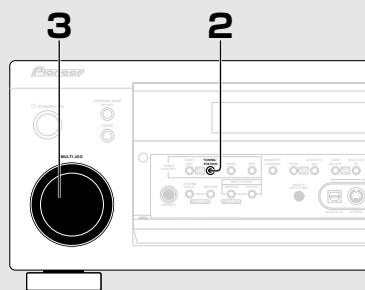
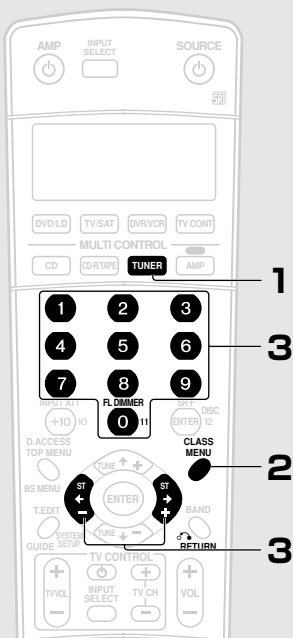
4

ステーション番号を選ぶ。

A1〜C0までのステーション番号をお好みで選択することができます。
CLASSボタンを押すことでA、B、Cのステーションクラスを切り換えることができます。
（本体の場合はMULTI JOGで選びます。）

5 ENTER **記憶したいステーション番号を決定する。**

ステーション番号が記憶されます。

6 **手順2〜5を繰り返して、30局まで記憶することができます。**

記憶した放送局を呼び出す

1 TUNER チューナーモードにする。

2 CLASS MENU 呼び出したい局が記憶されているメモリークラスを選ぶ。

（本体の場合は、TUNING/STATIONを押します。）

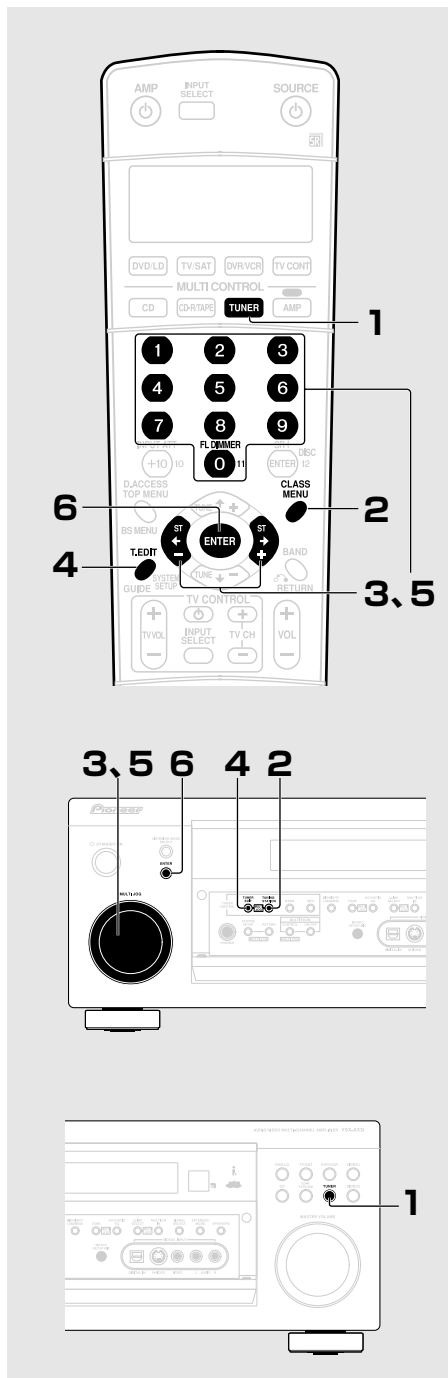
3

呼び出したい局が記憶されているステーション番号を選ぶ。

数字ボタンでステーション番号を選ぶこともできます。
（本体の場合は、MULTIJOGで選びます。）

メモ

- 1カ月程度、本機の電源コードを電源コンセントから抜いておくと、ステーションメモリーやステーションネームは消去されますのでご注意ください。

放送局に名前をつける（ステーションネーム）

1 TUNER **チューナーモードにする。**

2 CLASS MENU **メモリークラス(A,B,C)を選ぶ。**

(本体の場合は、TUNING/STATIONを押します。)

3 **名前をつけたい局が記憶されているステーション番号を選ぶ。**

数字ボタンでステーション番号を選ぶこともできます。(本体の場合は、MULTI JOG で選びます。)

4 T.EDIT **ステーションネームモードにする。**

「STATION NAME」と表示され、名前を入力するモードになります。（本体の場合は、TUNER EDITを押します。）

5 **入力したい文字を選ぶ**

（本体の場合はMULTI JOGで選びます。）

入力できる文字は以下のとおりです。

ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwxyz
0123456789
!”#$%&’()*+,−./:;<=>?@[\]^_{|}~(スペース)

6 ENTER **選んだ文字を決定する。**

7 **手順5〜6を繰り返して名前をつける。**

メモ

- 最大4文字までの入力となります。
- リモコンのTUNER DISPLAYボタンを押すことで、周波数とメモリーさせた名前を切り換えることができます。
- 名前を削除したいときはすべてスペースを入力してください。

システムセットアップについて

システムセットアップの設定項目一覧

本機のシステムセットアップで設定できる全項目です。

システムセットアップ項目		詳細項目		内容	参照ページ
1	Surr Back Systm（サラウンドバックシステムの設定）	——		SPEAKER B端子の用途設定	58
2	AUTO MCACC（サラウンドの自動設定）	——		音場補正の全項目を自動測定	13
3	MANUAL MCACC（詳細なサラウンドの設定）	a	Fine Ch Level	各チャンネルの出力レベルの詳細設定	59
		b	Fine Ch Distance	各スピーカーまでの距離を入力し、最適なディレイ値の詳細設定	60
		c	EQ AUTO Setting	音場補正の補正カーブを自動測定	61
		d	EQ Data Copy	補正カーブの保存	62
		e	EQ CUSTOM Adjust	補正カーブの調整	63
		f	EQ Data Check	補正カーブの確認	64
4	Manual SP Setup（聴感によるサラウンドの設定）	a	Speaker Setting	スピーカー接続の有り無し、低域再生能力などの設定	65
		b	Crossover Network	クロスオーバー周波数の変更	67
		c	Channel Level	各チャンネルの出力レベルを補正	68
		d	Speaker Distance	各スピーカーまでの距離を入力し、最適なディレイ値に設定	69
5	Input Assign（入力に関する設定）	a	Digital Input	デジタル入力端子の割り当て入力ファンクションの変更	70
		b	Component Input	コンポーネントビデオ入力端子の割り当て入力ファンクションの変更	71
		c	i. LINK Input	i.LINK対応機器の割り当て入力ファンクションの変更	72
6	Other Setup（その他の設定）	a	DRC Setup	ダイナミックレンジ圧縮レベルの変更	73
		b	Dual Mono Setup	デュアルモノラル音声の選択	74
		c	LFE ATT Setup	LFE（超低域信号成分）のレベル減衰	75
		d	SR+ Setup	パイオニアプラズマディスプレイとの連動設定	85
		e	Multi Room Setup	マルチルーム機能の設定	79
		f	12V Trigger Setup	12Vトリガー対応機器との連動	76
		g	SACD GAIN Setup	SACDディスク 再生時のゲイン設定	77

MCACCの詳細と効果

以下4つの設定(補正)を音場補正と呼んでいます。サラウンドの設定とは、この音場補正を行うことをいいます。本機のオートセットアップ機能を使うと、これら4つの設定(音場補正)を自動で行うことができます。

スピーカーシステムの設定 (Speaker Setting)

これはソースに含まれる音声成分のすべてを再生するための基本設定です。この設定が正しく行われないと、サウンドトラックの特定チャンネルに収録された音声が再生されなかったり、低域成分が欠落してしまう、などの不具合が発生する場合があります。スピーカー接続の有り/無しや低域再生能力などを設定し、上記の問題を回避します。

スピーカー出力レベルの設定 (Channel Level)

リスニングポジションでの各チャンネルの音量レベルを一定に合わせる設定です。「スピーカーまでの距離設定」と同様に、音の定位感や移動感を正確に再現することが目的です。この設定が正しく行われないと、いわゆる「バランスの悪い音」になってしまいます。これまでは聴感での設定が一般的でしたが、この方法では正確な設定は不可能です。プロのスタジオ・エンジニアは、ミキシング作業前に必ず専用の音圧測定器で測定を行い、バランスの微調整を施します。本機では、MCACCによって、このプロレベルの精密な調整が誰でも簡単にできるようになりました。

スピーカーまでの距離の設定 (Speaker Distance)

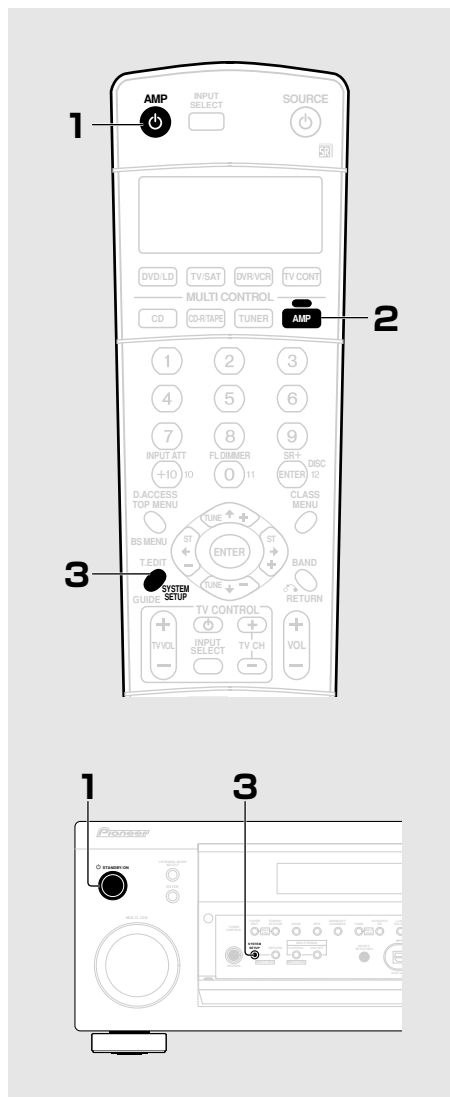
実際には距離を設定することで各チャンネル間の遅延(ディレイ)を算出・補正しています。マルチチャンネル再生では特に重要で、音の定位感や移動感を正確に再現するために必要です。測定用のマイクを使用した実測では、電気的な遅延現象(特にサブウーファーに多く見受けられる)をも測定します。よって、メジャーで測った物理的な距離より大きい値が設定されることもありますが、遅延補正として正しい値になっています。

視聴環境の周波数特性の補正 (Acoustic Cal EQ)

「視聴環境の周波数特性の補正」とは、リスニングポイントでの視聴環境トータルの周波数特性(以下、F特)の補正を意味します。全チャンネルに同じ種類のスピーカーを使用しても、リスニングポイントでは音色が違って聞こえます。これは、設置場所・設置方法・壁面・内装、など様々な影響により実際のF特が違ってしまうためです。
本機の「視聴環境の周波数特性の補正」では、リスニングルーム固有のF特まで含めた補正をすることで、各チャンネルの音のつながりが飛躍的に向上し、これまでにない実像感やリアルな移動感を再現します。スタジオや映画館などにおいてはこの補正は絶対に欠かせないものです。これがホームシアターとの大きな差でしたが、当社の研究により、一般家庭環境におけるF特の補正には最も有効であるエンベロープ補正方式を採用し、この差を埋めることを可能にしました。
全チャンネルの周波数特性をフラットにする「ALL CH ADJUST」と、フロントスピーカーの特性に合わせ込む「FRONT ALIGN」の2種類の補正カーブを用意しました。

設定項目の選択

電源を入れてメニュー画面を開くまでの手順です。ここから各設定の操作に進めます。

1

本機の電源を入れ、テレビの電源も入れる。

テレビは本機の出力映像が表示されるようにしておきます。

2

AMP

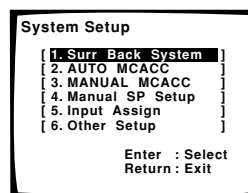
リモコンをアンプ操作モードにする。

3

SYSTEM SETUP

システムセットアップにする。

テレビ画面にシステムセットアップが表示されます。

```
System Setup

[ 1. Surr  Back  System   ]
[ 2. AUTO  MCACC          ]
[ 3. MANUAL  MCACC        ]
[ 4. Manual  SP  Setup    ]
[ 5. Input  Assign        ]
[ 6. Other  Setup         ]

        Enter   : Select
        Return : Exit
```

システムセットアップの操作には下記のボタンを使います。

リモコンボタン	本体ボタン	用途
SYSTEM SETUP	SYSTEM SETUP	システムセットアップを開く／閉じる
TUNE ST ENTER	MULTI JOG / ENTER	カーソル移動と設定値の変更 選択項目を決定する
RETURN	RETURN	1つ前の画面に戻る

メモ

- ヘッドホン使用中は、システムセットアップは表示できません。
- 約3分間放置するとシステムセットアップは自動的に終了します。
- 一度登録した設定内容は本機に記憶されるため、システムを使用するたびに設定し直す必要はありません。ただし、スピーカーシステムの構成や配置を変更したり、新しくスピーカーを追加したときには、設定し直す必要があります。また、設定内容は1カ月程度、コンセントを抜いた状態にしておくと消去されますのでご注意ください。

Surr Back System（サラウンドバックシステムの設定）

ここではスピーカー端子Ⓑ（サラウンドバックチャンネル）の使用用途を設定します。以下の項目から選択します。
[Normal(SB)]：一般的なサラウンドバックスピーカー用（6.1chまたは7.1chシステム）
[Second Zone]：メインの5.1chシステムとは別のステレオ再生用
[Front Bi-Amp]：フロントスピーカーのバイアンプ駆動用（5.1chシステム）

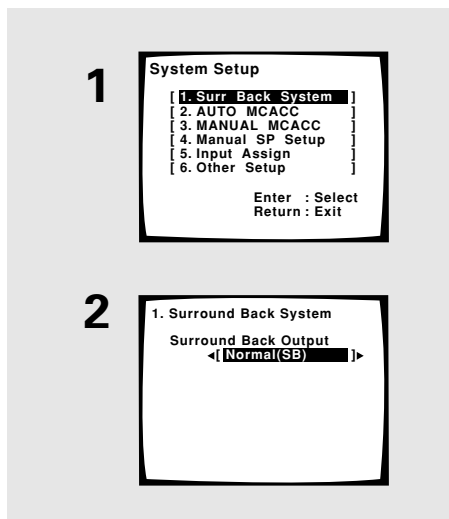
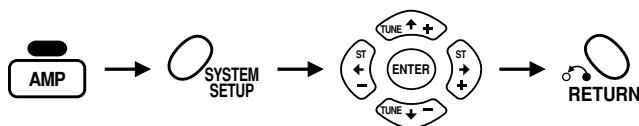
1

System Setup
[1. Surr Back System]
[2. AUTO MCACC]
[3. MANUAL MCACC]
[4. Manual SP Setup]
[5. Input Assign]
[6. Other Setup]
Enter : Select
Return : Exit

2

1. Surround Back System
Surround Back Output
◀[Normal(SB)]▶

システムセットアップで使用するボタン

AMP → SYSTEM SETUP → ENTER（TUNE ↑ + / TUNE ↓ − / ST ← − / ST → +） → RETURN

1 **[1. Surr Back System]を選んで決定する。**
「Normal (SB)」と「Second Zone」、「Front Bi-Amp」の選択画面が表示されます。詳しい説明は上記をご覧ください。

2 **[Normal (SB)]と[Second Zone]、[Front Bi-Amp]のいずれかを選んで決定する。**

3 **RETURNを押す。**
サラウンドバックシステムの設定を終了します。

メモ

[Second Zone]、[Front Bi-Amp]を選択すると、サラウンドバックスピーカーについての各種設定を行うことはできません。

プリアウト出力について

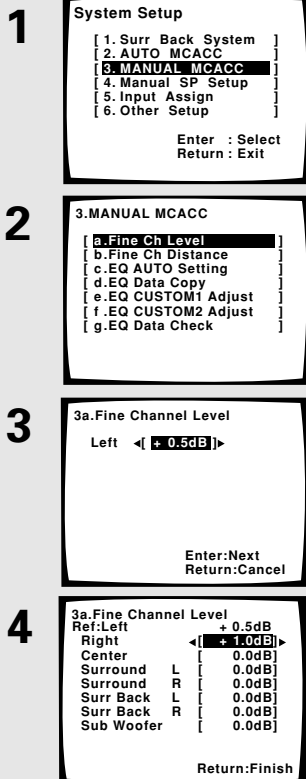
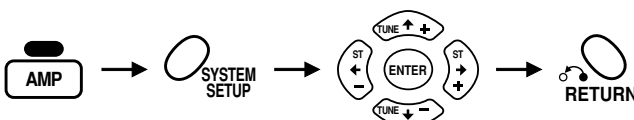
上記設定に連動して、プリアウト端子のサラウンドバックchから出力される音声が以下のようになります。
[Normal(SB)]のとき：サラウンドバックchの音声
[Second Zone]のとき：ダウンミックスされた2chの音声
[Front Bi-Amp]のとき：フロントchと同じ音声

AUTO MCACC（サラウンドの自動設定）

本機のオートセットアップでは従来のマニュアル調整では難しかったさまざまな設定を、付属のセットアップ用マイクを使い自動で高精度に測定、設定することができます。「ホームシアター入門 AUTO MCACC(サラウンドの自動設定)」をご覧ください。（→13ページ）

MANUAL MCACC（詳細なサラウンドの設定）

Fine Ch Level（スピーカー出力レベルの詳細な設定）

フロント左スピーカーを基準としてその他のチャンネルレベルを調整します。選択したチャンネルとそのチャンネルに対して最適と思われるもう1つのチャンネルからテストトーンが再生されますので、そのテストトーンどうしが同じ大きさに聞こえるように調整します。
音圧計をお持ちの場合は、音圧レベルをCウェイト／スローモードで75dB SPLに調整してください。

システムセットアップで使用するボタン

1 [3.MANUAL MCACC]を選択して決定する。

詳細なサラウンド設定のメニュー画面になります。

2 [Fine Ch Level]を選択して決定する。

スピーカー出力レベルの詳細な設定になります。

3 フロント左チャンネルのレベルを調整して決定する。

フロント左チャンネルからテストトーンが出力されます。

テストトーンは大きな音で再生されます。MASTER VOLUMEは自動的に0dBになり、テストトーンが再生されます。

4 調整したいスピーカーを選択してチャンネルレベルを調整する。

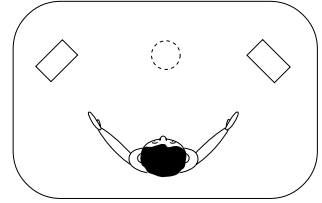
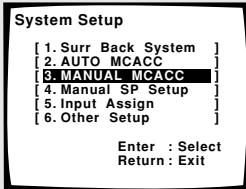
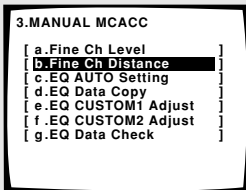
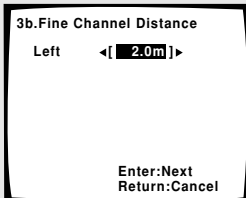
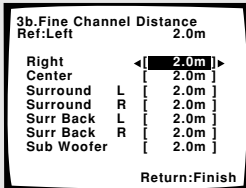
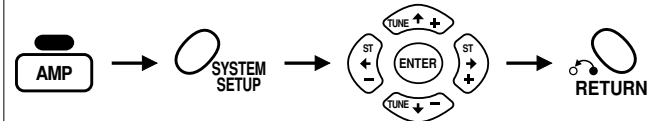
選択したチャンネルとそのチャンネルに対して最適と思われるもう1つのチャンネルから交互にテストトーンが出力されます。
－10.0dBから＋10.0dBの範囲内で、0.5dB間隔で調整することができます。

5 [RETURN]を押す。

スピーカー出力レベルの詳細な設定を終了します。

サブウーファーからのテストトーンは周波数が低いため、実際のレベルよりも小さく聞こえる場合があります。

Fine Ch Distance（スピーカーまでの距離の詳細な設定）

選択したチャンネルとそのチャンネルに対して最適と思われるもう1つのチャンネルからテストトーンが再生されます。その2つのスピーカーに対してリスニングポジションから右図のように向き、2つのテストトーンの聞こえるポイントが真ん中になるように調整します。なお、サブウーファーは、この方法でディレイ値を合わせるのが困難です。この場合は、テスト信号を出しながら距離の値を動かし、視聴ポイントでテスト信号の音量が最も大きくなるように調整してください。

システムセットアップで使用するボタン

1 **[3.MANUAL MCACC]を選択して決定する。**

詳細なサラウンド設定のメニュー画面になります。

2 **[Fine Ch Distance]を選択して決定する。**

スピーカーまでの距離の詳細な設定になります。

3 **フロント左チャンネルのスピーカーまでの実測距離を入力して決定する。**

4 **調整したいスピーカーを選択してスピーカーまでの距離を調整する。**

選択したチャンネルのスピーカーともう1つのスピーカーからテストトーンが出力されます。

テストトーンは大きな音で再生されます。MASTER VOLUMEは自動的に0dBになりテストトーンが再生されます。

0.1mから9.0mの範囲内で、0.1m間隔で設定できます。

5 **[RETURN]を押す。**

スピーカーまでの距離の詳細な設定を終了します。

アコースティックキャリブレーション EQ（視聴環境の周波数特性の補正）

視聴環境のトータルな周波数特性をマイクを用いたオートセットアップにより 、自動で補正(均一化)します。補正カーブには[ALL CH ADJUST]と[FRONT ALIGN]の2種類がありますが、それらの補正カーブをお好みで調整して[CUSTOM1]、[CUSTOM2]として保存することもできます。

補正カーブを自動測定する

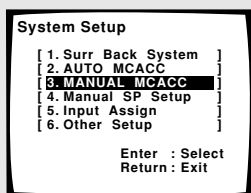
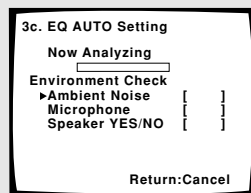
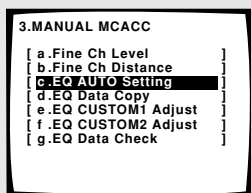
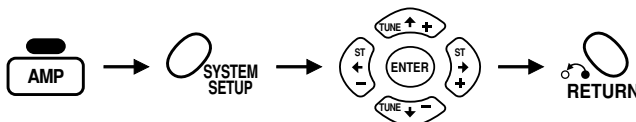
サラウンドの設定を手動で行ったときにこの[EQ AUTO Setting]で補正カーブを自動測定します。「AUTO MCACC(サラウンドの自動設定)」(→１３ページ)でオートセットアップしたときは、すでにこの自動測定は行われていますので不要です。

2

```
System Setup
[ 1. Surr  Back  System  ]
[ 2. AUTO  MCACC         ]
[ 3. MANUAL  MCACC       ]
[ 4. Manual  SP  Setup   ]
[ 5. Input  Assign       ]
[ 6. Other  Setup        ]

          Enter  : Select
          Return : Exit
```

3

```
3.MANUAL MCACC
[ a.Fine Ch Level          ]
[ b.Fine Ch Distance       ]
[ c.EQ AUTO Setting        ]
[ d.EQ Data Copy           ]
[ e.EQ CUSTOM1 Adjust      ]
[ f .EQ CUSTOM2 Adjust     ]
[ g.EQ Data Check          ]
```

```
3c. EQ AUTO Setting
  Now Analyzing

Environment Check
 ▸Ambient Noise     [    ]
  Microphone        [    ]
  Speaker YES/NO    [    ]

           Return:Cancel
```

システムセットアップで使用するボタン

1 付属のセットアップ用マイクをMCACC SETUP MIC端子につなぐ。

2 [3.MANUAL MCACC]を選択して決定する。

詳細なサラウンド設定のメニュー画面になります。

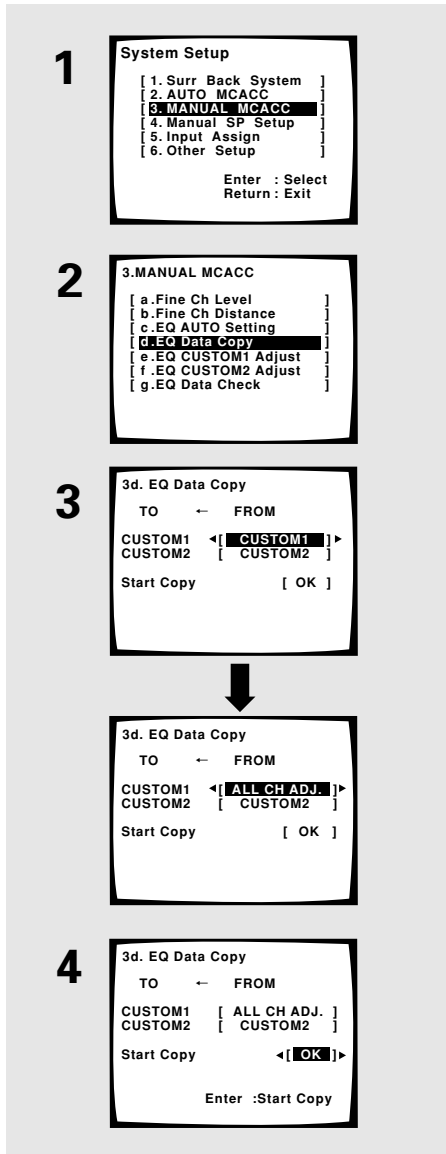
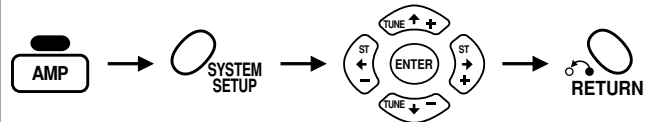
3 [EQ AUTO Setting]を選んで決定する。

補正カーブの自動測定がスタートします。

テストトーンは大きな音で再生されます。MASTER VOLUMEは自動的に0dBになり、テストトーンが再生されます。

測定が終了すると、自動的に手順3の画面に戻ります。この測定のデータを使って下記の項目に進めます。
[EQ Data Copy]：測定結果を保存する
[EQ CUSTOM1/2 Adjust]：保存データを調整する
[EQ Data Check]：測定結果を確認する

自動測定された補正カーブを手動で調整する

あらかじめ、オートセットアップ(→13ページ)またはEQ AUTO Setting(→61ページ)を行い、補正カーブを自動で調整しておいてください。ここではすでに調整されている[ALL CH ADJUST]または[FRONT ALIGN]の補正カーブを[CUSTOM1]または[CUSTOM2]に保存し、その補正カーブを手動で調整する方法を説明します。

システムセットアップで使用するボタン

1 [3.MANUAL MCACC]を選択して決定する。

詳細なサラウンド設定のメニュー画面になります。

2 [EQ Data Copy]を選んで決定する。

「CUSTOM1」または「CUSTOM2」に保存する補正カーブの種類を選択する画面になります。

3 「CUSTOM1」または「CUSTOM2」のどちらに保存するかを選んで、補正カーブの種類を選択する。

「ALL CH ADJ.」と「FRONT ALIGN」、「CUSTOM1」と「CUSTOM2」から選択します。

CUSTOM1に「CUSTOM1」を選択した場合は、内容に変わりありません。

4 [OK]を選んで決定する。

補正カーブの保存が開始されます。
「Cancel」を選ぶとコピーは行われません。

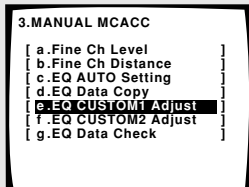
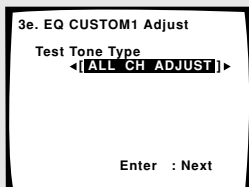
5 RETURNを押す。

手順2の画面に戻ります。

6

```
3.MANUAL MCACC

[ a.Fine Ch Level          ]
[ b.Fine Ch Distance       ]
[ c.EQ AUTO Setting        ]
[ d.EQ Data Copy           ]
[ e.EQ CUSTOM1 Adjust      ]
[ f.EQ CUSTOM2 Adjust      ]
[ g.EQ Data Check          ]
```

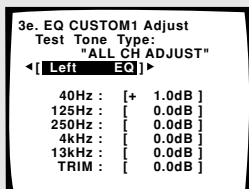
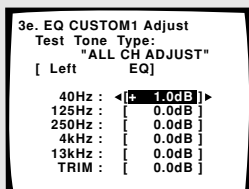
7

```
3e. EQ CUSTOM1 Adjust

  Test Tone Type
       ◄[ ALL CH ADJUST ]►

          Enter  : Next
```

以下は[ALL CH ADJUST]を選択した場合の画面です。

8

```
3e. EQ CUSTOM1 Adjust
  Test Tone Type:
       "ALL CH ADJUST"
 ◄[ Left        EQ]►

   40Hz :  [+  1.0dB ]
  125Hz :  [   0.0dB ]
  250Hz :  [   0.0dB ]
    4kHz :  [   0.0dB ]
  13kHz :  [   0.0dB ]
   TRIM :  [   0.0dB ]
```

9

```
3e. EQ CUSTOM1 Adjust
  Test Tone Type:
       "ALL CH ADJUST"
  [ Left        EQ]

   40Hz : ◄[+  1.0dB ]►
  125Hz :  [   0.0dB ]
  250Hz :  [   0.0dB ]
    4kHz :  [   0.0dB ]
  13kHz :  [   0.0dB ]
   TRIM :  [   0.0dB ]
```

6 手順3で選んだ保存先に合わせて[EQ CUSTOM1 Adjust]または[EQ CUSTOM2 Adjust]を選んで決定する。

保存した補正カーブの手動調整になります。

7 テストトーンの種類として[ALL CH ADJUST]または[FRONT ALIGN]を選択して決定する。

テストトーンが出力されます。

テストトーンは大きな音で再生されます。MASTER VOLUMEは自動的に0dBになり、数秒後にテストトーンが再生されます。

[ALL CH ADJUST]：サブウーファーを除いたすべてのスピーカーのフラット化補正。
[FRONT ALIGN]：フロントスピーカーの特性に合わせた補正。
それぞれの周波数帯域が同じレベルになるように調整してください。

8 調整したいチャンネルを選択する。

手順7で[FRONT ALIGN]を選択したときは、ここで[Left][Right]を選択することはできません。

9 調整したい周波数帯域を選択して調整する。

−6.0dBから+6.0dBの範囲内で、0.5dB間隔で調整することができます。

メモ

- 調整中に「OVER」がディスプレイに表示されたときは、その帯域または他の帯域のレベルが高すぎるので、「OVER」表示が消えるまで、さまざまな帯域のレベルを下げてください。
- 「スピーカーシステムの設定」でSMALL（小）に設定されたチャンネルは40Hzを選択することはできません。
- 「TRIM」では、それぞれの帯域を調整することで、変わってしまったそのチャンネルレベルの全体的なバランスを調整します。

10 手順8～9を繰り返して、各チャンネルの周波数帯域を調整します。

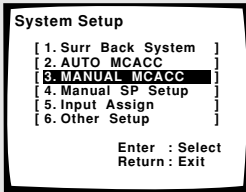
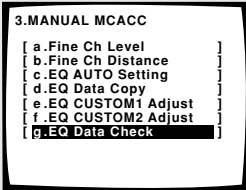
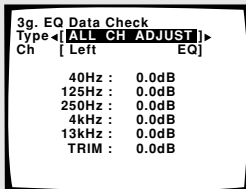
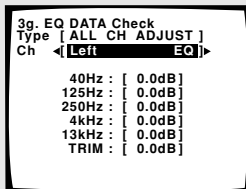
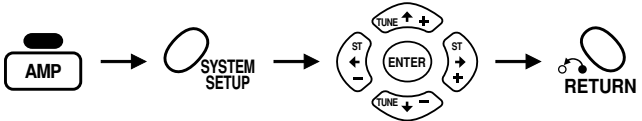
11 RETURNを押す。

手順7の画面に戻ります。

12 RETURNを押す。

[EQ CUSTOM Adjust]モードを終了します。

補正カーブを確認する

オートセットアップ(→13ページ)またはEQ AUTO Setting(→61ページ)にて設定された、すべての補正カーブを確認することができます。

1
2
3
4
システムセットアップで使用するボタン

1 [3.MANUAL MCACC]を選択して決定する。

詳細なサラウンド設定のメニュー画面になります。

2 [EQ Data Check]を選んで決定する。

3 補正カーブの種類を選ぶ。

[ALL CH ADJUST]、[FRONT ALIGN]、[CUSTOM1]、[CUSTOM2]から選びます。

メモ

- 再生中にEQ Data Checkを行うと、補正カーブごとに試聴でき、聴き比べることができます。なお「OFF」はEQ補正をしていない音です。

4 確認したいチャンネルを選ぶ。

そのチャンネルの周波数帯域の設定値が表示されますので、確認します。
手順3で[FRONT ALIGN]を選択したときは、ここで[Left][Right]を確認することはできません。

5 手順3～4を繰り返して、各チャンネルごとに確認します。

6 RETURNを押す。

[EQ Data Check]モードを終了します。

Manual SP Setup(聴感によるサラウンドの設定)

「AUTO MCACC(サラウンドの自動設定)」(→13ページ)でオートセットアップを行った場合はすでに設定されています。必要に応じてお好みで再設定できます。

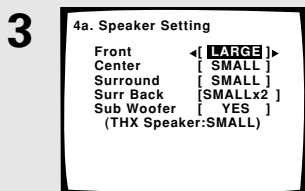
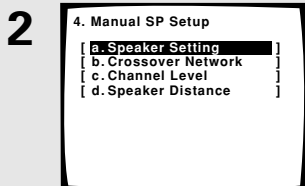
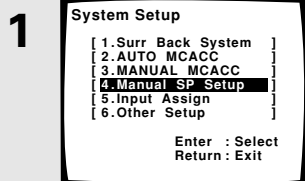
Speaker Setting (スピーカーシステムの設定)

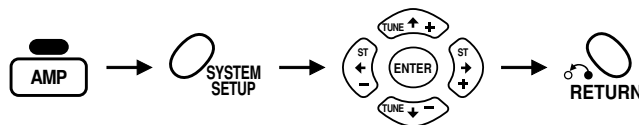
各チャンネルに接続されたスピーカーの有無や低域再生能力の大小を設定することで、再生するソースの全音域を最適なチャンネルへ配分します。お持ちのスピーカーシステムや視聴環境などに合わせて正しく設定してください。

1

2

3

メモ

THX認証のスピーカーシステムをご使用の際は、すべて[SMALL]に設定してください。

システムセットアップで使用するボタン

1 [4.Manual SP Setup]を選んで決定する。

2 [Speaker Setting]を選んで決定する。

スピーカーシステムの設定になります。

3 それぞれのスピーカーについて、それらのサイズや再生能力に合わせて設定する。

スピーカーごとに以下を選べます。各項目の意味と設定方法については次ページの説明をご覧ください。

Front (フロント)	[SMALL] [LARGE]
Center (センター)	[SMALL] [LARGE] [NO]
Surround (サラウンド)	[SMALL] [LARGE] [NO]
SurrBack (サラウンドバック)	[SMALL×2][SMALL×1] [LARGE×2] [LARGE×1][NO]
Subwoofer (サブウーファー)	[YES] [PLUS] [NO]

4 RETURNを押す。

スピーカーシステムの設定を終了します。

スピーカーシステム設定の目安

スピーカーシステム組み合せ可能一覧

Front（フロント）	[**SMALL**]		[LARGE]		
Center（センター）	[**SMALL**] [NO]		[LARGE] [SMALL] [NO]		
Surround（サラウンド）	[**SMALL**]	[NO]	[LARGE]	[SMALL]	[NO]
Surr Back（サラウンドバック）	[**SMALL ×2**/ ×1] [NO]	[NO]	[LARGE ×2/ ×1] [SMALL ×2/ ×1] [NO]	[SMALL ×2/ ×1] [NO]	[NO]
Sub Woofer（サブウーファー）	[**YES**]		[YES] [NO] [PLUS]		

太字：工場出荷時の設定(サブウーファーの接続が検出された場合)

[SMALL]　：低域再生能力が十分ではない小型スピーカー
（低音域は他の[LARGE]スピーカーやサブウーファーから出力）

[LARGE]　：低域再生能力のあるフルレンジ・スピーカー

[×2/×1]　：サラウンドバックスピーカーの接続本数(2本または1本)

[YES]　：サブウーファーを接続している場合

[PLUS]　：フロント/センターの低域成分を、サブウーファーからも同時に出力させる低域の再生量がもっとも多いモード
常に(2ch再生時でも)サブウーファーから低域が出力されるため、量感のある重低音をお好みの方にお勧めの設定(詳しくは下図参照)

[NO]　：接続していない場合(該当chの成分は他のスピーカーより出力)

サブウーファーの[PLUS]はオートセットアップでは設定されません。お好みに応じて設定を変更してください。

サブウーファーの再生する音域成分

フロント、センタースピーカーの設定によってサブウーファーの再生する音域成分は以下のようになります。

メモ

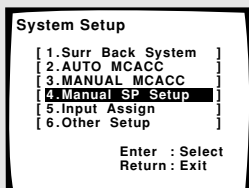
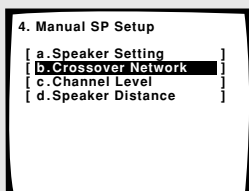
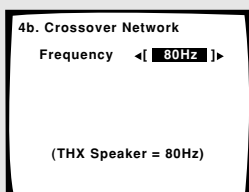
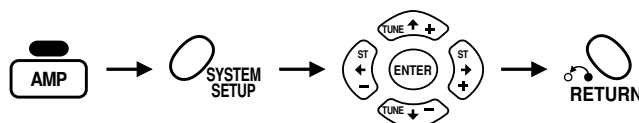
- サブウーファー[PLUS]に設定した場合、サブウーファーの低域成分とフロントの低域成分の打ち消し合いが発生し、十分な低音の効果が発揮されないことがあります。このような場合は、まずスピーカーの設置場所や向きを変えてみてください。それでも解消されない場合は実際に音を出しながらサブウーファーを[YES]にしたり、フロントを[SMALL]にして比較し、最適な設定にしてください。
- 本機はサブウーファーの自動検出機能を持っています。本機の電源を入れたときに、サブウーファーが接続されていれば自動的に [YES] になります。また、接続されていない場合は自動的に [NO] になり、フロントスピーカーが [LARGE] に設定されます。

Crossover Network（クロスオーバー周波数の設定）

「スピーカーシステムの設定」で [SMALL]（小）に設定されたスピーカーがあるとき、何Hz以下の低音域を他のスピーカー（サブウーファーを含む）で再生するか、またはLFE信号の何Hz以下の低音域を再生するかを設定します。
サブウーファーの再生する音域成分については、66ページをご覧ください。

1
```
System Setup
 [ 1.Surr Back System  ]
 [ 2.AUTO MCACC        ]
 [ 3.MANUAL MCACC      ]
 [ 4.Manual SP Setup   ]
 [ 5.Input Assign      ]
 [ 6.Other Setup       ]

        Enter  : Select
        Return : Exit
```

2
```
4. Manual SP Setup
 [ a.Speaker Setting    ]
 [ b.Crossover Network  ]
 [ c.Channel Level      ]
 [ d.Speaker Distance   ]
```

3
```
4b. Crossover Network
  Frequency   ◂[ 80Hz ]▸


  (THX Speaker = 80Hz)
```

システムセットアップで使用するボタン

1 [4.Manual SP Setup]を選択して決定する。

2 [Crossover Network]を選択して決定する。
クロスオーバー周波数の設定になります。

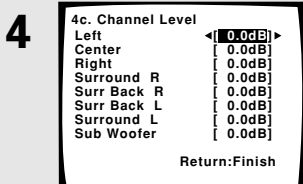
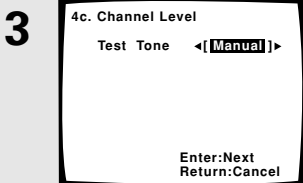
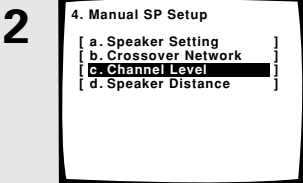
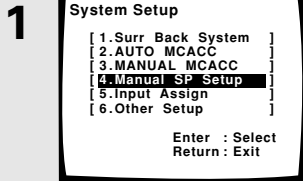
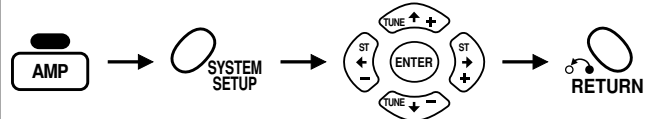
3 他のスピーカーで再生する低音域を何Hz以下にするかを選択して決定する。
[50Hz][80Hz][100Hz][150Hz][200Hz]の中から選びます。

4 RETURNを押す。
クロスオーバー周波数の設定を終了します。

メモ

- 工場出荷時は80Hzに設定されています。
- THXスピーカーをご使用の場合は、80Hzに設定してください。
- それぞれのスピーカーの性能によりますが、小型スピーカーを使用している場合は200Hzに設定することをお勧めします。

Channel Level（スピーカー出力レベルの設定）

リスニングポジション（視聴位置）での各チャンネルの音量レベルが一定に揃うように調整します。実際に出力されるテストトーンを耳で確かめながら手動で各スピーカーの出力レベルを調整します。音圧計をお持ちの場合は、音圧レベルをCウェイト/スローモードで75dB SPLに調整してください。

システムセットアップで使用するボタン

1 [4.Manual SP Setup]を選んで決定する。

2 [Channel Level]を選んで決定する。

スピーカー出力レベルの設定になります。

3 設定方法を選んで決定する。

[Manual]：テストトーンを出力するスピーカーを手動で切り換えて調整します。
[Auto]：テストトーンを出力するスピーカーが自動で切り換わります。

テストトーンは大きな音で再生されます。MASTER VOLUMEは自動的に0dBになり、テストトーンが再生されます。

4 それぞれのチャンネルレベルを調整する。

－10.0dBから＋10.0dBの範囲内で、0.5dB間隔で調整することができます。

サブウーファーからのテストトーンは周波数が低いため、実際のレベルよりも小さく聞こえる場合があります。

5 RETURNを押す。

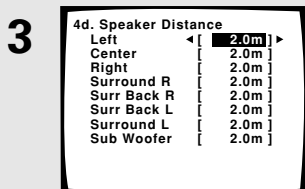
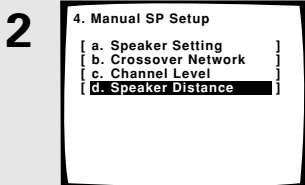
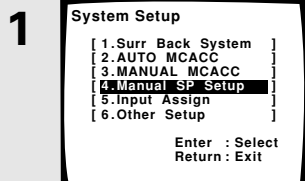
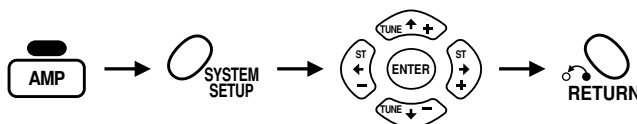
スピーカー出力レベルの設定を終了します。

Speaker Distance（スピーカーまでの距離の設定）

リスニングポジション（視聴位置）からスピーカーまでの距離を設定することにより、各チャンネルの遅延時間が自動的に算出され、リスニングポジションで適切なサラウンド効果を得ることができます。マニュアルで設定する場合は、それぞれのスピーカーから視聴位置までの距離を測り、ここで指定してください。

1

2

3

システムセットアップで使用するボタン

1 [4.Manual SP Setup]を選んで決定する。

2 [Speaker Distance]を選んで決定する。

スピーカーまでの距離の設定になります。

3 **設定するスピーカーを選んでスピーカーまでの距離を設定する。**

0.1mから9.0mの範囲内で、0.1m間隔で設定できます。

メモ

サラウンドバックスピーカーを2本接続した場合は、それらの設置（「Surr Back R」と「Surr Back L」）および設定をリスニングポジションから等距離にしますと、THXモードの効果が最大限に発揮されます。

4 RETURNを押す。

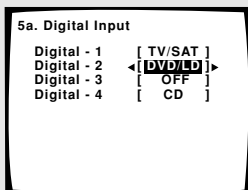
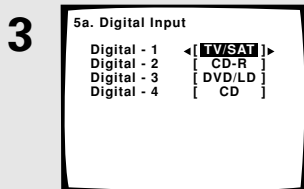
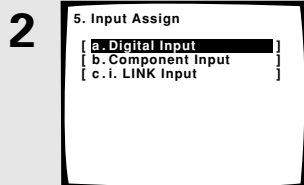
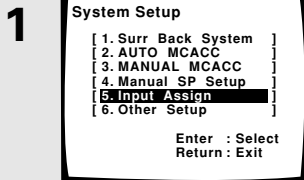
スピーカーまでの距離の設定を終了します。

Input Assign（入力に関する設定）

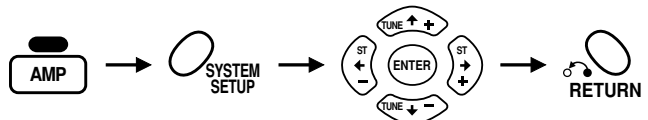
Digital Input（デジタル入力の設定）

デジタル入力端子（DIGITAL IN1〜4）に接続したデジタル機器が、工場出荷時の設定と異なるときに設定します。例えば、光デジタル端子（IN1またはIN2）を使ってDVDプレーヤーをつなぎたい場合（初期設定ではDVDプレーヤーはIN3のため）、設定を変更します。

- Digital-1〜4には[TUNER]、[VIDEO2]を選ぶことができません。

メモ

工場出荷時の各入力端子の設定は以下のとおりです。

IN 1：TV/SAT	IN 3：DVD/LD
IN 2：CD-R	IN 4：CD

システムセットアップで使用するボタン

1 **[5.Input Assign]を選んで決定する。**

入力に関する設定のメニュー画面になります。

2 **[Digital Input]を選んで決定する。**

デジタル入力の設定になります。

3 **変更したい入力を選んで適切な機器に変更する。**

例えばIN2にDVDプレーヤーをつないだ場合は、Digital-2を[DVD/LD]に変更します。

4 **RETURNを押す。**

デジタル入力の設定を終了します。
システムセットアップを終了するときは、SYSTEM SETUPを押します。

メモ

Digital-1〜4で、同じ入力を選択することはできません。同じ入力を選択した場合は、元に設定されていた入力がOFFに切り換わります。

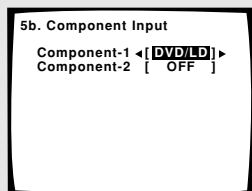
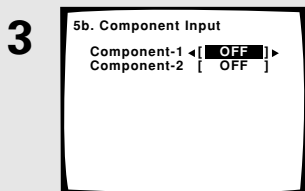
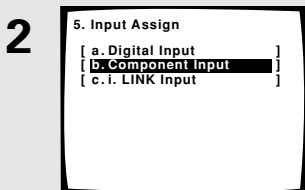
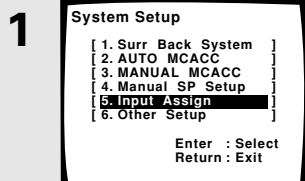
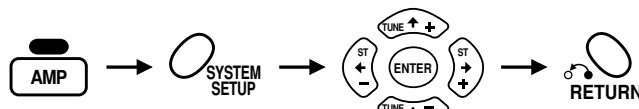
Component Input（コンポーネントビデオ入力の設定）

コンポーネントビデオ入力端子（COMPONENT VIDEO IN 1またはIN2）に映像機器を接続したときにこの設定を行います。

- 選択できる入力は[DVD/LD]、[TV/SAT]、[DVR]、[VIDEO1]です。

1

2

3

システムセットアップで使用するボタン

1 **[5.Input Assign]を選んで決定する。**

入力に関する設定のメニュー画面になります。

2 **[Component Input]を選んで決定する。**

コンポーネントビデオ入力の設定になります。

3 **変更したい入力を選んで設定変更する。**

例えばCOMPONENT IN1 にDVDプレーヤーを接続したときは、Component-1で[DVD/LD]を選びます。（この場合、音声についてもDVD/LD音声入力を使用してください。）

4 **RETURNを押す。**

コンポーネントビデオ入力の設定を終了します。

システムセットアップを終了するときは、SYSTEM SETUPを押します。

メモ

- Component-1～2で、同じ入力を選択することはできません。同じ入力を選んだときは、先に設定されていた入力がOFFに切り換わります。
- コンポーネント端子の使用については、「映像機器の接続について」（→28ページ）をご覧ください。

i.LINK Input(i.LINK入力の設定)

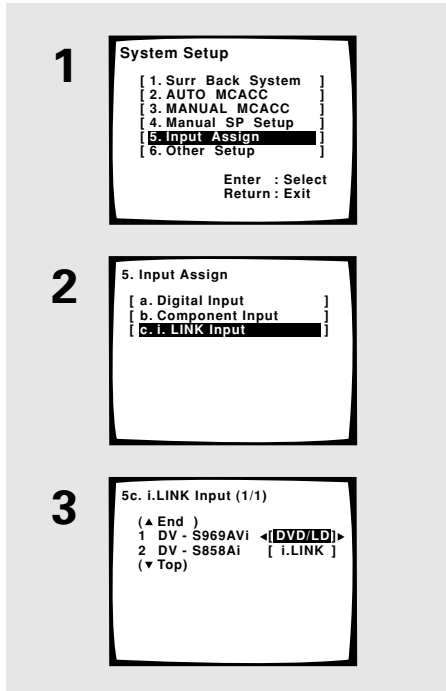
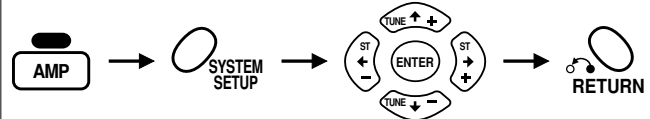
i.LINK端子に接続した機器を「DVD/LD」などの入力ファンクションに割り当てます。この設定を行うと、その機器の音声と映像を本体の入力ファンクション切換ボタンまたはリモコンのINPUTボタンで同時に切り換えることができます。i.LINK端子に接続された機器がない場合は、この設定を選択することができません。

1

2

3

メモ

- 多数のi.LINK機器が接続されているときは、機器の表示画面が2画面以上になります。

システムセットアップで使用するボタン

1 **[5.Input Assign]を選んで決定する。**

入力に関する設定のメニュー画面になります。

2 **[i.LINK Input]を選んで決定する。**

i.LINK入力の設定になります。

3 **設定したいi.LINK対応機器を選んで割り当てる入力ファンクションを選択する。**

- 機器からの映像出力を接続した入力ファンクションに割り当てると、音声と映像が同時に切り換えられます。
- [TUNER]は割り当てることができません。

4 **RETURNを押す。**

i.LINK入力の設定を終了します。

メモ

- 割り当てられていないi.LINK対応機器については、「i.LINK」と表示されます。
- i.LINK AUDIO以外のi.LINK対応機器に接続した場合は、「−−−」と表示され、入力ファンクションを割り当てることはできません。
- 割り当てたi.LINK対応機器のi.LINKケーブルを外したり、電源をオフした場合は、その機器の製品型番の前に「＊」が表示されます。
- 複数の機器で同じ入力ファンクションを選択することはできません。同じ入力ファンクションを選んだときは、元に設定されていた機器が「i.LINK」に切り換わります。

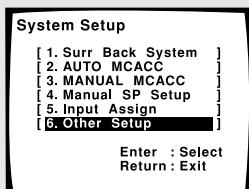
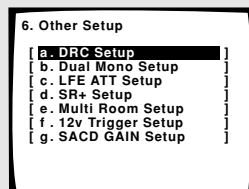
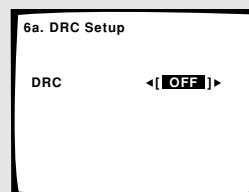
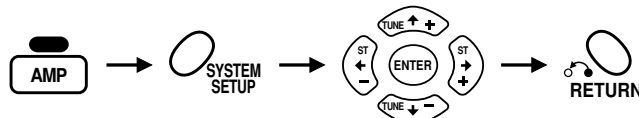
Other Setup(その他の設定)

DRC Setup (ダイナミックレンジコントロールの設定)

ダイナミックレンジとは再生能力を表す用語で、どのくらい小さい音から大きい音までを正しく(小さな音はノイズに埋もれずに、大きな音は歪まずに)再生できるかを数値(dB)で表したものです。ダイナミックレンジコントロールとは、このダイナミックレンジを圧縮する機能です。音量を下げて映画などを楽しむ場合でも、微小な音が聞き取りやすくなります。この効果が得られるのは、ダイナミックレンジコントロール対応のドルビーデジタルまたはDTSソフトだけですが、ほかのソフトでもミッドナイトリスニングモードで同様の効果が得られます。

1

2

3

システムセットアップで使用するボタン

1 [6.Other Setup]を選択して決定する。

2 [DRC Setup]を選択して決定する。

ダイナミックレンジコントロールの設定になります。

3 [OFF]、[MID]、[MAX]から選択する。

[OFF]:ダイナミックレンジを圧縮しません。
[MID]:ダイナミックレンジを多少圧縮します。
[MAX]:ダイナミックレンジを最大に圧縮します。

4 RETURNを押す。

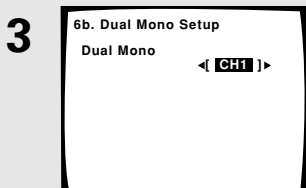
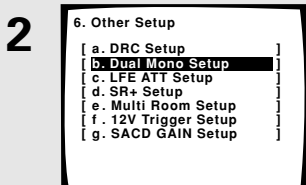
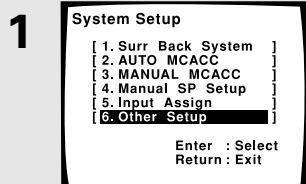
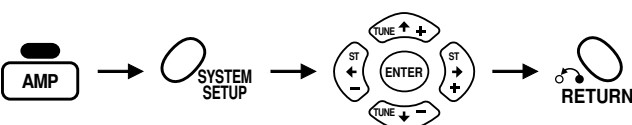
ダイナミックレンジコントロールの設定を終了します。
システムセットアップを終了するときは、SYSTEM SETUPを押します。

メモ

- 工場出荷時は「OFF」に設定されています。
- 大きい音量で楽しむときは、DRCをOFFにすることをお勧めします。

Dual Mono Setup(デュアルモノラル音声の設定)

モノラルの音声チャンネルを2つ持つデジタル信号のことを1+1デュアルモノラル信号といいます。ここではデュアルモノラル信号が入力されたときにどちらの音声を再生させるかを設定します。以下のような1+1デュアルモノラルフォーマットのソースにのみ有効です。

- BSデジタル放送(MPEG-2 AAC)のモノラルの二カ国語放送や音声多重放送など
- 二カ国語放送などをDVDレコーダーのドルビーデジタル・デュアルモノラルモードで録画したもの
  ステレオの二カ国語放送などはデュアルモノラルとは異なるフォーマットになります。
  録画モードの名称は機器によって異なります。詳しくはDVDレコーダーの取扱説明書をご覧ください。

システムセットアップで使用するボタン

1 [6.Other Setup]を選択して決定する。

2 [Dual Mono Setup]を選択して決定する。

デュアルモノラル音声の設定になります。

3 [CH1]、[CH2]、[CH1 CH2]から選択する。

[CH1]：チャンネル1の音声のみを再生する場合。
[CH2]：チャンネル2の音声のみを再生する場合。
[CH1 CH2]：チャンネル1、2の音声を左右のフロントスピーカーから振り分けて再生する場合。

4 RETURNを押す。

デュアルモノラル音声の設定を終了します。

メモ

- 工場出荷時は「CH1」に設定されています。
- 電源スタンバイ時に本体のTUNER EDITボタンを押しながら STANDBY/ONを押しても、デュアルモノラル音声の設定を変更できます。

LFE ATT Setup(LFE アッテネーターの設定)

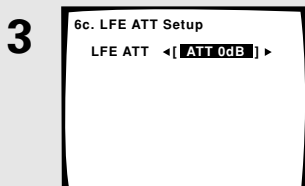
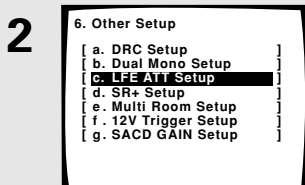
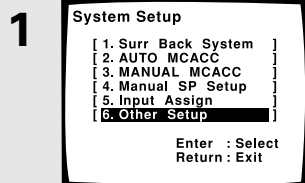
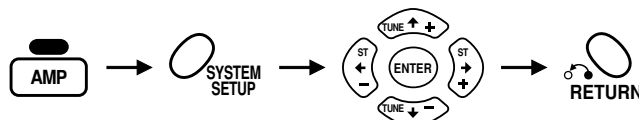
ドルビーデジタル信号やDTS信号に含まれるLFE成分(超低域信号成分)の信号レベルが大きすぎて、スピーカーから出る音に歪みが生じてしまう場合に、その信号レベルをアッテネート(減衰)する量を設定することができます。

1

2

6. Other Setup
[a. DRC Setup]
[b. Dual Mono Setup]
[c. LFE ATT Setup]
[d. SR+ Setup]
[e. Multi Room Setup]
[f . 12V Trigger Setup]
[g. SACD GAIN Setup]

3

6c. LFE ATT Setup
LFE ATT ◄[ATT 0dB]►

システムセットアップで使用するボタン

1 [6.Other Setup]を選択して決定する。

2 [LFE ATT Setup]を選択して決定する。

LFEアッテネーターの設定になります。

3 [ATT 0dB]、[ATT 10dB]、[LEE OFF]から選択する。

[ATT 0dB]：収録されているレベルのまま再生します。
[ATT 10dB]:レベルを10dBアッテネート(減衰)します。
[LEE OFF]：LFE成分の音が出なくなります。

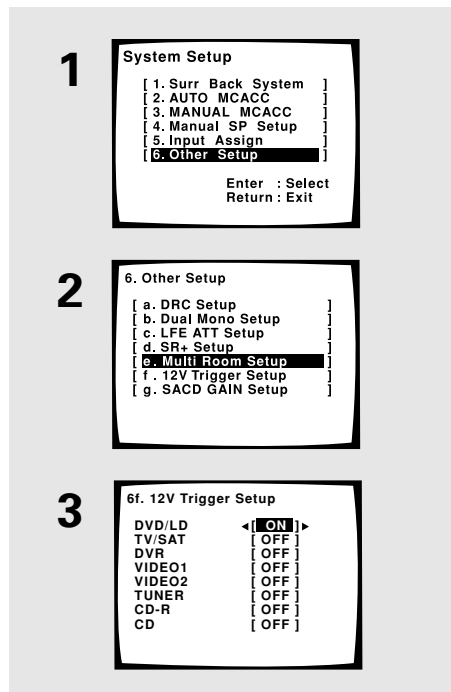
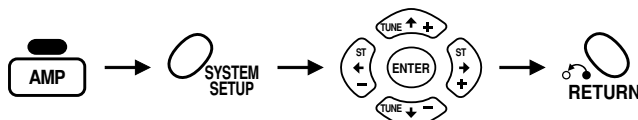
4 RETURNを押す。

LFEアッテネーターの設定を終了します。

メモ

- すべてのアッテネート(減衰)量で試し、最適な状態に設定することをお勧めします。
- 工場出荷時は[ATT 0dB]に設定されています。

12V Trigger Setup(12Vトリガー対応機器の連動設定)

設定した入力ファンクションが選ばれたときに、電源などの操作を連動させるための制御信号が12Vトリガー端子から出力されます。

システムセットアップで使用するボタン

1 [6.Other Setup]を選択して決定する。

2 [12V Trigger Setup]を選択して決定する。

3 [OFF]、[ON]から選択する。

[ON] ：連動する
[OFF]：連動しない

4 RETURNを押す。

12Vトリガー対応機器の連動設定を終了します。

SACD GAIN Setup(SACD ゲインの設定)

工場出荷時(「0dB」)は、高レベルで記録されているSACDディスクを再生しても音が歪まない設定になっています。「+6dB」に切り換えてデジタル処理に+6dBのゲインを持たせることにより、SACDディスクの情報をより忠実に引き出すことができるようになり、高音質再生が可能になります。

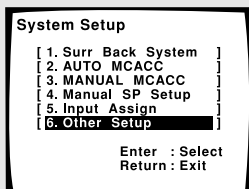
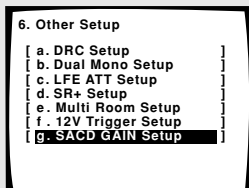
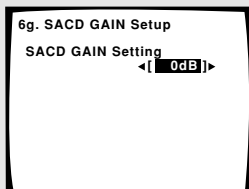
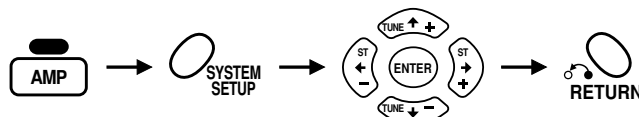
1

```
System Setup
  [ 1. Surr  Back  System  ]
  [ 2. AUTO  MCACC         ]
  [ 3. MANUAL  MCACC       ]
  [ 4. Manual  SP  Setup   ]
  [ 5. Input  Assign       ]
  [ 6. Other  Setup        ]

              Enter  : Select
              Return : Exit
```

2

```
6. Other Setup
 [ a. DRC Setup            ]
 [ b. Dual Mono Setup      ]
 [ c. LFE ATT Setup        ]
 [ d. SR+ Setup            ]
 [ e. Multi Room Setup     ]
 [ f . 12V Trigger Setup   ]
 [ g. SACD GAIN Setup      ]
```

3

```
6g. SACD GAIN Setup
 SACD GAIN Setting
                 ◄[  0dB ]►
```

システムセットアップで使用するボタン

1 [6.Other Setup]を選択して決定する。

2 [SACD GAIN Setup]を選択して決定する。

SACDゲインの設定になります。

3 [0dB]、[+6dB]、から選択する。

4 RETURNを押す。

SACDゲインの設定を終了します。

メモ

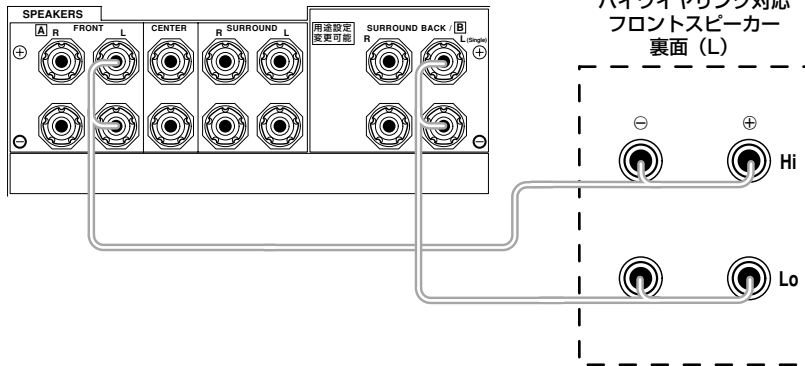
- ほとんどのSACDディスクは「+6dB」の設定で問題ありませんが、再生音声が歪むようなときは設定を「0dB」にしてください。

スピーカーの応用接続

リアパネルのSURROUND BACK端子は、サラウンドバックスピーカーを接続するだけでなく、フロントスピーカーの高音質化や、別エリアでのステレオ再生に使用できます。(ただし、メインシステムは最大5.1chまでとなります。)

フロントスピーカーのBi-Amp接続

フロントch用スピーカーがバイワイヤリング対応であれば、さらに高品位なBi-Amp再生が可能です。

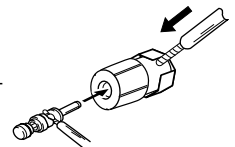
・接続

スピーカー端子Aのフロントchとスピーカー端子Bの出力は同じです。Hi/LoはA/Bのどちらとでも接続できます。

・サラウンドバックシステムの設定（→58ページ）
「Front Bi-Amp」を選択してください。
サラウンドバックchは自動的に「NO(無し)」に固定されます。

・スピーカーシステムA/Bの切り換え（→49ページ）
A+B（SP►AB）が通常再生状態となります。

フロントスピーカーのBi-Amp接続をするときはアンプへの悪影響を防ぐため、スピーカーに付属されているHi-Loのショート金具は必ず外してください。詳しくはスピーカーの取扱説明書もご覧ください。

Bi-wire（バイワイヤ接続の場合）

「Normal (SB)」または「Second Zone」でシステムを組む場合は、Bi-AmpではなくBi-wire接続が可能です。スピーカー端子Aに、バイワイヤリング対応スピーカーのHiとLoの2本を並列に接続してください。

1本はバナナプラグを用いると便利です

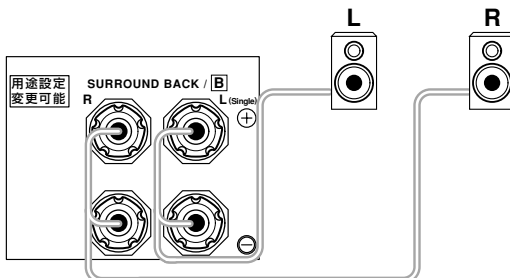
この方法で異なる2つのスピーカーを接続しないでください。

メモ

ネットワークが着脱できるスピーカーの場合、ネットワークが外れたままだと効果が得られませんのでご注意ください。

Second Zone(別エリアでのステレオ再生)接続

寝室やキッチンなど、メインのリスニングルームとは別の場所でステレオ再生が可能です。

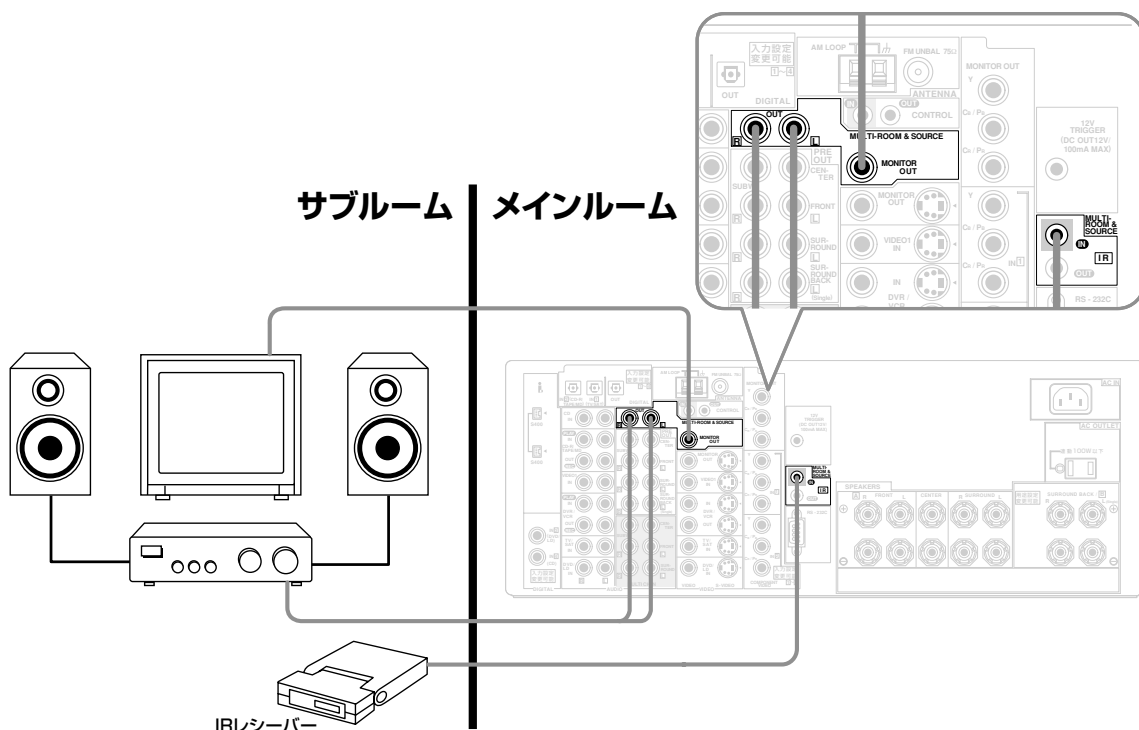
・接続

・サラウンドバックシステムの設定（→58ページ）
「Second Zone」を選択してください。
サラウンドバックchは自動的に「NO(無し)」に固定されます。

・スピーカーシステムA/Bの切り換え（→49ページ）
BまたはA＋Bを選択してください。

マルチルーム機能

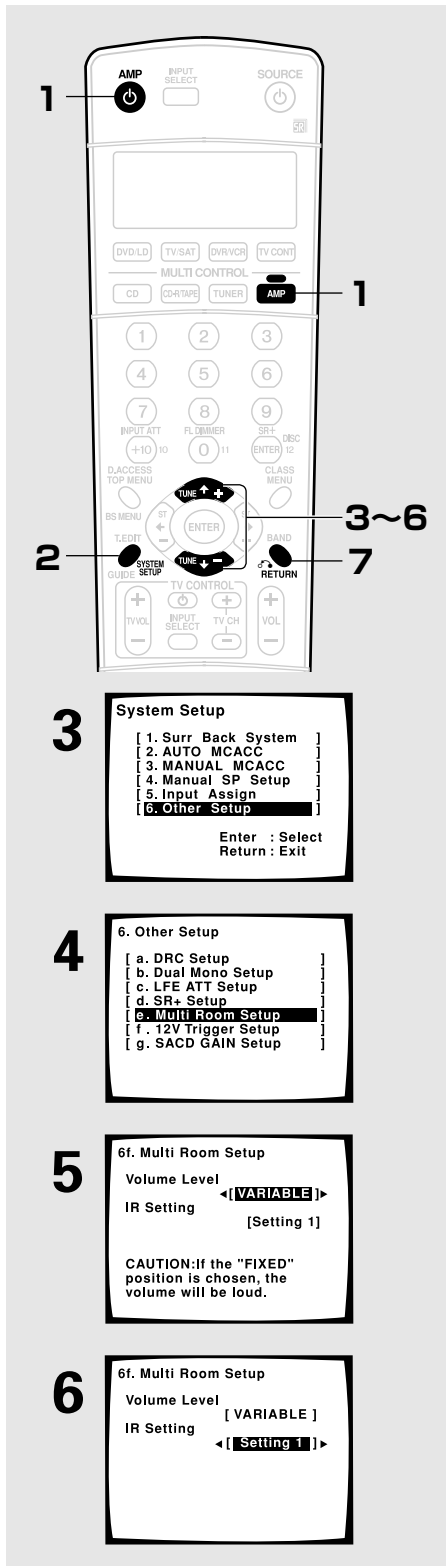
本機を操作して、本機のある部屋（メインルーム）とは別の部屋（サブルーム）で本機につないだ機器の再生を楽しめます（マルチルーム機能）。メインルームとサブルームで同時に同じソースを再生することはもちろん、別々のソースを再生することもできます。また、市販のIRレシーバーを接続すれば、サブルームに居ながら本機をリモコン操作できて便利です。

マルチルームの接続

接続には、リアパネルのMULTI ROOM&SOURCE端子を使用します。音声は、MULTI ROOM&SOURCEのOUT端子（L／R）とサブルームにあるアンプ機器の音声入力を接続します。映像については、MULTI ROOM&SOURCEのMONITOR OUT端子とサブルームにあるテレビなどのモニター機器の映像入力を接続します。IRレシーバーがあるときは、MULTI ROOM&SOURCEのIR IN端子に接続します。

メモ

- サブルームで再生できる音声はステレオ（アナログ）音声で、i.LINKやデジタルで入力された音声、MULTI CH INの音声は再生できません。また、リスニングモードやトーンコントロールなどの各種音声機能は使えません。
- サブルームの映像出力はビデオ（コンポジット）出力のみ対応しています。Sビデオ、コンポーネントは使用できません。
- IRレシーバーがあるときは、MULTI ROOM&SOURCEのIR IN端子にIRレシーバーを接続してさらにIR OUT端子に機器をつなぐと、その機器もIRレシーバーで操作することができます。

マルチルームの設定

本機のシステムセットアップでマルチルームの設定を行います。(Multi Room Setup)サブルームの音声出力設定とIRレシーバーの種類を選択します。

1 本機の電源を入れて、AMPボタンを押す。

リモコンがアンプ操作モードになります。
システムセットアップ画像を表示するためには、テレビの電源を入れて入力を切り換えてください。

2 SYSTEM SETUPを押す。

システムセットアップが表示されます。

3 ⬇⬆で[6.Other Setup]を選択して決定する。

4 ⬇⬆で [Multi Room Setup] を選択して決定する。

5 Volume Levelについて、適切な項目を選択する。

VARIABLE:本機で音量の調整をする場合(サブルームのアンプをパワーアンプとして音声出力する場合)に選択します。
FIXED:サブルームのアンプを使って音量の調整をする場合に選択します。(本機のサブルーム側の音量は最大になります。)

FIXEDを選んだ場合、本機の音量は最大で固定されます。大音量での出力を避けるため、必ずサブルームのアンプを使って適切な音量に調整してください。

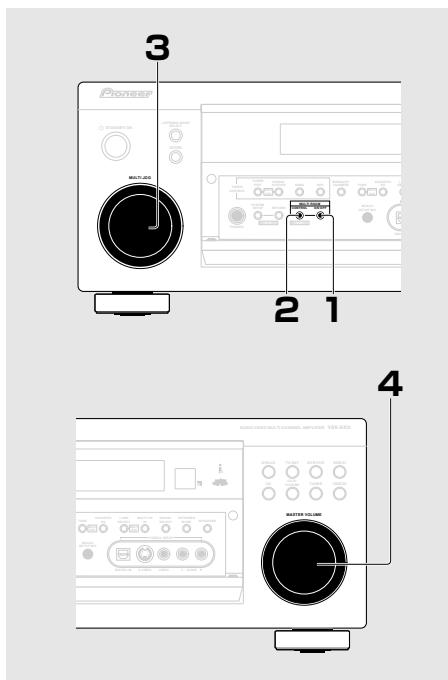
6 IR Receiverについて、接続するIRレシーバーに適切な項目を選択する。

[Setting 1]:通常はこちらを選択します。
[Setting 2]:Setting 1では動作しないときに選択します。

7 RETURNを押して終了する。

システムセットアップを終了する場合は、SYSTEM SETUPを押します。

本機でマルチルームの操作をする

フロントパネルの操作で、サブルームでの視聴を操作できます。

1 MULTI ROOM ON/OFFを押す。

表示部のMULTI-ROOMインジケーターが点灯します。

2 MULTI ROOM CONTROLを押す。

押すたびにメインルーム操作とサブルーム操作が切り換わり、サブルーム操作のときは表示部に「MR:」と表示されます。

メモ

10秒間操作がないと自動的にマルチルームが終了します。

3 MULTI JOGダイヤルで入力ファンクションを切り換える。

4 MASTER VOLUMEダイヤルで音量を調整する。

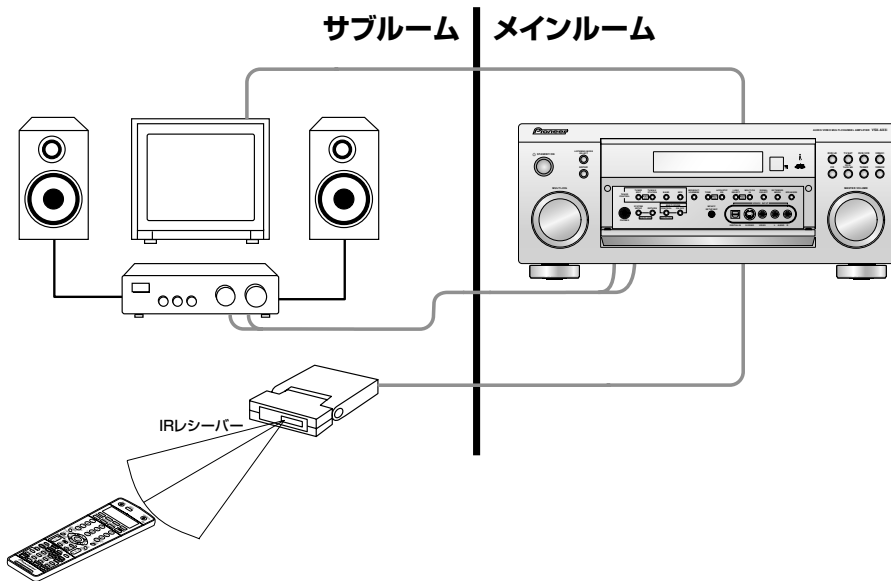
－80dBから0dBの範囲で調整できます。

5 選んだ機器の再生をする。

メモ

- マルチルーム機能では、電源の入／切もメインルームとサブルームで別になります。
- マルチルームの設定で [FIXED] が選ばれているとき、本機では音量を調整できません。
- スリープ機能が働くとメインルームとサブルームの両方の電源がスタンバイになります。
- システムセットアップ中は、マルチルーム操作はできません。
- チューナー操作について、メインルームとサブルームでは同時に1つの放送局しか選べません。

IRレシーバーを使ってのマルチルームの操作

本機のリモコンで、サブルームでの視聴を操作できます。

以下1～3の手順についてSHIFTボタンを押しながら操作します。

1 （リモコンをIRレシーバーの受光部へ向けて）アンプの電源を入れる。

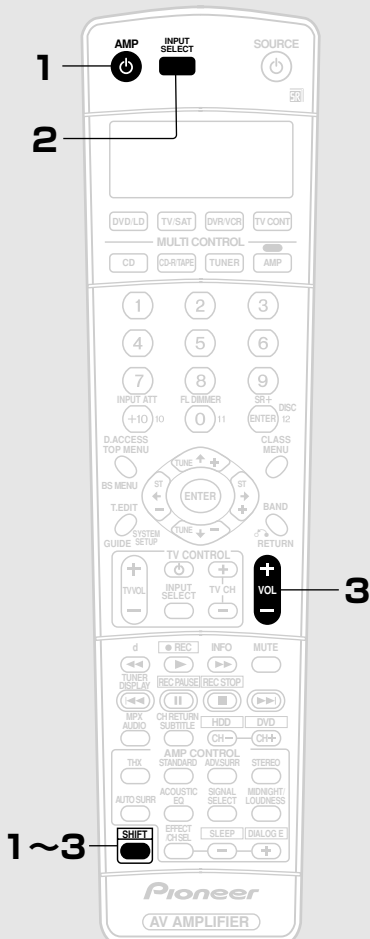
メインルームにある本機の表示部のMULTI-ROOMインジケーターが点灯します。

2 入力ファンクションを切り換える。

INPUT SELECTボタンで機器を選びます。

3 VOL＋/－で音量を調整する。

メモ

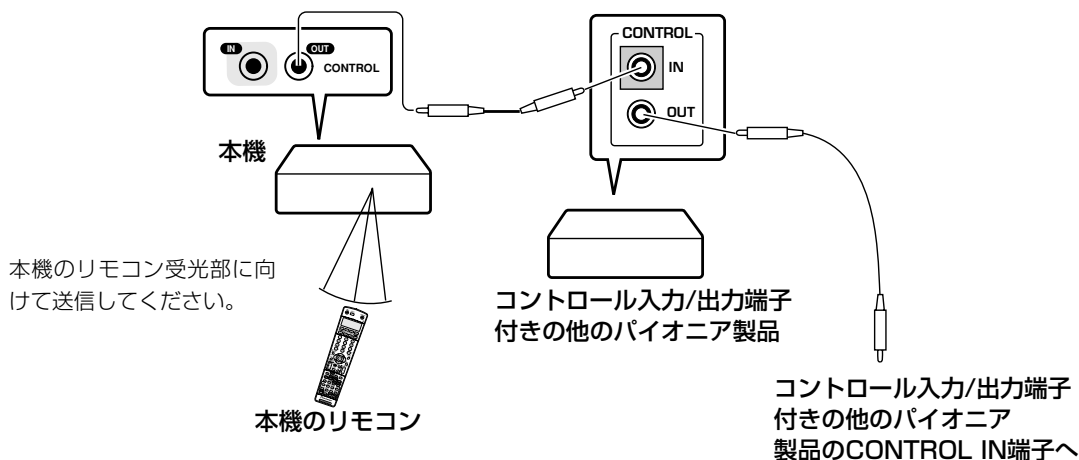
- 本機のリモコンで操作できるボタンは以下になります。
  AMP　:本機の電源切り換え
  INPUT SELECT　:入力ファンクションの選択
  VOL+/－　:音量調整（ただし、システムセットアップの「Multi Room Setup」で[FIXED] が選ばれているときは調整できません。）
  CLASS　:チューナー操作時のクラス選択
  ST←/→　:チューナー操作時の放送局選択
  数字ボタン
- パイオニア製アンプをサブルームで使用している場合、本機のリモコン操作で同時に同アンプが動作してしまいます。IRレシーバーでのマルチルーム操作をするときは、アンプのリモコン受光部を覆い隠すなどの対策をとってください。

プリアウトを使ったパワーアンプの接続

「サラウンドバックシステムの設定」(→58ページ)と連動して、プリアウト端子のサラウンドバックchから出力される音声が以下のように変わります。他のパワーアンプなどを接続する場合はご注意ください。
[Normal(SB)]のとき:サラウンドバックchの音声
[Second Zone]のとき:ダウンミックスされた2chの音声
[Front Bi-Amp]のとき:フロントchと同じ音声

メモ

この接続を行った場合、個々のアンプの能力やボリューム位置などにより音場補正を正確に行うことができない場合があります。

他のパイオニア機器の操作

コントロール入力/出力端子の付いた複数のパイオニア機器を、本機のリモコン受光部を使って集中コントロールすることができます。リモコン受光部を持たない機器や、受光部が信号を受けられないところに設置した機器もリモコン操作が可能になります。

メモ

- 本機のCONTROL IN端子にコントロールコードを接続すると、リモコンを本機に向けて直接操作することはできません(リモコン信号受光部が機能しなくなります)。
- 接続には市販のモノラルミニプラグ付きコード(抵抗なし)をお使いください。
- コントロール端子の接続をする場合は、必ずオーディオコードまたは映像ケーブルの接続もしてください。デジタル接続だけでは、システムコントロールは正しく動作しません。

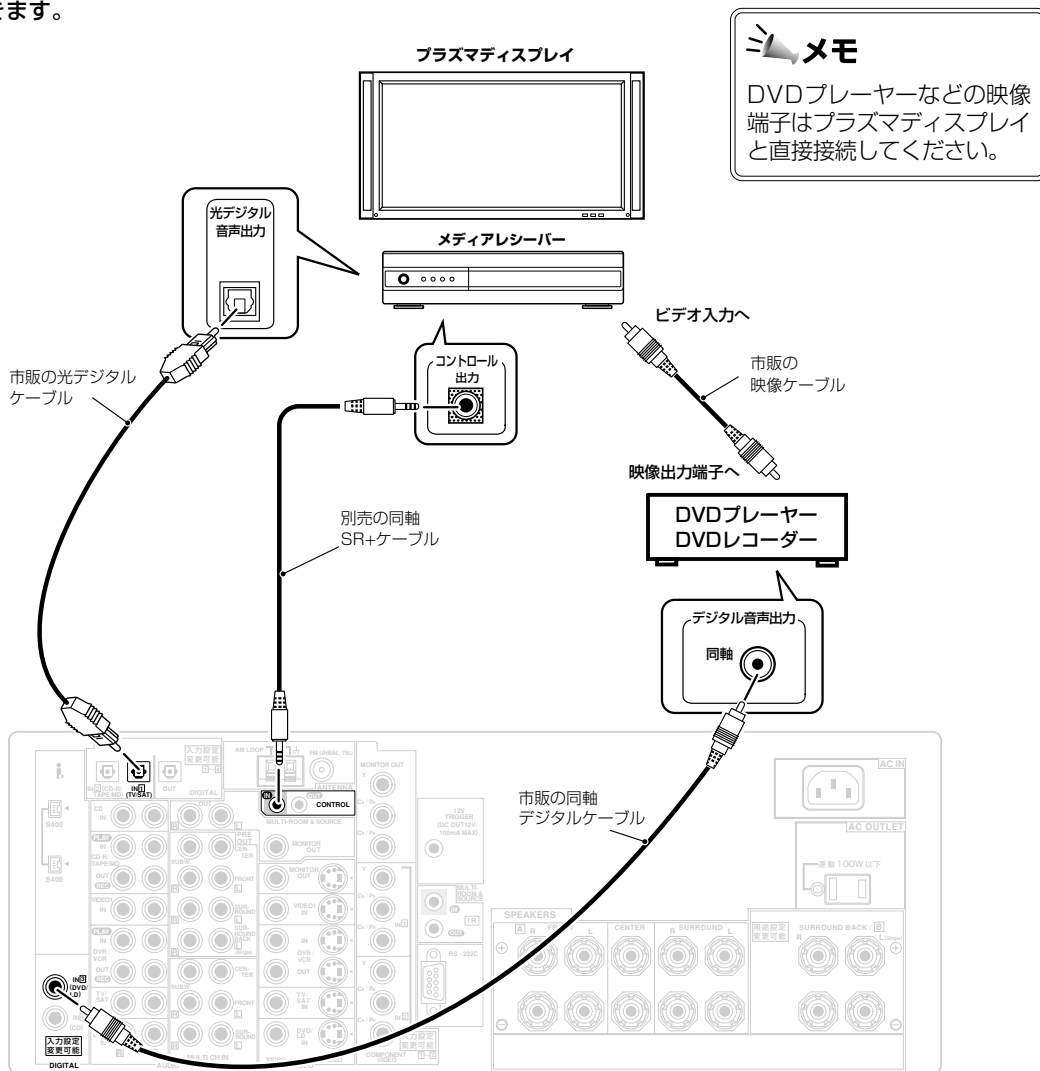
パイオニアのプラズマディスプレイとの連動操作

SR+に対応したプラズマディスプレイ(2003年以降に発売されたモデル)を、SR+ケーブルで接続することでシステム動作を実現します。プラズマディスプレイの画面を見ながら本機のシステムセットアップをしたり、音量やリスニングモードの確認ができます。また、本機とプラズマディスプレイの入力を連動させて切り換えることができます。本機とプラズマディスプレイをシステム動作させるには、下記の接続および設定が必要となります。

プラズマディスプレイとの接続

このシステム動作を実現するためには専用のSR+ケーブル(パイオニア部品番号：ADE7095)が必要となります。詳しくはパイオニア部品受注センターへご連絡ください。市販の4極ミニジャック(両端とも)付コードでも使用できます。

メモ

DVDプレーヤーなどの映像端子はプラズマディスプレイと直接接続してください。

メモ

本機にSR+ケーブルを接続すると、本機のリモコン受光部はリモコン信号を受け付けなくなりますので、リモコンはプラズマディスプレイに向けて操作してください。プラズマディスプレイの電源が切れているときはリモコンで本機の操作ができません。

SR+ Setup（連動モードの設定）

本機とプラズマディスプレイの連動について、以下の3点の設定を行います。

PDP Volume Control：音量連動モードの設定

連動モードを実行したとき(→87ページ)にプラズマディスプレイの音量を下げるかどうか設定します。
「ON」に設定すると連動モードを実行したとき瞬時にプラズマディスプレイの音から本機の音に切り換えることができます。

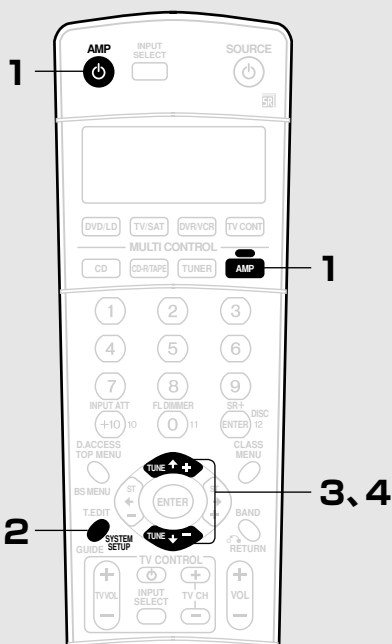
PDP Input Select：入力連動モードの設定

本機の音声とプラズマディスプレイの映像の入力を自動で選択させるための設定です。本機の音声入力(DVD/LD、TV/SAT、DVR/VCR、VIDEO1、VIDEO2)とプラズマディスプレイの映像入力(ビデオ1、2、3など)をこの設定で合わせると、本機の入力を切り換えたときに、プラズマディスプレイの映像入力も自動で切り換わります（連動切換）。

Monitor Out Connect：システムセットアップ表示連動の設定

本機のシステムセットアップを表示するために、接続したプラズマディスプレイの入力を設定します。システムセットアップを開始したときに自動的にプラズマディスプレイの入力も切り換わり、また、本機のシステム表示とプラズマディスプレイのSR+表示が重ならないように連動させます。

メモ

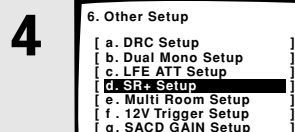
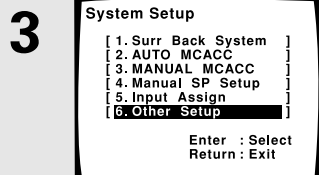
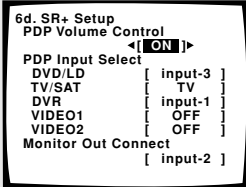
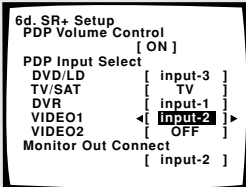
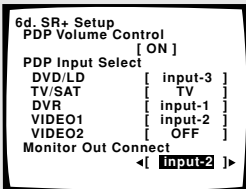
- 本機とプラズマディスプレイをSR＋ケーブルで接続して、本機とプラズマディスプレイの電源を入れてください。

1　本機の電源を入れて、AMPボタンを押す。

リモコンがアンプ操作モードになります。
システムセットアップ画面を表示するためには、テレビの電源を入れて入力を切り換えてください。

2　SYSTEM SETUPを押す。

システムセットアップが表示されます。

3　⬇⬆で[6.Other Setup]を選択して決定する。

4　⬇⬆で [SR+ Setup] を選択して決定する。

5 PDP Volume Contorolについて、音声連動を選択する。

[ON]：連動モードを実行するとプラズマディスプレイの音量を消音します。
[OFF]：音声連動しません。

6 PDP Input Selectについて、本機の音声入力とプラズマディスプレイの映像入力の連動を設定する。

例えば、ビデオデッキの音声を本機のVIDEO1端子に、映像をプラズマディスプレイのビデオ入力2端子に接続したときは、「VIDEO1」を「input-2」に設定します。
工場出荷時の本機の入力とプラズマディスプレイの入力は以下のように対応しています。

本機の入力	PDPの入力
DVD/LD	ビデオ入力 3
TV/SAT	TVチューナー
DVR/VCR	ビデオ入力 1
VIDEO1	OFF
VIDEO2	OFF

プラズマディスプレイ(PDP)のBSデジタル放送を選ぶときは、本機の入力をTV/SATに切り換えてからPDPの入力を切り換えてください。

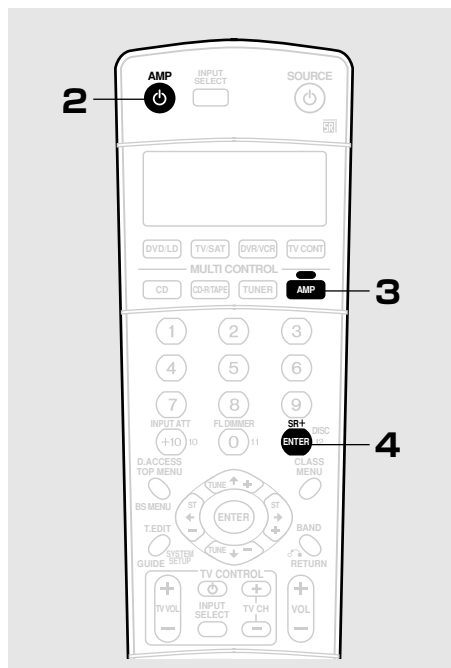
7 Monitor Out Connectについて、本機のMONITOR OUT出力からプラズマディスプレイのどの入力へ接続したのかを選択する。

「input-1」～「input-5」、「OFF」から選びます。システムセットアップ時にここで設定した入力にプラズマディスプレイの入力が切り換わります。
工場出荷時は「input-2」に設定されています。

8 RETURNを押す。

連動モードの設定を終了します。
システムセットアップを終了するには、SYSTEM SETUPを押します。

連動モードの実行

本機とプラズマディスプレイがSR+ケーブルで接続されていることを確認してください。

1 プラズマディスプレイの電源を入れる。

2

本機の電源を入れる。

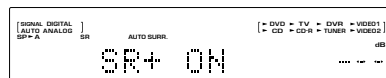
3 AMP

AMPボタンを押してリモコンをアンプ操作モードにする。

4 SR+ ENTER

連動モードをONにする。

表示部に以下のように表示されます。

SR+ ON

連動モードを解除したいときは再度SR+ボタンを押します。

5 システム動作を確認する。

以下の操作を行うと本機とプラズマディスプレイが連動して動作します。

- 本機の入力を切り換えるとプラズマディスプレイの入力が切り換わります。
- 本機の音量を調整するとプラズマディスプレイの画面に音量値が5秒間表示されます。
- その他、本機の各種操作内容および設定状況を表示します。

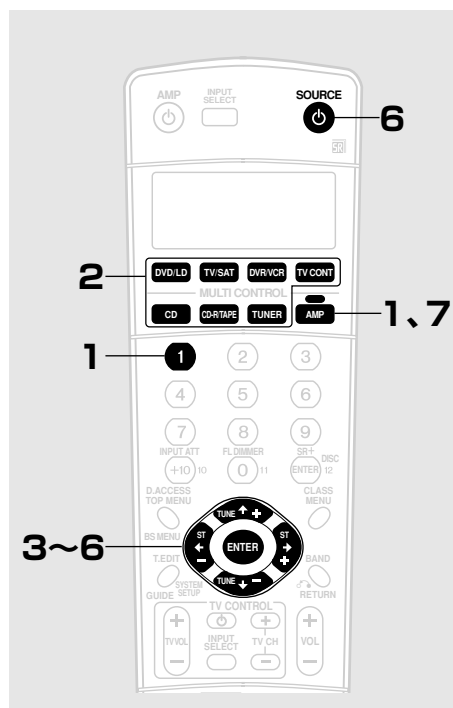
メモ

- プラズマディスプレイの電源がOFFのとき、または正しく接続されていないときは連動モードは働きません。
- 入力連動モードを設定していない入力のときは、プラズマディスプレイの画面は切り換わりません。
- プラズマディスプレイと本機に表示される音量値は異なります。また、プラズマディスプレイの画面に表示される音量値は目安です。
- SR+ケーブルを接続した状態でプラズマディスプレイの電源が切れているときはリモコンで本機の操作ができません。

他機器を操作するためのリモコン設定

付属のリモコンを使って、本機以外のパイオニア製品や他社の機器（ビデオデッキ、テレビ、DVD、CDプレーヤーなど）を操作することができます。お手持ちの機器のプリセットコードがリモコンに登録されている場合は、該当するコードを呼び出すだけで操作できるようになります。また、プリセットコード非対応の機器でも、その機器に付属のリモコンから直接登録（学習）することが可能です。

他機器のリモコン信号を本機のリモコンに呼び出す（プリセットコード設定）

本機付属のリモコンには、複数のAV機器(他社製品を含む)のリモコンコードが登録されています。登録する機器のブランド名から検索することが可能です。各ボタンの役割は「他機器のリモコン操作一覧表」(→92ページ)をご覧ください。

1 AMPボタンを押しながら数字ボタンの1を押す。

リモコンに「SETUP」が表示されます。
プリセットコード設定を中止するにはAMPボタンをもう一度押します。

2 操作したい機器のマルチコントロールボタンを選ぶ。

3 「PRESET」を選んで決定する。

4 登録する機器のブランド名の頭文字を選んで決定する。

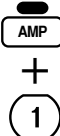
例えば、パイオニアを登録するときは、「P」を選択します。

5 登録する機器のブランド名を選んで決定する。

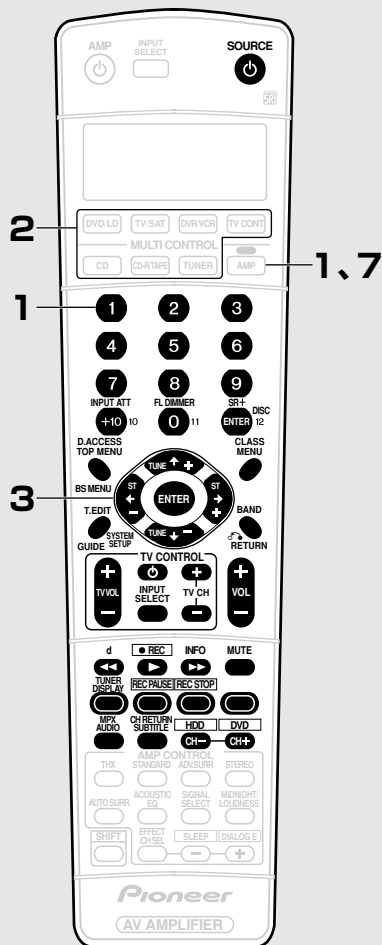
6 登録する機器とコード番号を選んで決定する。

例えば、DVDプレーヤーの場合は「DVD」、コード番号が複数あるときはそれぞれのコード番号で試してみてください。
SOURCE⏻ボタンを押して、その機器の電源を入／切できれば正しいものが選ばれたことになります。
「OK」が表示されて、登録が終了します。

7 プリセットコード設定を終了する。

メモ

- STANDBY/ONモードがない機器では、正しく設定できていても電源は切り換わりませんので、実際に操作できるか確認してください。
- マルチコントロールの「TUNER」に他機器のプリセットをした場合、リモコンで本機のチューナーを操作できなくなります。操作できるようにするには、パイオニアのチューナーを選んでプリセットコードを再設定してください。
- 登録後に、そのプリセットコードを確認できます。上記の1～3の手順で「READ ID」を選んで決定すると、登録されているブランド名とプリセットコードが約3秒間表示されます。

他機器のリモコン操作を本機のリモコンに登録する（学習モード）

他機器のリモコンの操作を本機のリモコンに直接学習させることができます。プリセットコードを登録しただけでは使用できない操作などは、以下の手順で追加登録（学習）してください。

上記イラストの反転表示されているボタンに登録（学習）が可能です。
ただし、「TV CONTROL」ボタンは、マルチコントロールの「TV CONT」を選んだ場合のみ登録（学習）できます。

1 AMP ＋ 1

AMPボタンを押しながら数字ボタンの1を押す。

「SETUP」が表示されます。

2 DVD/LD TV/SAT DVR/VCR TV CONT MULTI CONTROL CD CD-R/TAPE TUNER

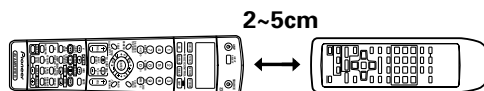
操作したい機器のマルチコントロールボタンを選ぶ。

3 ST ← − ENTER ST → ＋

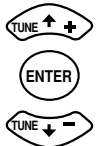
「LEARN」を選んで決定する。

「PRES KEY」が表示されます。

4 **本機と他機器のリモコンを向かい合わせて、記憶させたい本機のボタンを押す。**

2~5cm

「PRES KEY」が点滅します。

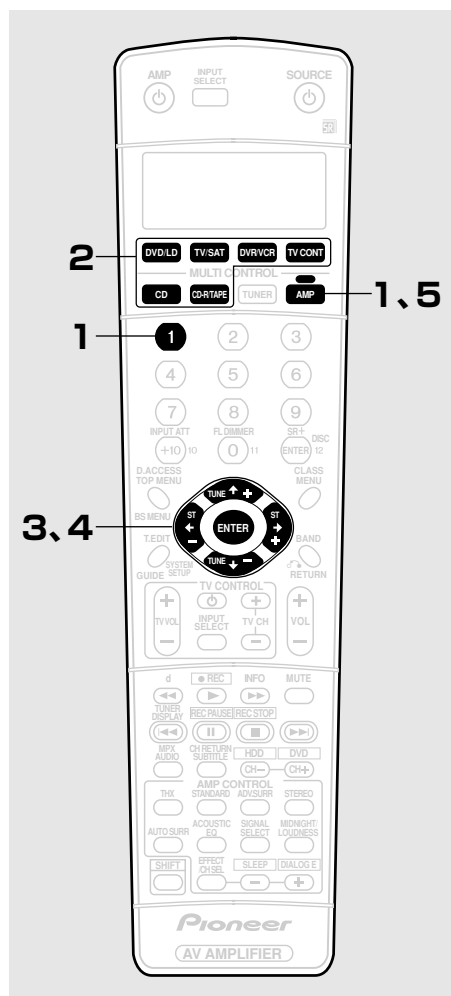
5 **記憶させたい他機器のボタンを、数秒押して離す。**

「OK」が表示されて、登録（学習）が終了します。
「ERROR」が表示された場合は、手順4からやり直してみてください。

6 **同じ他機器リモコンについて登録（学習）を続けるには、手順4〜5を繰り返す。**

別の他機器リモコンを登録するには、いったん終了してからもう一度行ってください。

7 AMP **学習モードを終了する。**

ダイレクトファンクションモードを設定する

ダイレクトファンクションはMULTI CONTROLボタンを押したときに、本機の入力ファンクションを連動して切り換えるかを設定する機能です。オフにすると入力ファンクションは切り換わらず、リモコンの操作ボタンの機能だけが切り換わります。工場出荷時はすべてオンになっています。

1 AMPボタンを押しながら数字ボタンの1を押す。

「SETUP」が表示されます。
ダイレクトファンクションモードの設定を中止するにはAMPボタンをもう一度押します。

2 操作したい機器のマルチコントロールボタンを選ぶ。

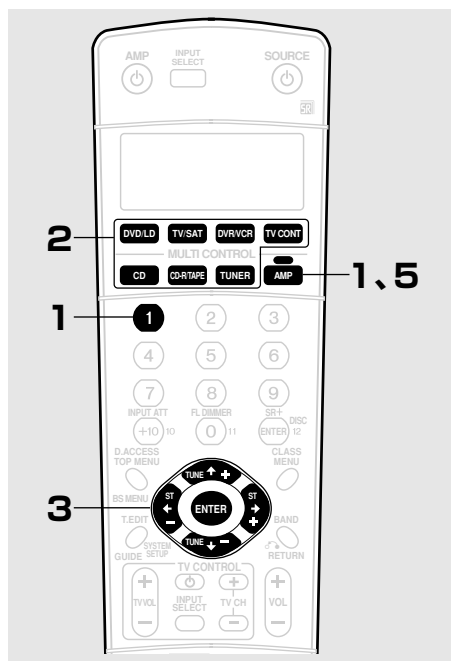
3 「DIRECT F」を選んで決定する。

4 手順2で選んだ機器について、ダイレクトファンクションのON、OFFを選んで決定する。

「OK」が表示されます。

5 ダイレクトファンクションの設定を終了する。

リモコンの登録操作の解除と設定全解除

特定のボタンに登録された操作のみを解除する

1 AMP ＋ 1

AMPボタンを押しながら数字ボタンの1を押す。

「SETUP」が表示されます。
ダイレクトファンクションモードの設定を中止するにはAMPボタンをもう一度押します。

2 DVD/LD TV/SAT DVR/VCR TV CONT MULTI CONTROL CD CD-R/TAPE TUNER

解除したい機器のマルチコントロールを選ぶ。

3 ST ENTER ST

「ERASE」を選んで決定する。

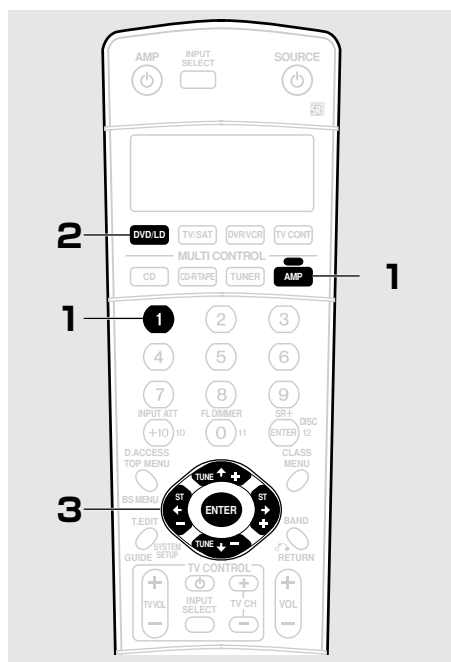
「PRES KEY」が点滅します。

4 **消去をしたい操作のボタンを2秒間押し続ける。**

「OK」が表示されて、消去が終了します。

5 AMP

登録解除を終了する。

リモコンに設定されたすべての機能を解除する（リモコンを工場出荷状態に戻す）

1 AMP ＋ 1

AMPボタンを押しながら数字ボタンの1を押す。

「SETUP」が表示されます。
ダイレクトファンクションモードの設定を中止するにはAMPボタンをもう一度押します。

2 DVD/LD

DVD/LDボタンを押す。

3

「RESET」を選んで ENTER ボタンを2秒間以上押し続ける。

「OK」が表示されて、全消去が終了します。

他機器のリモコン操作一覧表

- 以下のリモコン操作を行うには、あらかじめ操作したい機器のリモコンコードを登録しておく必要があります。詳しくは「他機器を操作するためのリモコン設定」(→88ページ)をご覧ください。
- 実際に操作を始める前に操作したい機器の他機器操作ボタンを押して、リモコンをその機器の操作モードにしてください。各機器の詳しい機能については、それぞれの取扱説明書をお読みください。
- 機種によっては操作できないボタンもあります。

<table>
<tr><th>機能
ボタン</th><th>DVDプレーヤー
LDプレーヤー</th><th>DVDレコーダー</th><th>ビデオデッキ</th><th>CDプレーヤー
CDVプレーヤー
MDレコーダー
カセットデッキ</th><th>テレビ
CATV
BS/CSデジタルチューナー
地上デジタルチューナー</th></tr>
<tr><td>SOURCE⏻</td><td colspan="5">電源の入／切(スタンバイ)</td></tr>
<tr><td>⏮</td><td>前チャプター
(トラック)頭出し</td><td colspan="2">チャンネル戻る</td><td>前チャプター
(トラック)頭出し</td><td>青</td></tr>
<tr><td>⏭</td><td>次チャプター
(トラック)頭出し</td><td colspan="2">チャンネル進む</td><td>次チャプター
(トラック)頭出し</td><td>黄</td></tr>
<tr><td>⏸</td><td colspan="4">一時停止</td><td>赤</td></tr>
<tr><td>▶</td><td colspan="4">再生</td><td></td></tr>
<tr><td>▶▶</td><td colspan="4">早送り</td><td></td></tr>
<tr><td>◀◀</td><td colspan="4">早戻し</td><td></td></tr>
<tr><td>■</td><td colspan="4">停止</td><td>緑</td></tr>
<tr><td>● REC
(SHIFT+▶)</td><td></td><td colspan="3">録画／録音の開始</td><td></td></tr>
<tr><td>REC STOP
(SHIFT+■)</td><td></td><td colspan="3">録画／録音の停止</td><td></td></tr>
<tr><td>数字ボタン</td><td colspan="2">メニュー画面の操作</td><td colspan="2">チャプター(トラック)の選択</td><td>チャンネルの選択</td></tr>
<tr><td>+10ボタン</td><td colspan="4">チャプター(トラック)の選択(10以上の数値入力用)</td><td>チャンネルの選択
(2桁以上の
数値入力用)</td></tr>
<tr><td>ENTER/
DISC</td><td>[DVDプレーヤー]
CLEARボタン
として使用
[LDプレーヤー]
A/B面の切り換え</td><td>セットアップ画面
(DISC NAVI)の
表示</td><td>ENTERボタンと
して使用</td><td>[CDチェンジャー]
ディスクの選択</td><td>チャンネル入力に使用</td></tr>
<tr><td>TOP MENU</td><td colspan="2">トップメニューの表示</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>MENU</td><td colspan="2">ディスクのメニュー画面の表示</td><td></td><td></td><td>メニュー画面の選択</td></tr>
<tr><td>⇦⇨⇧⇩ +
ENTER</td><td colspan="5">各メニュー画面の操作</td></tr>
<tr><td>GUIDE</td><td colspan="2">セットアップ画面の表示</td><td></td><td></td><td>番組表の表示</td></tr>
<tr><td>CH +/-</td><td colspan="3">チャンネルの選択</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>AUDIO</td><td colspan="3">音声(言語)の選択</td><td></td><td>音声の選択</td></tr>
<tr><td>SUBTITLE</td><td colspan="2">字幕(言語)の選択</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>HDD
(SHIFT +
CH-)</td><td></td><td>[HDD内蔵
DVDプレーヤー]
HDD操作の選択</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>DVD
(SHIFT +
CH+)</td><td></td><td>[HDD内蔵
DVDプレーヤー]
DVD操作の選択</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>CH RETURN</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>一つ前に選択していた
チャンネルに戻る</td></tr>
<tr><td>RETURN</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>RETURNまたは
EXITの選択</td></tr>
</table>

* DVDプレーヤーによっては10以上を選ぶとき+10方式ではなく、ENTER方式で番号を決める機種がありますが、その機種も本機リモコンでは+10ボタンで操作することができます。

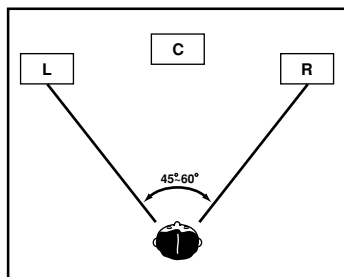
スピーカーの配置について

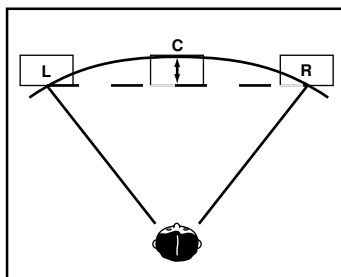
スピーカーの配置はマルチチャンネルサラウンド再生において重要な役割を果たします。
一般家庭における各スピーカーの配置の例は以下のとおりです。以下の図を参考にしながらリスニングルームに合わせたスピーカーの配置をお試しください。

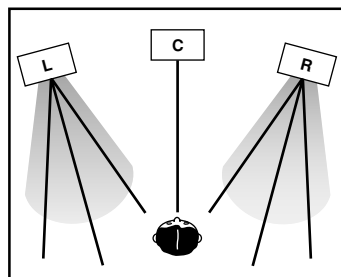
メモ

スピーカーを床に直接設置すると、建物に直接振動が伝わり音質が変わってしまったりします。また、柔らかすぎる棚の上なども音質に影響がありますので、専用スタンドやコンクリートブロックなどの使用をお勧めします。

フロント & センター

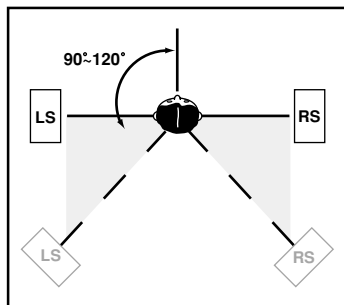
リスニングポイントからの角度

センター(C)を使用する場合は広めに、センター(C)を使用しない場合は狭く配置することをお勧めします。(上図の範囲)

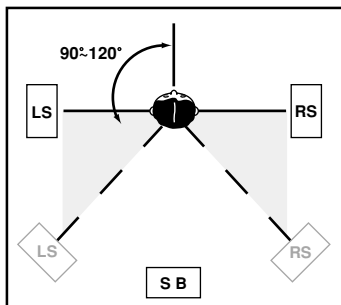
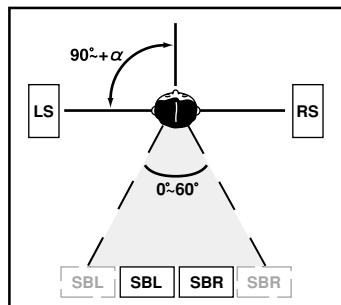
奥行き

センター(C)はフロント(L/R)と同一面からフロントまでの距離を超えない位置に。フロントよりも前方だと音場感を損ねます。

スピーカーの向き

中抜け感を防ぐために多少内振りに。ただし、あまり内振りにしすぎると広がり感などを損ねます。

サラウンド & サラウンドバック

サラウンドバック無しの場合

サラウンドバック1本の場合

サラウンドバック2本の場合

サラウンドスピーカー(LS/RS)は耳の位置より上方60cm～1mでやや下振りにします。DVDオーディオ用の配置と両立したいときは後方寄りに配置します。LSとRSが真正面で向き合わないように多少左右に振ったりしてみてください。

サラウンドバックスピーカー(SB/SBL/SBR)も耳の位置より上方60cm～1mでやや下振りにします。サラウンドバック2本の場合はSBLとSBRを隣接させリスニングポジションから等距離に設置(設定)するとTHXモードの効果が最大限発揮されます。

サブウーファー

特に制限はありませんが、他のスピーカーの低音出力との打ち消し合いが起こらないような場所に配置してください。また、壁の近くに設置すると建物との共振により低音が極端に増強される場合がありますのでご注意ください。

サウンドフォーマットについて（用語解説）

DVDソフトのパッケージのほとんどに以下のような表示がされています。
1枚のディスクに複数の音声が収録されている場合が多く、どの音声を聴くのか選択することができます。

1. 英　語　（5.1ch サラウンド）
2. 日本語（ドルビーサラウンド）
3. 英　語　（DTS 5.1ch サラウンド）

DOLBY DIGITAL

DIGITAL dts SURROUND

収録音声数　　録音方式　　音声記録方式

ドルビーデジタルはDVDの標準音声フォーマットであるため、単に「5.1chサラウンド」と記載されている場合は、「ドルビーデジタル（5.1ch）」であることを示します。

音声記録方式について

デジタル音声のフォーマットは、下記の「デジタル記録方式」と「収録チャンネル」の組み合わせにより細分化されています。

デジタル記録方式

非圧縮デジタル方式
PCM（Pulse Code Modulation）方式が一般的で、CDやDVDの2chトラックなどに用いられています。サンプリング周波数やビット数の数字が大きいほど高音質となり、通常のCDは44kHz/16bitですが、DVD は48kHz/20bitや96kHz/24bitなどで記録されています。DVDオーディオは、この高音質を保ったままマルチch収録が可能で、192kHzの2ch信号も収録できます。SACDも非圧縮マルチch記録ですが、PCMとは違う高速⊿Σ変調1ビット方式を採用しています。DVDオーディオやSACDのデジタル伝送にはi.LINK接続が必要となります。

圧縮デジタル方式
ドルビーデジタルやDTS、MPEG-2 AAC などはすべて圧縮デジタル方式です。各フォーマットとも聴感心理学などを用いて、音質変化を感じさせない独自の圧縮方式を開発し、従来のデジタルケーブル(同軸または光ファイバー)でのマルチch伝送を可能にしています。

収録チャンネル

2ch ステレオ信号
左右の２つのチャンネルに別々の音が記録されている信号で、通常の音楽用CD などはほとんどがこのタイプです。

2ch サラウンド信号（ドルビーサラウンド信号）
フロント左/ 右、センター、サラウンドの4ch信号を所定の演算で2chに変換してある信号です。そのまま2chで再生しても違和感なく楽しめますが、所望のデコード処理（ドルビープロロジックサラウンド再生など）により、製作者の意図通りの再生となります。

マルチch サラウンド信号
3ch以上の独立した信号が収録されたものをマルチch信号と呼びますが、5.1ch収録が最も一般的です。フロント左/右、センター、サラウンド左/右の5chと、LFEと呼ばれる超低音域専用の0.1chに独立した信号が記録されています。近年では6.1ch信号も登場し、上記の5.1chに加えサラウンドバックch信号が収録されています。

再生方式について

マルチチャンネルサラウンド再生

3本以上のスピーカー（サブウーファーを除く）で多チャンネル再生することを指します。音場の立体感や移動感が増し、迫力ある臨場感が期待できます。音源となるソフトがマルチch収録ならばソフトに忠実に再生し、ソフトが2ｃｈの場合は、マトリックスデコード処理（ドルビープロロジックⅡxやNeo:6技術など）を施し、マルチch再生させることが可能です。

(2ch)ステレオ再生

2ch信号をそのまま再生する場合と、マルチchソースを2ｃｈにダウンミックスして再生する場合の双方を意味します。設定やソースにより、サブウーファ－から音が出る2.1ch再生も「ステレオ再生」と呼ぶことがあります。

デコードとは
デジタル信号処理回路などにより、圧縮記録されたデジタル信号を、もとの信号に変換させる技術です。また、２ｃｈの音源をマルチｃｈ化させる演算技術をマトリックス・デコードと言い、5.1ch信号を6.1chに伸長させる技術もデコードと呼ぶことがあります。

ドルビー

DOLBY DIGITAL・EX PRO LOGIC IIx

ドルビーデジタル

ドルビーデジタルは、ドルビーのマルチチャンネル音声システムのディスクリート・デジタルサラウンド方式の名称です。映画業界の主流であり、DVDビデオの標準音声方式としても採用されるなど、デジタル時代の標準フォーマットとなっています。独立した各チャンネルに記録された自然で高度な立体音像と、低域専用chにより、臨場感あふれるマルチchサラウンドを再現します。人間の聴覚特性を応用した圧縮技術により聴覚上の音質低下を招きません。この信号を伝送するには、デジタル接続が必要です。その他にも以下のような機能を持つ柔軟性の高いフォーマットです。

1） モノ、ステレオ、プロロジック対応の構成および5.1ch音声の再生に最適なダウンミキシング
2） 広範囲のビットレートにわたる動作
3） ダイナミックレンジ情報を伝達する機能
4） ダイアログノーマライゼーション機能
ダイアログノーマライゼーション機能とは平均的音量レベルが異なるさまざまなソフトでも、一定の音量で再生されるように自動調整する機能です。
「Dial. Norm.」と表現されることもあります。

ドルビーデジタルサラウンドEX

ドルビーデジタルサラウンドEXは、映画「スターウォーズ･エピソード1」の製作に向けて、ドルビーラボラトリーズとルーカスフィルム社で共同開発された、6.1ch再生可能な新しい音響フォーマットです。新たに加えられたサラウンドバックchにより空間表現力、定位感が高められ、中央から離れた客席からでも360度の回転や頭上を通過するような移動音効果･音像をより生々しく体感することが可能となりました。フィルム上ではサウンドトラックのサラウンドL／Rchにエンコードされるため、既存のドルビーデジタル（5.1ch）環境での再生互換性があります。この技術により製作された映画のリストはドルビーラボラトリーズのウェブサイトにてご覧になれます。
http://www.dolby.com/

プロロジックIIx製品は、プロロジックIIxの持つ様々な機能を、選択して搭載することが可能です。プロロジックIIx搭載、とキャッチフレーズされた商品でも、必ずしも全く同じ機能を持っているとは限らないことにご注意ください。

ドルビープロロジック ドルビープロロジックIIx

ドルビープロロジックIIxは、ドルビープロロジック、ドルビープロロジックII、ドルビーデジタルEXをさらに改良し、ステレオ音声や5.1ch音声を、すべて最大7.1chまで拡張できるマトリックスデコード技術です。
ステレオ音声のマルチch化方式として、ドルビープロロジックは4chに、ドルビープロロジックIIは5ch化していましたが、それらをさらに進化させ、メインの7chを作り出します。
また5.1chソースに対し、ドルビーデジタルEXはモノラルのサラウンドバックchを生成していましたが、これをステレオ化することで最大7.1ch再生が可能になりました。今まで以上に自然でシームレスな移動感、滑らかで包み込むような、音楽および映画サウンドを体験できます。
本機には複数のモードを搭載しているため、お好みに応じて切り替えることが可能です。

■2chソース用
MOVIE/MUSIC/PRO LOGIC

■5.1chソース用
MOVIE/MUSIC/DIGITAL SURROUND EX

MOVIE（PRO LOGIC IIx MOVIE）
7.1ch化します。映画再生に適したモードで、特にドルビーサラウンド・エンコード作品に効果的です。ドルビーデジタルEXに迫るセパレーションや移動感などが得られます。

MUSIC（PRO LOGIC IIx MUSIC）
7.1ch化します。音楽再生に適したモードで、通常のステレオ録音されたソース（CDなど）を再生するときにも効果的です。サラウンドchは定位よりも広がり感を重視しています。

PROLOGIC（PRO LOGIC）
従来のドルビープロロジックと同等の再生モードです。ソースのクオリティを問わず、幅広くお使いいただけるモードです。

SURROUND EX
同ページ内参照
サラウンドバックchを使用しない場合は、自動的に従来のプロロジックIIモードになります。

■2chソースに対するプロロジックとプロロジックIIxの違い

	プロロジック	プロロジックII	プロロジックIIx
効果的なソース	ドルビーサラウンドエンコード処理されたステレオ音声	すべてのステレオ音声	すべてのステレオ音声/Dolby Digital 5.1chソース
デコードチャンネル数	4.1ch（サラウンドモノラル）	5.1ch（サラウンドステレオ）	7.1ch（サラウンド、サラウンドバック、ステレオ）
周波数特性	サラウンド7kHz帯域制限	全チャンネルフルバンド	全チャンネルフルバンド

MPEG-2 AAC

MPEG-2オーディオの標準方式の一つで、BS デジタルや地上デジタル放送で採用されている音声符号化規格です。高圧縮率ながら高音質を確保できる点が特長で、番組内容によりマルチチャンネル設定が可能なフォーマットです。

■米国におけるパテントナンバー

08/937,950	5 297 236	5,481,614	5,490,170
5848391	4,914,701	5,592,584	5,264,846
5,291,557	5,235,671	5,781,888	5,268,685
5,451,954	07/640,550	08/039,478	5,375,189
5 400 433	5,579,430	08/211,547	5,581,654
5,222,189	08/678,666	5,703,999	05-183,988
5,357,594	98/03037	08/557,046	5,548,574
5 752 225	97/02875	08/894,844	08/506,729
5,394,473	97/02874	5,299,238	08/576,495
5,583,962	98/03036	5,299,239	5,717,821
5,274,740	5,227,788	5,299,240	08/392,756
5,633,981	5,285,498	5,197,087	

DTS

DTS

デジタルシアターシステムズ(Digital Theater Systems)の略で、低圧縮率と高転送レートがもたらす豊富な情報量により、高音質マルチチャンネルサラウンド再生を実現します。音楽用にも独自録音による DTS-CDがあります。

DTS 96/24

5.1chすべてを96kHz/24bitの高音質で再生する最新のサラウンドフォーマットで、スタジオのマスター音源のクオリティを踏襲しています。DVDの限られた記録エリアで、高音質/　高画質を両立させるために開発されました。既存のDTS対応のDVD プレーヤーと、DTS96/24 に対応するデコーダー(AVアンプ等)をデジタル接続することで、再生することができます。(本機は、DTS96/24対応デコーダーを搭載しております)(専用プレーヤーは必要ありません)。従来のＤＴＳデコーダーでは通常のDTS信号として再生されるため、完全互換性を持っています。

DTS-ES

２０００年１１月に発表された新たなるサラウンドフォーマットで、「DTS Extended Surround」の略称です。従来の5.1chにサラウンドバック(ＳＢ)ｃｈを加えたもので、かつてない音像･定位感をもたらすことが可能になりました。「DTS-ESディスクリート6.１」と「DTS-ESマトリックス6.１」の2種類があり、どちらも従来のDTS5.１chデコーダーとの下位互換性を有しています。

DTS Neo:6

すべての2chソースを6.1ch化するマトリックスデコード技術です。Cinemaモード/Musicモードがあります。

CINEMA (Neo6: CINEMA)
6.1ch化します。映画再生に適したモードで、2chでも映画館特有の移動感などをお楽しみいただけます。

MUSIC (Neo6: MUSIC)
6.1ch化します。フロントからは原音をそのまま再生するため音質の変化が無く、音楽再生に適しています。また、センター/サラウンド/サラウンドバックch の音声が音場にナチュラルな広がり感を加えます。

THX

THXは、世界的に有名な映画製作会社であるルーカスフィルム社によって確立された独自の規格と技術の集大成です。「映画館でもホームシアターでも、映画のサウンドトラックは映画監督の意図どおり、できるかぎり忠実に再生して欲しい」というジョージ・ルーカス監督の情熱によって誕生しました。THXはホームシアターの音場最適化に関する数々の特許技術を開発しています。ホームシアター機器がTHX認証されるには、下記の技術を備え、かつ品質と動作に関する一連の厳しい試験に合格しなくてはなりません。こうして製品搭載が許諾されるTHXのロゴは、ご購入いただいたホームシアター製品が長年に渡ってすばらしい性能を維持する保証となります。THX規格は、プリアンプ・パワーアンプの性能、操作性、デジタル・アナログの両分野に渡る何百もの性能要求を含め、製品の全体像を網羅しています。

THX Cinema

映画のサウンドトラックは、ダビングステージ(ミキシング専用大型映画館)で制作されます。DVD などに収録する音声もそのサウンドトラックのままで、ホームシアター向けの変更は加えません。家庭と映画館との空間的な違いによる音色の差を補正し、映画館の音場を正確に再現します。

THX Surround EX

「THX Surround EX - Dolby Digital Surround EX」はドルビーラボラトリーズとルーカスフィルム社のTHX部門との共同開発によるものです。リスナーの後方に位置するよう加えられたサラウンドバックchは、ミキシング段階で　Dolby Digital Surround EX 技術によって符号化され、映画館での上映時に復元されます。従来の5.1chスピーカー構成では表現しきれなかった後方部の繊細な描写力・空間の奥行きや広がり感・音像定位などが得られるようになりました。一般家庭でこの新技術を忠実に再生することができるのは、THX Surround EX のロゴが搭載された製品だけです。この製品は通常の5.1chソースでも「THX Surround EX 」モードでお楽しみいただけます。この場合のサラウンドバックchの音声は、所定の演算処理によって生成されますので、お好みに応じてご使用ください。

Re-Equalization

映画のサウンドトラックは、映画館での上映用に製作されているため、それを家庭用のオーディオ機器で再生すると、過度に明るく耳障りに聞こえます。Re-Equalizationは小型のホームシアターでも正確な音色バランスを再現します。

Timbre Matching

人間の耳は、音の到達方向によって音色の感じ方が変わります。映画館では数多くのサラウンドスピーカーが聴衆を囲むように配置されていますが、ホームシアターではリスナー両側の2本のみです。 この配置の違いから起こる音色の差を補正し、かつ前方から到達する音の性質に合わせることによって、フロント-サラウンド間の音の繋がりをスムーズにします。

Adaptive Decorrelation

映画館ではサラウンドスピーカーが多数なのに対し、ホームシアターは通常2本です。そのため、広がり感やサラウンド感に欠けてしまったり、近接したスピーカーに音場が偏ってしまうことがあります。Adaptive Decorrelationは サラウンド信号間の時間と位相の関係を微妙に変化させることにより、2本のスピーカーでもリスニングエリアを拡大して、映画館と同様の効果をもたらします。

メモ

本機は「6.1再生検出信号」(DTS - ES と Dolby Digital Surround EX)を自動検出しますが、それらの技術を用いて上映された映画でも、DVD化の際にこの検出信号を収録していないものがあります。この場合は手動で最適なモードに変更してください。 Surround EX技術により製作された映画のリストは各ウェブサイトでご覧になれます。

パイオニア独自のサラウンドモード（ADVANCED SURROUND）

理想の視聴空間形状や、各ソフトに収録された音声の研究などにより開発された、パイオニアオリジナルのサラウンドモードです。映画/音楽/TV放送/ゲームなど多岐にわたるいかなるソフトでも、快適なサラウンド再生が提供できるよう、多種のモードをご用意いたしました。各ソースはデコード処理（2chソースはマトリックス・デコード処理）後、それぞれに合わせたオリジナルの処理を加えています。以下をご参照のうえ、お好みに応じて選択してください。

ADVANCED MOVIE

映画再生に適したモードで、特にドルビーサラウンド、ドルビーデジタル、DTS・エンコードの映画作品をこのモードで視聴するとより効果的です。映画館さながらの迫力や臨場感をお楽しみいただけます。

ADVANCED MUSIC

音楽再生に適したモードで、通常のステレオ録音されたソース（CDなど）に限らずドルビー、DTS・エンコードされた音楽作品を再生するときに効果的です。コンサートホールの雰囲気をお楽しみいただけます。

TV SURROUUND

テレビ放送のほとんどの割合を占めるモノラル信号やステレオ信号もマルチチャンネルサラウンドで再生します。モノラルで収録された古い映画などをご覧になるときにも効果的です。

SPORTS

スポーツ中継の視聴に最適です。その場で観戦しているような臨場感を体感できるサラウンド再生です。

GAME

ゲームのスピード感、躍動感をよりいっそう高めます。シューティングゲームやレーシングゲームなど、右へ左へ駆け巡るような流れのあるシーンの多いゲームに効果的です。

EXPANDED

ドルビーサラウンドや2ch収録されているソースには、ドルビーデジタルやDTSの5.1chサラウンドのようなリアルな移動感などを実現します。また5.1ch収録のソースでは、より広がりのある音場を実現します。

7chSTEREO

2chで収録された音声はステレオ音声のまま、5.1chソースはダウンミックス処理を施したのち、7本のスピーカーで再生します。部屋のどの場所にいてもステレオ感をお楽しみいただけますので、パーティーなどでの視聴に最適です。

Phones Surround（ヘッドホン挿入時のみ）

ヘッドホンでありながら仮想立体音響を再現し、マルチチャンネルサラウンド再生時の臨場感をお楽しみいただけます。

デコード処理の方法は、各モードに最適な技術を組み合わせてありますのでお客様が変更することはできません。

リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧

この表は出力する最大の出力チャンネル数を示したもので、厳密なデコードch数とは異なります。詳しくは「サウンドフォーマットについて」(→94ページ)をご覧ください。

			入力信号	プログラム フォーマット インジケーター	HOME THX	STANDARD	AUTO SURROUND	ADVANCED SURROUND	STEREO/ DIRECT
マルチch信号	SB SP 2本/1本	EXTENDEDモード：ON	ドルビーデジタルサラウンドEX (6.1ch再生検出信号付)	[L] [C] [R] [LFE] [Ls] [S] [Rs]	THX Surround EX （最大7.1ch）	DD DIGITAL EX DDPLIIx Movie *2 DDPLIIx Music （最大7.1ch）	ストレートデコード再生 （最大7.1ch）	ADV MOVIE ADV MUSIC TV SURROUND SPORTS GAME EXPANDED 7ch STEREO （最大7.1ch）	ダウンミックス再生 （最大2.1ch）
			DTS-ES (6.1ch信号/6.1ch再生検出信号付)		DTS ES Matrix+THX CINEMA DTS ES Discrete+THX CINEMA （最大7.1ch）	DTS ES Matrix DTS ES Discrete （最大7.1ch）			
			ドルビーデジタル (5.1ch信号等)	[L] [C] [R] [LFE] [Ls] [S] [Rs]	THX Surround EX DDPLIIx Movie+THX CINEMA *2 （最大7.1ch）	DD DIGITAL EX DDPLIIx Movie *2 DDPLIIx Music （最大7.1ch）			
			DTS (5.1ch信号等)		Neo:6+THX CINEMA （最大7.1ch）	Neo:6 （最大7.1ch）			
			MPEG-2 AAC (5.1ch信号等)		THX Surround EX DDPLIIx Movie+THX CINEMA *2 （最大7.1ch）	DD DIGITAL EX DDPLIIx Movie *2 DDPLIIx Music （最大7.1ch）			
		EXTENDEDモード：AUTO	ドルビーデジタルサラウンドEX (6.1ch再生検出信号付)	[L] [C] [R] [LFE] [Ls] [S] [Rs]	THX Surround EX （最大7.1ch）	DD DIGITAL EX DDPLIIx Movie （最大7.1ch）			
			DTS-ES (6.1ch信号/6.1ch再生検出信号付)		DTS ES Matrix+THX CINEMA DTS ES Discrete+THX CINEMA （最大7.1ch）	DTS ES Matrix DTS ES Discrete （最大7.1ch）			
			ドルビーデジタル (5.1ch信号等)	[L] [C] [R] [LFE] [Ls] [S] [Rs]	THX CINEMA （最大5.1ch）	ストレートデコード再生 （最大5.1ch）	ストレートデコード再生 （最大5.1ch）		
			DTS (5.1ch信号等)						
			MPEG-2 AAC (5.1ch信号等)						
	SB SP 無し / EXTENDEDモード：OFF		ドルビーデジタルサラウンドEX (6.1ch再生検出信号付)	[L] [C] [R] [LFE] [Ls] [S] [Rs]	THX CINEMA （最大5.1ch）	ストレートデコード再生 （最大5.1ch）		ADV MOVIE ADV MUSIC TV SURROUND SPORTS GAME EXPANDED 7ch STEREO （最大5.1ch）	
			DTS-ES (6.1ch信号/6.1ch再生検出信号付)						
			ドルビーデジタル (5.1ch信号等)	[L] [C] [R] [LFE] [Ls] [S] [Rs]					
			DTS (5.1ch信号等)						
			MPEG-2 AAC (5.1ch信号等)						
2ch信号	SB SP 2本/1本	EXTENDEDモード：ON/AUTO	ドルビーサラウンド信号	[L] [C] [R] [LFE] [Ls] [S] [Rs]	DDPLIIx Movie+THX CINEMA *4 DDPRO LOGIC+THX CINEMA *3 Neo:6 Cinema+THX CINEMA *5 （最大7.1ch）	DDPLIIx Movie *4 DDPLIIx Music *4 DDPRO LOGIC *3 Neo:6 Cinema *5 Neo:6 Music *5 （最大7.1ch）	DDPLIIx Movie （最大7.1ch）	ADV MOVIE ADV MUSIC TV SURROUND SPORTS GAME EXPANDED 7ch STEREO （最大7.1ch）	ステレオ再生 （最大2.1ch）
			DTS　サラウンド信号				Neo:6 Cinema （最大7.1ch）		
			アナログ信号、PCM、ドルビーデジタル ステレオ信号 DTS　ステレオ信号 MPEG-2 AAC　ステレオ信号	[L] [C] [R] [LFE] [Ls] [S] [Rs] *1			ステレオ再生 （最大2.1ch）		
	SB SP 無し / EXTENDEDモード：OFF		ドルビーサラウンド信号	[L] [C] [R] [LFE] [Ls] [S] [Rs]	DDPLII Movie+THX CINEMA DDPRO LOGIC+THX CINEMA Neo:6 Cinema+THX CINEMA *5 （最大5.1ch）	DDPLII Movie DDPLII Music DDPRO LOGIC Neo:6 Cinema *5 Neo:6 Music *5 （最大5.1ch）	DDPLII Movie （最大5.1ch）	ADV MOVIE ADV MUSIC TV SURROUND SPORTS GAME EXPANDED 7ch STEREO （最大5.1ch）	
			DTS　サラウンド信号				Neo:6 Cinema （最大5.1ch）		
			アナログ信号、PCM、ドルビーデジタル ステレオ信号 DTS　ステレオ信号 MPEG-2 AAC　ステレオ信号	[L] [C] [R] [LFE] [Ls] [S] [Rs] *1			ステレオ再生 （最大2.1ch）		
ハイサンプリング信号	SB SP/EXTENDEDモードによらない		PCM 96kHz、PCM 88.2kHz	[L] [C] [R] [LFE] [Ls] [S] [Rs] *1	／	DDPLII Movie DDPLII Music DDPRO LOGIC （最大5.1ch）	ステレオ再生 （最大2.1ch）	／	ステレオ再生 （最大2.1ch）
			DTS96/24、DVD-AUDIO、SACD	フォーマットは問わない	／	ストレートデコード再生 （最大5.1ch）	ストレートデコード再生 （最大5.1ch）	／	ダウンミックス再生 *6

*1：アナログ信号やPCMのときは、プログラムフォーマットインジケーターは点灯しません。
*2：SB1本のときは選択できません。
*3：DDPRO LOGIC は常に最大5.1chまでの再生となります。
*4：DTSサラウンド/DTSステレオ信号入力時はDDPLII処理となり、最大5.1chまでの再生となります。
*5：MPEG-2 AAC ステレオ信号入力時は選択できません。
*6：DVD-AUDIO信号のダウンミックス禁止素材を入力し、スピーカーの設定をフロントのみ[LARGE]としている場合は、ダウンミックスされた音は出ずに、フロントL、Rの音が出力されます。

メモ

- 表中の灰色で表示された設定は、本機により最適なモードが自動選択されます。ユーザーによる選択はできません。
- MULTI CH INモード時は、リスニングモードの効果を加えることはできません。
- STEREO / DIRECT/ Phones Surroundモード時は、サラウンドバック出力はありません。
- 入力信号によっては、サラウンドバック信号を生成できないものがあります。

i.LINKについて

i.LINKとは、デジタル音声などのデータ転送や接続した機器に対して操作なども行えるシリアル転送方式のデジタルインターフェース IEEE1394の呼称で、米国電子電気技術協会(IEEE) によって標準化された国際標準規格です。
本機はi.LINK AUDIO(A&Mプロトコル)に対応しているため、本機とi.LINK対応機器とをi.LINKケーブルで接続すると、DVDオーディオやSACDなどのマルチチャンネル音声も1本のケーブルだけでデジタルでやり取りすることができます。また複数のi.LINK対応機器を接続する際、他の機器を介して操作やデータのやり取りができます。このため接続順序はあまり気にする必要ありません。
また本機でi.LINK接続したSACDやCDの再生を行うとき、接続した再生機器がPQLS*または同様のレートコントロール機能に対応していれば、デジタル音声部分はジッターレスで伝送することができます。

* PQLS(レートコントロール)
PQLS(Precision Quartz Lock System)とは、本機の高精度な水晶発振器を使用してプレーヤーからのデータ伝送レートをコントロールすることで、ジッターのない状態でデジタル/アナログ変換を行うことができる、i.LINKインターフェース上の高音質なデジタルオーディオ伝送技術です。この技術を動作させるには、本機とPQLSまたは同様のレートコントロール機能に対応したプレーヤーとがi.LINK接続されている必要があります。

著作権保護システム

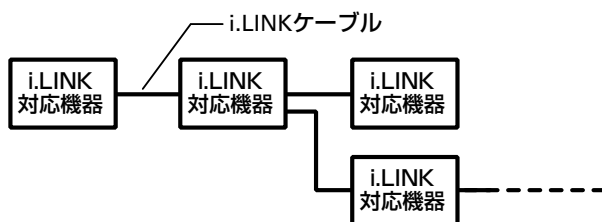
i.LINK接続を通してDVDオーディオ、SACD、DVD(コピー自由なディスクは除く)の音声を再生するには、プレーヤーとアンプの双方がDTCP(Digital Transmission Content Protection)と呼ばれる著作権保護システムに対応している必要があります。DTCPはデータの暗号化と相手機器の認証からなるコピープロテクション技術です。本機はDTCPに対応しています。お手持ちのプレーヤーについてはプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

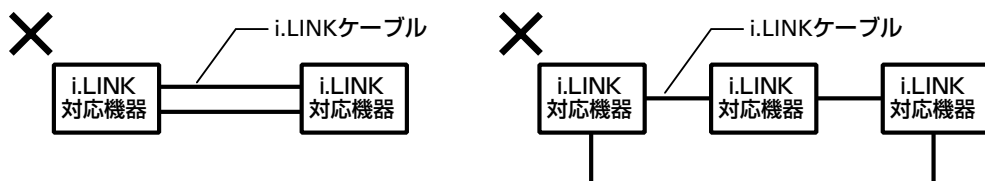
この機器のi.LINKインターフェースは、以下の規格に基づいて設計されています。
1) IEEE Std 1394a-2000, Standard for a High Performance Serial Bus
2) Audio and Music Data Transmission Protocol 2.0
この規格のAM824 sequence adaptation layersの中の、IEC60958 bitstream、DVD-Audio、SACDに対応しています。

i.LINKネットワーク

下図のようにして複数のi.LINK機器を接続することができます。

デイジー・チェーン型(数珠つなぎ)で接続の場合は、最大17台まで接続できます。

i.LINK端子が3個以上ある機器の場合、途中から分岐してツリー型に接続することもできます。ツリー型で接続の場合は、最大34台まで接続できます。

接続が輪(ループ)にならないように接続する。

デジタル信号は、接続したすべてのi.LINKケーブルに流れます。信号を出力した機器に同じ信号が戻らないよう、輪にならないようにつないでください。接続が輪(環状)になることを「ループ」と呼びます。

メモ

- i.LINKの伝送フォーマットには、本機のような「i.LINK AUDIO(A&Mプロトコル)」、BSデジタルのような「MPEG-2 TS」、DVDレコーダーやデジタルビデオのような「DV」といった種類があります。i.LINK AUDIO以外の機器やパソコン周辺機器を本機と接続したときには、正常にデータ転送ができません。また、誤動作する場合もあります。
- 本機の電源がオンのときは、他機器のi.LINKケーブルの接続を変更したり、新しい機器を接続したり、電源のオン/オフは行わないでください。
- i.LINK対応機器の中には、電源がスタンバイ状態やオフになっていると、データを中継できない機器があります。接続するi.LINK対応機器の取扱説明書もご覧ください。本機はスタンバイ状態のとき、i.LINKのデータを中継できません。
- i.LINK対応機器には、その機器が対応している最大データ転送速度がi.LINK端子の周辺に表記されています。i.LINKの最大データ転送速度は、約100/200/400Mbps*が定義されており、200MbpsのものはS200、400MbpsのものはS400と表記されます。本機の i.LINK最大データ転送速度は、400Mbpsです。S100やS200の機器をつないだ場合や、機器の仕様により、実際の転送速度が400Mbpsより遅くなる場合があります。できるだけ、最大データ転送速度が同じ機器どうしを並べて接続してください。
  * Mbps(メガビーピーエス)とは、「Mega bits per second」の略で、1秒間に通信できるデータの容量を示しています。400Mbpsでは、1秒間に400メガビットのデータを転送します。
- i.LINK機能は、すべてのi.LINK対応機器間での接続動作を保証するものではありません。i.LINK対応機器間でデータやコントロール信号がやり取りできるかどうかは、それぞれの機器の機能によって異なります。

工場出荷時の設定一覧

設定項目	初期値	参照ページ
スピーカーインピーダンス	8Ω～16Ω	27
サラウンドバックシステムの設定	Normal （SB）	58
スピーカーの有り無し／低域再生能力	すべてSMALL（小）※	65
サブウーファー	YES（有り）※	65
スピーカー出力レベル	0dB（補正無し）	68
スピーカーまでの距離	すべて2.0m	69
クロスオーバー周波数	80Hz	67
視聴環境の周波数特性の補正	全帯域0dB（補正無し）	61
デジタル入力の設定	リアパネル表記のとおり	70
コンポーネントビデオ入力の設定	OFF	71
i.LINK入力の設定	i.LINK	72
入力ファンクション	DVD/LD	36
入力信号の種類	AUTO（入力信号により変化します）	37
EXTENDEDモード	ON	40
リスニングモード	AUTO SURROUND	38
アコースティックキャリブレーションEQ	OFF（MCACC設定後はALL CH ADJUST）	41
ミッドナイトリスニング機能	OFF	46
ラウドネス機能	OFF	46
トーンコントロール機能	BASS 0dB/TREBLE 0dB (OFF)	46
スピーカーシステムA/B	A（サラウンドバックシステムの設定：Normal(SB)のとき）	49
マルチチャンネル入力モード	OFF	42
ディスプレイの明るさ	一番明るい	48
ダイナミックレンジコントロールの設定	OFF	73
デュアルモノラル音声の設定	CH1	74
LFEアッテネーターの設定	ATT 0dB	75
マルチルームの設定	VARIABLE/Setting1	80
SR＋連動モードの設定	DVD/LD:input-3、TV/SAT:TV、DVR/VCR:input-1 VIDEO1:OFF、VIDEO2:OFF	85
12Vトリガーの連動設定	すべてOFF	76
SACDゲインの設定	0dB	77

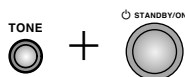
※本機にはサブウーファー検出機能がついています。サブウーファーが接続されていない場合は変更します。

設定オールリセット

設定オールリセットは以下の手順で実行します。操作は本体フロントパネルで行います。
設定オールリセットを行うと、上記のすべての設定が工場出荷時の状態になりますので**十分ご注意ください。**

① 本機がSTANDBYモードのときにTONEボタンを押しながらSTANDBY/ONボタンを3秒以上押し続ける

② フロントパネル表示部に「RESET？」と表示されたらENTERボタンを押し、「OK?」表示後にSYSTEM SETUPボタンを押します

メモ

1カ月程度電源コンセントからコンセントを抜いた状態にしておくと本機で設定した各種設定がオールリセットされますのでご注意ください。

仕様

オーディオ部
実用最大出力(JEITA、1kHz、10%、8Ω)
フロント .... 160 W+160 W
センター .... 160 W
サラウンド .... 160 W+160 W
サラウンドバック .... 160 W+160 W
定格出力(ステレオ動作時)
20 Hz〜20 kHz、0.09%、8Ω 100 W+100 W
定格出力(サラウンド動作時)
20 Hz〜20 kHz、0.09%、8Ω
フロント .... 100 W+100 W
センター .... 100 W
サラウンド .... 100 W+100 W
サラウンドバック .... 100 W+100 W
入力端子(感度/インピーダンス)
LINE系 .... 335 mV/47 kΩ
周波数特性
LINE系 .... 5 Hz〜100 kHz、$^{+0}_{-3}$dB
出力端子(レベル/インピーダンス)
REC OUT系 .... 335 mV/2.2 kΩ
トーンコントロール
BASS .... ± 6 dB (100 Hz)
TREBLE .... ± 6 dB (10 kHz)
LOUDNESS(ボリュームポジション−40dB時)
.... +4 dB/+2 dB (100 Hz/10 kHz)
SN比(IHF、ショートサーキット、Aネットワーク)
LINE系 .... 103 dB
SN比(EIA、1W (1kHz))
LINE系 .... 83 dB

ビデオ部(コンポジット、S)
入力端子(感度/インピーダンス) .... 1 Vp-p/75 Ω
出力端子(レベル/インピーダンス) .... 1 Vp-p/75 Ω
周波数特性 .... 5 Hz〜10 MHz、$^{+0}_{-3}$dB
SN比 .... 65 dB

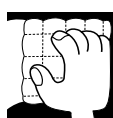
コンポーネントビデオ部
入力端子(感度/インピーダンス) .... 1 Vp-p/75 Ω
出力端子(レベル/インピーダンス) .... 1 Vp-p/75 Ω
周波数特性 .... 5 Hz〜40 MHz ($^{+0}_{-3}$dB)
SN比 .... 65 dB

FMチューナー部
受信周波数 .... 76.0 MHz〜90.0 MHz
実用感度 .... モノ;15.2 dBf (1.6 μV/75 Ω)
S/N 50dB感度 ..... モノ;20.2 dBf (2.8 μV/75 Ω)
ステレオ;41.2 dBf (31.6 μV/75 Ω)
S/N比 (85dBf入力時) .... モノ;76 dB
ステレオ;72 dB
高調波歪率 .... ステレオ;0.5% (1 kHz)
実効選択度 .... 65 dB(±400 kHz)
ステレオセパレーション .... 40 dB(1 kHz)
周波数特性 .... 30 Hz〜15 kHz(±1 dB)
アンテナ .... 75 Ω不平衡型

AMチューナー部
受信周波数 .... 522 kHz〜1,629 kHz
実用感度(付属ループアンテナ) .... 350 mV/m
S/N比 .... 50 dB
アンテナ .... ループアンテナ

電源部・その他
電源 .... AC 100V、50/60 Hz
消費電力 .... 350 W
待機時消費電力 .... 0.48 W
予備電源コンセント
連動 .... 1 (100 W 最大)
外形寸法
..... 420(幅) × 173(高さ) × 465(奥行) mm
質量 .... 15.6 kg

付属品
リモコン 1
電源コード 1
単3形アルカリ乾電池(LR6) 2
セットアップ用マイク 1
セットアップ用マイクスタンド 1
FMアンテナ 1
AMループアンテナ 1
保証書 1
修理窓口・ご相談窓口のご案内 1
スピーカーコーションシート 1
取扱説明書

●仕様および外観は改良のため予告なく変更することがあります。

お手入れについて
通常は柔らかい布で空拭きしてください。汚れがひどい場合は水で5〜6倍に薄めた中性洗剤に柔らかい布を浸してよく絞った後、汚れを拭き取り、その後乾いた布で拭いてください。アルコール、シンナー、ベンジン、殺虫剤などが付着すると、印刷、塗装などがはげることがありますのでご注意ください。また、化学ぞうきん等をお使いの場合は、化学ぞうきん等に添付の注意事項をよくお読みください。

音のエチケット
楽しい音楽も時と場所によっては気になるものです。隣近所への思いやりを十分にいたしましょう。
ステレオの音量は、貴方の心がけ次第で大きくも小さくもなります。
とくに静かな夜間には小さな音でも通りやすいものです。夜間の音楽鑑賞にはとくに気を配りましょう。近所へ音が漏れないように窓を閉め、お互いに心を配り、快い生活環境を守りましょう。

故障かな ? と思ったら

故障かな ? と思ったら以下を調べてみてください。意外なミスが故障と思われています。また、本機以外の原因も考えられます。ご使用の他の機器および同時に使用している電気機器もあわせてお調べください。
以下の項目を調べても直らない場合は、修理を依頼してください。

音について

「音が出ない」「音がおかしい」「ノイズが出る」など、音についての疑問や症状です。

症　状	原　因	対　応	参照
入力切換を合わせても、音が出ない	入力端子の接続が正しくない。 デジタル入力の設定が正しくない。 SIGNAL SELECTの入力信号選択が正しくない。 ミュート状態(音量インジケーターが点滅)になっている。 スピーカー出力が OFF になっている。 MULTI CH IN モードになっている。 音量が下がっている。	接続を再確認する。 設定を修正する。 SIGNAL SELECT ボタンで正しい入力信号を選択する。 リモコンでミュートを解除する。 SPEAKERS ボタンを押して、ON(SP►A)にする。 MULTI CH IN を OFF にして、通常のリスニングモードにする。 MASTER VOLUME を調整する。	**70** **37** **48** **49** **42** **36**
フロントスピーカー以外の音が出ない	スピーカーシステムの設定がフロント ch 以外すべて NO になっている。 リスニングモードが STEREO/DIRECT になっている。	スピーカーシステムの設定を修正する。 サラウンド再生用のリスニングモードを選択する。	**65** **38**
サラウンドバックスピーカーから音が出ない	EXTENDEDモードの設定がOFFになっている。 EXTENDED モードの設定が AUTO で「6.1ch 再生検出信号」の記録されていないソースを使用している。 サラウンドバックシステムの設定が［Front Bi-Amp］または［Second Zone］になっている。 スピーカーシステムの設定でサラウンドバック ch の設定が[NO(無し)]になっている。 接続が正しくない（サラウンドバック ch を 1 本のスピーカーで接続していて Rch 側に接続している)。	ON を選択する。 ON を選択する。 ［Normal(SB)］を選択する。 サラウンドバック ch の設定を修正する。 接続を再確認する（サラウンドバック ch を 1 本のスピーカーで接続しているときは Lch 側に接続する)。	**40** **40** **58** **65** **26**
特定のスピーカーから音が出ない	スピーカーシステムの設定が[NO(無し)]になっている。 スピーカーの接続が外れている。 ソフトのサウンドトラックが意図的にそのように録音されている。 スピーカーの出力レベル設定が小さい。 サラウンドバックシステムの設定で［Second Zone］が選択されているときのスピーカーシステムの選択が合っていない。	スピーカーシステムの設定を修正する。 スピーカーの接続を確認する。 リスニングモードによっては効果音のみ出力される場合があります。 スピーカーの出力レベル設定を上げる。 スピーカーシステムで「A+B」または「B」にする。	**65** **26** **38** **49**
表示部にマルチチャンネル信号のプログラムフォーマットインジケーターが点灯しているが、音が出ていないスピーカーがある	再生しているソースのプログラムフォーマットにはそのチャンネルの情報が記録されているが、そのチャンネルに音声が収録されていない。	故障ではありません。収録内容をご確認ください。	
デジタル機器の音が出ない	デジタル接続が正しくない。 デジタル入力の設定が正しくない。 SIGNAL SELECT の入力信号選択が正しくない。 デジタル出力レベル調整機能が付いている CD レコーダーなどのデジタル出力レベル設定が低すぎる。 再生ソフトのデジタルフォーマットに対応していないプレーヤーである（または出力しない設定になっている)。	デジタル接続を再確認する。 デジタル入力の設定を修正する。 接続されているデジタル機器に応じて、SIGNAL SELECTボタンでDIGITALを選択する。 プレーヤーのデジタル出力設定を適切に修正する。（DTS CD の場合は 0dB に設定してください。) 対応フォーマットの音声トラックを選択する（または出力させる設定にする)。	**70** **37**
録音ができない	アナログ信号をデジタルで、デジタル信号をアナログで録音しようとしている。 コピープロテクト信号の入ったデジタル信号である。 REC 端子の接続が正しくない。	アナログ信号はアナログ録音、デジタル信号はデジタル録音のみ可能です。 コピープロテクト信号の入ったデジタル信号は録音することはできません。 正しく接続し直す。	**50** **31**

症　状	原　因	対　応	参照
無入力でもノイズが聞こえる	電源そのものにノイズが残っている。	パソコンなどのデジタル機器とたこ足配線になっていないか確認する。	
MULTI CH INPUT 端子に接続した機器で、DVD オーディオを再生したが 2ch にダウンミックスされているような音になっている	MULTI CH INPUT 端子に接続したものではない信号を再生している。(デジタル PCM 出力など) プレーヤーの出力設定が間違っている。	マルチチャンネル入力の再生をする。 プレーヤーの取扱説明書をご覧ください。	42
スピーカーの設定をフロントのみ「LARGE」としていてマルチ ch の DVD オーディオを再生したが、マルチ ch 音声がダウンミックスされない	ダウンミックス禁止のソフトを再生している。	故障ではありません。	
チューナー受信中にノイズが聞こえる。	プラズマディスプレイを接続している場合、その電源が入っていると、チューナーにノイズが入ることがあります。	チューナー受信中は、プラズマディスプレイの電源を切る。	
DTS CD のサーチ中にノイズが出る	サーチ中に CD に含まれるデジタル情報を読み取ってしまう。	故障ではありません。サーチ中はアンプの音量を下げ、スピーカーから出る音を抑えてください。	
DTS の LD を再生するとノイズが出る	SIGNAL SELECT で ANALOG が選択されている 。	機器を正しくデジタル接続し、SIGNAL SELECT ボタンで DIGITAL を選択する。	

サブウーファーの接続／再生について

音についての問題の中でも、特に接続したサブウーファーについての疑問や症状をまとめました。

症　状	原　因	対　応	参照
サブウーファーから音が出ない	サブウーファーあり／なしの設定が [NO(無し)] に設定されている。 LFE アッテネーターの設定が[LFE OFF]になっている。 再生しているソース(シーン)や音楽に超低域成分（LFE チャンネル）が含まれていない。 接続が外れている(または、まちがっている)。 サブウーファー側の電源が OFF になっている。 サブウーファー側の自動スタンバイ機能が働いている。	[Speaker Setting] 設定を確認して、サブウーファーの設定を [YES(有り)] または [PLUS] にする。 [ATT 0dB]または[ATT 10dB]に設定する。 故障ではありません。収録内容をご確認ください。 サブウーファーの接続を確認して、外れているときは接続し直す。 サブウーファーの電源を確認する。 サブウーファーの機能を確認する（詳しくはサブウーファーの取扱説明書をご覧ください。）	65 75 26
サブウーファーからの音が小さい	低域成分の少ない／ないソースやディスク（CD など）を再生している。 サブウーファー出力レベルの設定値が小さい。 クロスオーバー周波数の設定が低い。 サブウーファー側のボリューム設定が小さい。	再生しているソースの低域成分が少なく、サブウーファーの音量が不足している場合は、[Speaker Setting]でサブウーファーの設定を[PLUS] にする。 [Channel Level] の設定を確認して、適切なレベルに調整する。 LFE ATT の設定を[0 dB]にする。 [Crossover Network] の設定を確認して、適切なレベルに調整する。 サブウーファーのボリュームレベルを上げる。	65 68 75 67

映像について

「映像が出ない」「メニュー画面(OSD画面)が表示されない」など映像についての疑問や症状です。

症　状	原　因	対　応	参照
入力切換を合わせても、映像が出ない	TVモニター側の入力切り換え設定が正しくない。 ソース機器と TV モニターを接続するコードの種類（整合性）が正しくない。	TV モニターの取扱説明書をお読みになり、正しい入力に切り換えてください。 正しい接続法に変更する。	 28
コンポーネント端子に接続したソース機器の映像が出ない	モニター TV との接続がコンポジット（または S ビデオ）である。 コンポーネント入力設定が正しくない。	モニター TV との接続にコンポーネントケーブルを使う。 コンポーネント入力設定を正しく行う。	 71

症　状	原　因	対　応	参照
録画ができない	録画機器の接続端子とソース機器の接続端子が合っていない。 コピープロテクト信号の入った映像信号である。	録画機器の接続端子とソース機器の接続端子を（コンポジットまたはSビデオで）合わせる。 コピープロテクト信号の入った映像信号は録画することができません。	**31**
システムセットアップ画面が表示されない	テレビによっては、コンポーネント端子を使って接続しているときにシステムセットアップ画面が表示されないものがある。	カラーバースト設定をOFFにする。(工場出荷時はONに設定されています)。手順は、電源スタンバイ時に、フロントパネルドア内部のACOUSTIC EQボタンを押しながらSTANDBY/ONボタンを押します。押すたびにON/OFFが切り換わります。	
コンバート後のコンポーネント出力映像が出ない、または乱れる	コピープロテクト信号が極端に大きい、または画質劣化の激しいビデオテープを再生している。	コンバート回路またはモニターTVの実力です。コンポジットまたはS端子の出力映像でお楽しみください。	

操作について

「操作できない」「電源が切れる」など操作時にある疑問や症状です。

症　状	原　因	対　応	参照
大音量で再生したときに電源が切れる	スピーカーコードの芯線がスピーカー端子からはみ出して、リアパネルに接触しているか、＋－が接触し、保護回路が働いている。 スピーカーの実動作上の最低インピーダンスが非常に低いため、保護回路が働いた。または、低周波の過大な入力が持続した。	スピーカーコードの芯線をもう一度しっかりねじり直し、アンプまたはスピーカー側のスピーカー端子からはみ出ないように接続する。 ボリュームを下げて再生する。 視聴環境の周波数特性の補正で低域(40 Hzまたは125Hz)のレベルを下げる。 DIGITAL SAFETY機能をONにすると、さらに数dB音量が上げられる場合があります。 （スタンバイモード時に、SYSTEM SET UPボタンを押しながらSTANDBY/ONボタンを押すと、DIGITAL SAFETYのONとOFFが切り換わります。	**26** **61**
操作ボタンを押しても動作しない	空気が乾燥しているとき、静電気などの影響を受けている。	電源プラグを一度コンセントから外して、再び差し込む。	
AMP ERRまたはMCACCインジケーターが点滅して自動的に電源が切れる	本機のアンプ回路が故障です。	すみやかに使用を停止し、修理を依頼してください。この症状のあとに電源のON/OFFを繰り返すのはおやめください。	
OVERHEATと点滅表示したまま音が出なくなる	本機内部の温度が許容値を超えた。	通風がよくなるように設置を変える。 一度電源を切り、冷えてから使用する。	
12V TRG ERRと点滅表示される	12Vトリガー端子に不具合が生じている。	一度電源を切り、12Vトリガーの接続を見直してください。	
SIGNAL SELECTボタンを押しても入力がDIGITALにならない	接続またはデジタル入力の設定が正しくない。 MULTI CH INモードになっている。 入力設定をしていないi.LINK対応機器を選択している。	機器の接続を再確認し、「デジタル入力の設定」を正しく修正する。 MULTI CH INをOFFにする。 正しい入力ファンクションを選択する。	**70** **42** **42**
5.1chソースを再生しているのに、5.1ch再生されない	DVDプレーヤーのデジタル出力設定がOFFになっている。 DVDプレーヤーのドルビーデジタルまたはDTS出力設定がOFFになっている。	DVDプレーヤーのデジタル出力設定をONにする。 DVDプレーヤーのドルビーデジタルまたはDTS出力設定をONにする。	
DVDオーディオを再生するとプレーヤーには96kHzと表示されるが、本機では表示されない	MULTI CH IN端子はアナログ入力端子なので、デジタル情報を表示することはできません。	故障ではありません。プレーヤーの取扱説明書もご覧ください。	

症　状	原　因	対　応	参照
96kHzのソフトを再生しても表示が96kHzにならない	プレーヤー側で 96kHz 出力が OFF になっている。	プレーヤーの 96kHz 出力を ON にする。	
リモコン操作ができない	リモコンの電池が消耗している。 距離が離れすぎている。角度が悪い。 途中に信号を遮る障害物がある。 蛍光燈などの強い光がリモコン信号受光部に当たっている。	電池を交換する。 7m以内、左右30°以内で操作する。 障害物を取り除くか、操作する場所を移動する。 リモコン信号受光部に光が直接当たらないようにする。	5 21
他機器をリモコンで操作できない	プリセットコードの設定が間違っている。 電池切れの期間にメモリーが消去された。	正しいプリセットコードを設定する。 もう一度設定を行う。	88
SR接続をしているのに相手機器がリモコンで動作しない	接続でコントロール端子の IN/OUT を間違えている。 コントロールコード以外の接続をしていない。 他社製品の同用途端子と接続している。	正しく接続し直す。 アナログのオーディオコードなどを接続する。 他社製品の動作はサポートしていません。	83

インジケーター／表示について

操作中のインジケーター表示などの疑問や症状をまとめました。

症　状	原　因	対　応	参照
圧縮デジタル＊のソフトを再生しても、対応するインジケーターが点灯しない	デジタル接続が正しくない。 デジタル入力の設定が正しくない。 SIGNAL SELECT の入力信号選択が正しくない。 プレーヤーが停止か一時停止になっている。 プレーヤーの音声出力設定が間違っている。 再生しているトラックが PCM などになっている。	接続を再確認する。 デジタル入力の設定を正しく行う。 SIGNAL SELECT ボタンで正しい入力を選択する。 再生を開始する。 プレーヤーの音声出力設定を各フォーマットに対応するよう修正する。 プレーヤーの音声切り換え機能で圧縮デジタル＊の音声を選択する。	70 37
圧縮デジタル＊のソフトを再生してもすべてのプログラムフォーマットインジケーターが点灯しない	収録フォーマットが 5.1ch(または「6.1ch 再生検出信号」対応）ではない。	故障ではありません。再生しているソフトのパッケージをご確認ください。	
圧縮デジタル＊のソフトを再生しても、ⅮⅮDIGITAL または DTS などの表示にならない	デジタル信号が入力されていない。 ソフトの音声が 2ch フォーマットである。 ドルビーサラウンドエンコードされたソフトである。	SIGNAL SELECT ボタンで AUTO または DIGITAL を選ぶ。 故障ではありません。再生しているソフトのパッケージをご確認ください。	37
Surround EX（または DTS ES）ソフト再生時に、EXTENDED モードの設定を AUTO にしても EX（または ES）デコードしない	「6.1ch 再生検出信号」が記録されていない（劇場公開時と DVD 収録時はまれに違う場合があります）。	EXTENDED モードの設定を ON にする。	40
Surround EX（または DTS ES）ソフトを再生中、SL、S、SR のインジケーターは点灯するが、EX（または ES）デコードしない	スピーカーシステムの設定で、サラウンドバックチャンネルが[NO(無し)]に設定されている。 リスニングモードが正しくない。	サラウンドバック ch の設定を、接続したスピーカーに合わせて変更する。 EXTENDED モードの設定を ON または AUTO に変更し、リスニングモードをサラウンドにして再生する。	65 38,40

圧縮デジタル＊：ドルビーデジタル、DTS、MPEG-2 AACなどの総称として使用します。

MCACC(音場補正)について

MCACC(音場補正)のときにある疑問や症状をまとめました。

症　状	原　因	対　応	参照
音場補正のオート設定を何度行ってもエラーになる	マイクとスピーカーとの間に障害物がある。	障害物を移動させる。	
測定結果のサブウーファーの距離が実際の距離より長い	サブウーファー内部ローパスフィルターの遅延特性の影響で再生音にディレイがかかっている。	MCACC では、こういった遅延特性を考慮したうえで距離を特定して正確なディレイ時間を設定するようにしています。	
スピーカーの大、小設定が誤った設定になる	耳に聞こえにくい周波数の騒音がある。	エアコンなどモーターを使用した機器の電源を切ってみる。	
音場補正したが、音がおかしい	スピーカー端子の位相が反転している（＋/－が逆)。	正しく接続する。	**26**
Acousutic Cal EQ で自動測定された補正カーブを手動で調整中に「OVER」がディスプレイに表示される	調整値の組み合わせによっては補正レベルが許容量を超える。	「OVER」の表示が消えるまで、さまざまな帯域のレベルを下げる。	

システムセットアップでのMCACC(音場補正)時に表示されるメッセージの意味

「Connect Microphone」:

「Connect Mic!」:

フロントパネルのMCACC SETUP MIC端子に、付属のマイクを接続してください。

「Too much ambient noise」:

「Noisy!」:

周辺の騒音が大きすぎ、測定に誤差が生じる可能性があります。
・エアコンなどモーターを使用した機器や超音波ねずみ駆除装置などの電源を一時的にＯＦＦにするか遠ざけるなどの処置を行ってみてください。
・周囲が比較的静かな時間帯にもう一度やり直してください。

「Check Microphone」:

「Error Mic!」:

マイクからテスト信号が検出できなくなりました。
・オートセットアップ用マイクの接続や接続コードの断線をチェックしてください。
・スピーカーが正しく接続されているか確認してください。
・測定中はできるだけボリュームを変化させないでください。

「ERR」:

「Error Front」「Error Surr.」「Error Sub W.」:

Speaker Level測定後のYes/No Check判定で、以下のような間違った接続を検出しました。
・フロント、サラウンドに表示された：スピーカーがL/Rの片方しか検出されませんでした。
・サラウンド「ＮＯ」、サラウンドバック「ＥＲＲ」の場合：サラウンドの接続は検出されずサラウンドバックの接続が検出されました。
・サラウンドバック（1本接続時）の場合:R ch側から検出しました（1体のみ接続するときは､Lch側を使用してください）。

「Attention Subwoofer output level is too low　Turn volume up on subwoofer」:

「SW Volume Up」:

[YES]と設定したサブウーファーの出力信号が検出できません。サブウーファー本体の電源を確認しボリュームを適正値に上げてください。

i.LINK接続／再生について

i.LINKケーブルでつないだ機器の音を再生するときの疑問や症状をまとめました。

症　状	原　因	対　応	参照
i.LINK インジケーターが消灯していて、音が出ない	入力信号の切り換えで、i.LINK 対応機器を選んでいない。	SIGNAL SELECT ボタンで AUTO を選択する。	**37**
	i.LINK ケーブルが外れている。	正しく接続し直す。	**30**
	i.LINK ケーブルが長すぎる。	3.5m 以下のケーブルを使用する。	
	i.LINK AUDIO フォーマットに対応していない機器を接続している。	接続した機器の取扱説明書を参照する。	
	再生している機器と本機との間の機器の電源が切れている。	電源が切れていたり、機種によっては、電源がスタンバイ状態の場合、信号を伝送することができません。 詳しくは、接続した機器の取扱説明書を参照してください。	
PQLS OFF または PQLS ON が一瞬表示されて、音が途切れる	i.LINK 接続で再生中に、他の i.LINK 接続機器の状態を変更したりすると PQLS の ON/OFF が切り換わり、音が一瞬途切れることがあります。		
SIGNAL SELECT で i.LINK が選べない	i.LINK 対応機器の電源が入っていない。 i.LINK 入力の設定が正しくない。	電源を入れる。 正しく設定する。	
DVD オーディオ / SACD の再生を停止してもプログラムフォーマットインジケーターが表示されたままになる	DVD オーディオ /SACD の再生を停止しても、他のフォーマットが入力されるまで、プログラムフォーマットインジケーターは表示されたままです。		
他製品のアップグレードを行った後に i.LINK で接続したその機器の名前が表示されなかったりその機器をファンクションで選択できない	製品のアップグレードなどによって機器の認識ができなくなっている。	本機内部の機器情報を初期化します。本体のボタンを使って以下の手順で行ってください。 1　電源スタンバイ時に RETURN ボタンを押しながら STANDBY/ON ボタンを 3 秒以上押し続ける。 2　[DB CLEAR?]表示中に ENTER ボタンを押す。 3　[DB CLEAR OK?]表示中に SYSTEM SETUP ボタンを押す。[DB CLEAR SET]が表示されたら初期化終了です。もし[DB ERROR]が表示されたら、再度行ってください。	

i.LINK関係の表示部のメッセージの意味

「BUS FULL」：
i.LINKの伝送容量が最大まで達したために，もうデータを送信することができない。

「CANNOT LINK 1」：
本機とi.LINK接続されている機器との接続関係が不安定である。i.LINK ケーブルが正しく接続されているか確認し、本機とi.LINK接続されている機器との間にi.LINK対応機器がある場合は、それらの機器も含めて正しく接続されているか確認してください。

「CANNOT LINK 2」：
i.LINK接続したい機器を識別できないので、その機器からの信号を受信できない。

「LINK CHECK」：
i.LINK接続関係を確認している。例えば本機とi.LINK接続されているネットワーク上で、新しく機器が加えられたり、外されたりしたときに表示します。再生中にこのメッセージが表示されたときは、音が途切れる場合があります。

「LOOP CONNECT」：
i.LINK対応機器間の接続において、接続がループになっている。

「NO NAME」：
i.LINK接続されている機器に、製品名またはメーカー名などの情報がないときに表示します。

「NO SIGNAL」：
i.LINK対応機器でもレシーバーのように再生信号を出力しない機器や本機で受信できない信号を出力する機器を選択した時に表示します。

「PQLS OFF」：
再生中にPQLSの機能がOFFになったときに表示されます。このとき、音が瞬間的に途切れます。

「PQLS ON」：
再生中にPQLSが機能がＯＮになったときに表示されます。このとき、音が瞬間的に途切れます。

「UNKNOWN」：
i.LINK接続されている機器の情報が認識できないときに表示します。

保証とアフターサービス

保証書(別添)

保証書は、必ず「販売店名・購入日」などの記入を確かめて販売店から受け取っていただき、内容をよくお読みのうえ、大切に保管してください。

保証期間はご購入日から1年間です。

補修用性能部品の保有期間

当社は、この製品の補修用性能部品を製造打ち切り後8年間保有しています。性能部品とはその製品の機能を維持するために必要な部品です。

修理に関するご質問、ご相談

お買い求めの販売店へご相談・ご依頼ください。

修理を依頼されるとき

修理を依頼される前に取扱説明書の「故障かな?と思ったら」の項目をご確認ください。それでも異常のあるときは、必ず電源プラグを抜いてから、販売店へご依頼ください。ご転居されたり、ご贈答品などで、お買い求めの販売店に修理のご依頼ができない場合は、別添の「修理窓口・ご相談窓口のご案内」をご覧になり、修理受付センターにご相談ください。

連絡していただきたい内容

- ご住所
- お名前
- 電話番号
- 製品名:AVマルチチャンネルアンプ
- 型番:VSX-AX3i
- お買い上げ日
- 故障または異常の内容(できるだけ詳しく)
- 訪問ご希望日
- ご自宅までの道順と目標(建物や公園など)

■ 保証期間中は:

修理に際しては、保証書をご提示ください。保証書に記載されている当社の保証規定に基づき修理いたします。

■ 保証期間が過ぎているときは:

修理すれば使用できる製品については、ご希望により有料で修理いたします。

本製品は家庭用オーディオ機器(オーディオ・ビデオ機器)です。下記の注意事項を守ってご使用ください。

1. 一般家庭用以外での使用(例:店舗などにおけるBGMを目的とした長時間使用、車両・船舶への搭載、屋外での使用など)はしないでください。
2. 音楽信号の再生を目的として設計されていますので、測定器の信号(連続波)などの増幅用には使用しないでください。
3. ハウリングで製品が故障する恐れがありますので、マイクロフォンを接続する場合はマイクロフォンをスピーカーに向けたり、音が歪むような大音量では使用しないでください。
4. スピーカーの許容入力を超えるような大音量で再生しないでください。

S26_Ja

長年ご使用のオーディオ製品の点検をおすすめいたします。こんな症状はありませんか?
・電源コードや電源プラグが異常に熱くなる。
・電源コードにさけめやひび割れがある。
・電気が入ったり切れたりする。
・本体から異常な音、熱、臭いがする。

故障や事故防止のためすぐに使用を中止し、電源プラグをコンセントから抜き、「保証とアフターサービス」(上記)をお読みの上、修理受付センター(裏表紙)に点検をご依頼ください。

さくいん

本機を操作するときの主な用語や表示をまとめました。参照ページに進むと、それぞれに関連する情報があります。

五十音順

アルファベット順

記号・数字順

ご相談窓口　・　修理窓口のご案内

パイオニア商品の修理・お取り扱い（取り付け・組み合わせなど）については、お買い求めの販売店様へお問い合わせください。
なお、修理をご依頼される場合は、取扱説明書の『故障かな？と思ったら』を一度ご覧になり、故障かどうかご確認ください。それでも正常に動作しない場合は、①型名 ②ご購入日 ③故障症状を具体的に、ご連絡ください。

●ホームページ 「商品についてよくあるお問い合わせ」FAQのご案内　http://faq.pioneer.co.jp/faqnavi/piofaq/top/navi.cgi

<下記窓口へのお問い合わせの時のご注意>市外局番「0070」で始まるフリーフォン及び「0120」で始まるフリーダイヤルは、ＰＨＳ、携帯電話などからは、ご使用になれません。
また、【一般電話】は、携帯電話・PHSなどからご利用可能ですが、通話料がかかります。

商品のご購入や取り扱いについてのご相談窓口

カスタマーサポートセンター（全国共通フリーフォン）

受付　月曜～金曜 ９：３０～１７：００、土曜・日曜・祝日 ９：３０～１２：００、１３：００～１７：００（弊社休業日は除く）

●家庭用オーディオ／ビジュアル商品のご相談窓口およびカタログのご請求窓口	フリーフォン ００７０－８００－８１８１－２２
一般電話	【一般電話】０３－５４９６－２９８６
●カタログ請求とメールマガジン登録のご案内	http://www.pioneer.co.jp/support/ctlg/index.html
●ファックス受付	０３－３４９０－５７１８

部品のご購入についてのご相談窓口

●部品（付属品、リモコン、取扱説明書など）のご購入については、部品受注センターへお問い合わせください。

部品受注センター

受付　月曜～金曜 ９：３０～１８：００、土曜・日曜・祝日 ９：３０～１２：００、１３：００～１７：００（弊社休業日は除く）

電話（ﾌﾘｰﾀﾞｲﾔﾙ）０１２０－５－８１０９５　ファックス（ﾌﾘｰﾀﾞｲﾔﾙ）０１２０－５－８１０９６
一般電話　０５３８－４３－１１６１

修理についてのご相談窓口

●お買い求めの販売店に修理の依頼が出来ない場合は、修理受付センターへ（沖縄の方は、沖縄サービスステーションへ）

修理受付センター（沖縄県を除く全国）

受付　月曜～金曜 ９：３０～２０：００、土曜・日曜・祝日 ９：３０～１２：００、１３：００～１８：００（弊社休業日は除く）

電話（ﾌﾘｰﾀﾞｲﾔﾙ）０１２０－５－８１０２８（ゴーパイオニア）　ファックス（ﾌﾘｰﾀﾞｲﾔﾙ）０１２０－５－８１０２９
一般電話　０３－５４９６－２０２３

沖縄サービスステーション（沖縄県のみ）

受付　月曜～金曜 ９：３０～１８：００（土曜・日曜・祝日・弊社休業日は除く）

一般電話　０９８－８７９－１９１０　ファックス　０９８－８７９－１３５２

ＶＯＬ．009

JIS C 61000-3-2適合品　D50-5-10-1_A_Ja

JIS C 61000-3-2適合品とは、日本工業規格「電磁両立性－第3-2部：限度値－高調波電流発生限度値(1相当たりの入力電流が20A以下の機器)」に基づき、商用電力系統の高調波環境目標レベルに適合して設計・製造した製品です。

パイオニア株式会社　〒153-8654 東京都目黒区目黒1丁目4番1号

<04G00001>　Printed in　<ARA7196-A>